
シャンドレーの騎士団～知と血の断罪～

カーレンベルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャンドレーの騎士団と知と血の断罪

【Nコード】

N4577H

【作者名】

カーレンベルク

【あらすじ】

1820年のフランス。シャンドレーという架空の港街で、ある夜、一人の男が親に捨てられた少女と出会う。子供好きの彼は、少女を連れて帰ろうとするが、彼は貧乏だったため、一人で生きていくのが精一杯。そこで彼は、この少女を人柄の良い貴族に預けようとする。少女に幸せになってもらいたい一心だった。しかし、彼は逆に騙されて、少女を冷酷な男に連れ去られてしまう。彼はこの時、貴族に復讐を誓った。そして今までの善良な自分を呪った。彼は悪の道へと足を踏み出す。少女を守るためだったらどんなことで

もする。、自分を裏切った善に、そして貴族たちに知と血の断罪を
遂行する。シャンドレーの騎士団の長として。

序章 金装飾の仮面

フランスのとある港街シャンドレーでは、その夜おぞましい出来事が起こっていた。

貴族の館の中で、メイドのかん高い叫び声が聞こえる。

ガラスや花瓶の割れる音。

ドアの木枠がミシミシと分解され、次々ともぎ取られ、壊れてゆく。

床には赤いカーペットに、倒れた拍子に垂れたしよく台の白い口ウと、泥にまみれた足跡。

殺人という惨劇の最中を思わせるような乱れた景觀が、そこにはいたるところに散らかっていた。

部屋の中で、男のうめき声が聞こえる。

白い色地の中央に盾のレリーフが施してあるドアは蹴破られ、中には四人の黒い足首まである長いマントに、顔をヴェネチアの晩餐会ですのような仮面で覆った集団が一人の貴族の男を取り囲んでいた。

「なんだ、お前たちは！」

貴族は男たちに向かってピアノにしがみつकिながら、必死に威勢を張っている。

ひざは震え、じりじりと歩み寄る男たちに、貴族はなんとか彼らを追い返そうとピアノの上にあった木の楽譜を投げつけたり、近づくなど叫ぶが、男たちは帰らずに一瞬のすきについてサーベルを抜き、彼ののど元に突き立てる。

「お前たちは誰なんだ！」

恐怖にさらされた貴族の心は揺れ、息はすっかりあがって、額からは汗がにじみでていた。

「誰だか知りたいか？」

四人のうち一人だけはほかの三人の気味の悪い赤の仮面とは別の、金装飾の仮面をつけていた。

その男が貴族に向かって、突如そんなことを言い出したのだ。

貴族はかつらがずれないように、ただ首を上下に動かした。

「そうか。なら教えてやろう。だが、その前にお前に言うておくことがある。行動で示してやるからよく見てろよ。」

貴族は、見ていなければ殺されてしまうに違いないと思ったのだらう。

自分の地位も忘れて、男を神でも崇めるような畏怖の目で見つめた。

しかしそれが貴族にとっては不幸だということを、赤い仮面の三

人は知っていた。

「やれ！」

金装飾の仮面の男が合図するとともに、残りの三人は突然貴族に向かつて、すさまじい勢いで暴行を加えた。

男は野太い哀れな悲鳴をあげて腕で頭を押さえ、悶え苦しむ。

「や、やめろ、やめてくれ！」

貴族の声もむなしく、男たちは彼を殴り続けた。

しばらくすると、貴族の鼻からは血が垂れてきて、顔には黒ずみ
ができた。

「よし。もういいだろう。あとは俺がやる。」

貴族が口を閉じる行為もつらそうに、あごをヒクヒクと動かすま
でになったとき、ようやく金の仮面の男が出てきて止めに入った。

彼は貴族に近づいていくと、ずれかかっていたかつらをはぎ取り、
かれの髪をつかんで言った。

「あの子をどこへやった？」

男の目は仮面越しからでも、これでもかというぐらい見開かれ、
今にも眼球が飛び出してしまいそうに貴族を圧倒した。

「お前がやったのは分かっているんだ。どこだ？」

「…。」

二度の問いかけにもかかわらず、貴族は沈黙を続けた。

それどころか二人の顔の距離が最も近づいたときを狙って、男の仮面につばをかけたのだ。

男は仮面をとった。

貴族は男の顔を見てやろうという気でいっばいだったから、彼の本心には気づくことができなかった。

貴族はさぞ、恐怖と怒りにうち震えていただろう。

そのせいで、冷静に物事を判断できずにいた。

だが、男の顔を見るなり、何か言いたげに指で彼の顔を指して、開いたままの口を必死に閉じようとした。

「殺してやる！」

金の仮面を投げ捨て、男が叫んだ。

次の瞬間、男は貴族をうつぶせにして、床のカーペットに彼の頭を擦り付けると、全身の力を腕に込めて、彼の顔をものすごい速さで引きずった。

「いやあああああああっ！」

カーペットが砂の流れる音を立てて、時折、人間の鼻の骨が折れるような気味の悪い音が、貴族の断末魔の叫び声とともに、部屋中を支配した。

「ああああーっ！あ、あああっ！熱いっ！やめろ、顔があっ！私の顔があああっ！」

「もう一度だけ聞く。あの子はどこだ？」

貴族の唇は、ところどころ皮がむけており、激痛で彼はもはや声も出すこともできずに、ただひとさし指で部屋のピアノのほうを指すと力尽きて息絶えた。

それから夜が明けた翌日のこと、シャンドレーの警察長官を務めるフランソワがメイドの知らせを受け、兵隊を連れて駆け付けた時にはすべてが終わっていた。

貴族の死体はすでに棺桶に収められていて、カーペットにしみ込んだ、鉄くささがかすかに残る血の跡が事の惨憺たる様を描いていた。

「なんとひどい。強盗にしてはひどすぎる。」

フランソワは自分の手でカーペットを触ってみて、ひどく顔を歪ませた。

すでに血は乾いてはいたが、彼は兵士の軍服に自分の指を衝動的になすりつけ、べっとりとしたいやな赤い液体をふき取った。

「強盗の顔は見たか？」

彼はメイドに詰め寄って言った。

「いいえ、見ておりません。」

「そうか……」

しかし、すぐ後になってメイドは付け加えた。

「見えなかったのです。」

「何？どういう意味だ？」

「その……全員が仮面をつけていたもので。その後は、気絶して何も……」

彼女は決まりが悪そうに、目のやり場に困りながらそう言った。

「仮面に、強盗。面白い！」

フランソワは笑っていた。

彼らがこの誉れ高い自分を挑発したと見たのであろうか？

いずれにせよ、幾多の犯罪を自力で解決してきた彼が、昨夜の強盗団に好奇心を抱いたのは確かだった。

彼はこのとき復讐に燃えていた。

フランソワが駆け付けた時に、もう現場は後の祭りになっていたことが、彼の異常な自尊心を逆なでし、それにより、部下の前で大恥をかいたことが一層彼のはらわたを煮えたぎらせた。

フランソワは、怒りと、傲慢すぎるほどの正義感を秘め、ピアノの上に置いた手を握りしめると兵士たちに合図した。

「行くぞ！」

まだ若さの残る顔だちと金髪の男の後ろに兵士たちが続いた。

「僕見たんだ。昨日の夜に仮面をつけた怪しい人たちが、馬小屋から馬に乗って出てきたところをね。かっこよかったよ。騎士みたいだったんだ。」

ふと、貴族の屋敷から出てきたフランソワは振り返った。

近くの路上で、二人の少年がそんなことを話していた。

第1章 1820年のフランスのとある小路にて

一八十五年、ナポレオンが英領セントヘレナ島に流され、崩御。

フランスはこの頃、ルイ十八世の復古王政によって統治されていた。

それから六年後の一八二〇年の秋、シャンドレーは表面上では平和だったが、フランス革命時に亡命した貴族たちは庶民に復讐の炎を燃やし、町は焦げてしまいそうになっていた。

そしてこの町では、ある男が、のちにシャンドレーの騎士団の長として権勢をふるうことになる。

ある庶民の男が、夜のさみしいシャンドレーの小道を歩いていた。

片手に安い酒瓶を手にとつてぶらぶらとさせては、時折立ち止まって、その場でビンを傾けて自分のひげの生えた口にあてると、いかにもうまそうにのどを潤した。

男は中年だった。

中年で無精ひげの男だ。

服は薄汚い汚れがたまっていたせいで、黒ずみつて変色していた。

髪は短くて黒く、鼻ばかりがわずかに高かった。

「おっと、だいぶ遅くなったな。早く戻らないと。」

彼は空を見上げたとき、急用を思い出したのだろうか、突然そんなことをつぶやいて、早足で歩きだした。

しかし、歩みの振動で水音を立て始めたワインをみて、どうしても飲みたくなった。

まるで血のおいをかぎつけたサメのようだった。

「近道で行くか。」

なるほど、それなら飲みながら帰っても遅くならずにすむ。

我ながら名案だと男はせせら笑って、満足げに細い路地へと入っていった。

男が入った路地は闇に満ちていた。

街灯などはなく道幅が狭いため、せりたった石の壁が影になっていて、わずかに差し込む月の青白い光が唯一の灯りだった。

夜にこんな道を通るのは気が引けるだろうが、貧しい自分を襲い

に来る者などいるはずがない。

それ以前に、酔っ払いに近づく者などいないと彼は勝手に考えていたから、恐怖などは心にひとかけらも存在していなかった。

道は進むにつれて湿ってくる。

石の地面の間からはコケが生えていて、不気味な雰囲気醸し出していたが、そのコケも栄養不足で茶色く変色して、一層不気味さを増していた。

「まいったな。もうなくなったのか。」

男は空になったビンを大げさに振ると、逆さにして舌をだし、最後の一滴を味わおうとした。

だが、水滴はなかなか出てこない。

こんなことなら近道をすべきではなかったと男は後悔し、舌打ちするとビンを石の壁に沿って置いた。

「助けて。」

ふと近くで声がした。

それも少女の声だ。

最初、彼は酔っていたからきつと空耳だと思ったが、耳よりも自分の目でその人物を確認したことで、これは現実で、自分は酔ってなどいないと信じた。

「助けて。」

声の主は壁に寄りかかり地べたに膝を曲げて座っていた。

道の隅は壁の影で暗くなっていたから、人の存在に気づくのは難しい。

助けてという声さえ聞こえなかったら、彼はその場を通り越していただろう。

彼は声のするほうへ歩いていった。

そこには小さな少女が、ボロボロになって破けた服を着て座っていた。

肩まであるブロンドの乱れた髪に、丸い顎の輪郭、細い手足。

見た目は六、七歳ぐらいだろうと思われた。

どうして子供がこんな場所で座っているのか？

話しかけたらどうせ厄介事になるに決まっている。

彼は厄介事には今まで手を出さずに生きてきた。

そうしなくては生きることができない世の中だと思っていたからだ。

だが、彼にも危険を冒してまで手にいれたいものがあるもの。一つだけ

あつた。

それが、今日の前にいるのである。

「今まで生きてきた中で、こりや最大の難所だな。」

彼はこれまで金具職人として独り身で生きてきて、職に生涯をささげてきた。

しかし一人でいると、どうしても他人の子供の幸せそうな顔が焼き付いて離れない。

そのたびに彼は求婚しようと思うのだが、いったい誰が貧乏で強面の汚い男についてくるだろうか？

そのため彼はあと一歩が踏み出せずに、結局はずるずると年を重ねていくことになった。

「君はどこの子だい？こんな時間に一人でいると危ない。おじさんが親のところまで連れて行ってあげよう。」

自然とそんな言葉が口から出てきた。

子を持ちたいと思うあまり、頭が勝手に口を開かせたようだ。

どのみち、誰も歩いていないような夜道に子供が一人ぼつんと座っていれば、誰でも家へ、安全な場所へとかくまってやりたくなるものだ。

「もういないわ。私を置いてどこかへ行ってしまったのよ。」

「いないって、もしかして…」

「違うわ。天国じゃなくて、どこかへ行ったのよ。」

男は内心ほつとした。

もしこの子の両親が亡くなっていたら、彼は子の面倒を見なくてはならない。

彼の仕事は自給自足となんら変わらないものであったため、子供まで面倒をみる余裕はなかった。

「なんだ。君は迷子か。おじさんと一緒に親のところまで行こう。さあ、早く。ここにいちやいけない。」

しかし、彼は彼女に手を差し伸べたとき、ふと思った。

親がどこにいるかわからないのに、どうやって探せばいいのか？

それに、親がどこにいるか分からないということは、この子が捨てられたことを意味するのではないか？

こんな夜更けに子供が一人で泣いているところを見ると、少女が親を探し、一日中歩きまわったあげく、途方に暮れてここにたどりついたことは十分考えられることだ。

彼は当惑した。

一人の人間として、彼女を見捨てるなどということはできはしな

い。

だからといって、親が子を探していることすらはつきりしない。子を連れていったら最期、貧乏な彼は闇の商売に走るしかない。

「おじさん、どうしたの？」

座ったまま彼女は、ため息をついている男のほうを見つめる。

「いや、なんでもない。おじさん、今大事な考え事をしているんだ。だから少し待っててくれないかい？」

「ええ、いいわ。そうしたらおじさんの家まで連れていってくれるのね？私のお父さんとお母さんはもういないもの。」

彼女の言葉に彼はさらに悩み苦しんだ。

すでに彼女の心の中には両親の姿が映っていなかったからだ。

「お父さんとお母さんに会いたくないかい？」

彼女はすぐに横に首をふる。

「どうして？」

「言われたの。私の面倒なんてみていられなくなっただって。うちにはもうお金がないから、誰かのお家にいれてもらいなさいって。それでね、お父さんが絶対に探しちゃだめだぞって言ったの。なのに私が探して言いつけを守らなかったから、もう怒って会いにきて

くれなくなっちゃったの。だから、お願い……」

彼女は切ない気持ちを必死にこらえていたが、次第に顔を歪ませた。

涙は枯れて出てこなかった。

彼の心は揺さぶられた。

たとえば彼女のみずばらしさや、親に捨てられた哀れな部分から目をそらしても、心の揺れは止まらない。

彼には道が残されていなかった。

いや、まだ一つあった。

彼はとつさに、この子の両親がいないなら、どこかの人柄のよい貴族に預けてしまおうと考えた。

自分の中の子供好きな頭がおかされて、この子を手放せなくなる前に引き取ってもらおう。

そうだ、そうしよう。

まるで逃げるように、彼は素早く頭の中で物事を整理した。

彼女には、貴族に預けるといふ事実はその時が来たら話そうと思っただ。

それなら、たとえば少女が拒んでもいまさら決まったことを変えら

れはしないのだ。

大丈夫、優しい男を選べば納得してくれるだろう。

彼は待ちくたびれて、壊れてつま先が敗れた靴で地面をほじくり返している彼女に言った。

「ごめんよ。さあ、こっちにおいで。今からおじさんの家に行こう。」

彼は彼女の手を引いた。

「あっ！」

少女は突然手を握られて不安の声をもらした。

「どうした？」

「ううん。なんでもない。」

いったい彼女の頭の中で何が起きたのか？

ここにいる男が悪者だったら怖いとか、私はこれからどうなってしまうのかといった、先の見えない道に踏み入ることへの恐れなのか？

彼女はその不安を完全には断つことはなかったが、彼を握りしめる手には何かにすがりつくような、または守ってくれるものを求めるような力強さがあつた。

「あなたのお名前は？」

彼女が男に訊ねた。

「俺はアンドリユーだ。」

「そう、私はね、リディルっていうの。」

彼は耳をふさいでおくべきだったとその時思った。

たとえ名前でも、知ってしまったえば愛着がわいてしまう場合がある。

子供好きの彼にはなおさらだった。

しかし、そんなことをすれば彼女をがっかりさせ、子供好きの自分が子供に嫌われるという悪夢にさいなまれることになる。

それに、耳をふさぐはずの手は、彼女のやわらかくて小さな手にしっかりと握られていたから、彼は、これはもう何かの運命だと思っ
てあきらめるしかなかったのである。

「よろしく、リディル。」

たった数日のことなのだ。

彼はたった数日で、貴族を探して彼女を手放すのだ。

それが分かっていただけに、彼女によろしくと言ったのだ。

彼女を数日だけでも自分の子として面倒をみたいという本能は隠

し切れていなかったから、よろしくと言ったのだ。

少なくともこのときは。

「よろしく、アンドリューおじさん！」

彼女は彼のほうを向いて、にっこりとほほ笑んだ。

第2章 刻まれたリデイルの存在

「よろしく、アンドリユーおじさん！」

ふと、過去の出来事が頭をよぎる。

それはつい先日起こった、彼にとって喜ぶべきなのか、よく分からない出来事だった。

少女の無邪気な笑い声が深い眠りの中で響き渡る。

「よろしくね！」

そう言っただけ彼女はアンドリユーの手に自分の手を重ねて目を閉じる。

「よろしく、私の新しいおじさん。よろしく、私の、私のお父さま……」

「えっ？なんだって？」

彼は耳を疑った。

今確かに自分のことをこの少女は父だと呼んだのだ。

「もう一度言ってくれないか？」

こんな夢のようなことは断じて起きないと思っていた。

自分が父だと呼ばれる日など、来ないと考えていた。

「もう一度？」

「そうだリディル。もう一度だけでいいから言ってくれ。」

こうなったら直接聞いたほうが早い。

リディルは少し頬を赤く染めて、今度は彼の耳元で小さくささやいた。

「よろしく、アンドリユーお父さま。私を違う男の人のところへ売ってしまうの？」

「うわあ！」

ものすごい勢いで、彼はベッドから跳ねるようにして体を起こした。

全身はいつのまにか大量の汗で濡れていた。

季節は秋とはいえ、まだ残暑日が続いている。

そのせいで汗をかいたのかもしれないが、彼の心臓は激しく脈打ち、それが耳の血管にまで勢いを失うことなく、ドクドクと活発な音を立てていた。

「リディル！」

そうだ。

彼女は彼の思惑を知ってしまったのだ。

今すぐにも、ということなのか説明して弁明しなくては。

しかし彼は、ベッドで静かに横になっっているリディルを見たとき、自分は夢という錯覚にとらわれていたのだと確信した。

彼は急に少女の顔をのぞいてみたくなった。

どうしてだろうか？

彼には子供がいなかった。

だからとは言えないが、彼にとって夢のような出来事が起こったことで、リディルが本当にそこにいるのか確かめたいという気持ちになった事は明らかだった。

アンドリユーは幻を見ているのかもしれないという不安に駆られていた。

彼自身はそのことに気づいていたが、嬉しさのあまり、今度は不安ではなく自分が今までずっと待ちわびていた状況を、心ゆくまでかみしめたくなった。

「リディル。俺のリディル…」

いつのまにか彼女の寝顔を見る彼の表情はゆるんでいて、口からはとんでもない言葉が出てきた。

すでに彼の心にはリディルが刻まれ始めていた。

「ちくしょう！」

彼はこの子を手放さなくてはならない。

そんなことはとつくの昔に分かっていたはずなのに、目覚めたときに襲ってくる睡魔より強力な誘惑が胸のあたりを痛ませ、しつこくつきまとう。

アンドリューはリディルのほうを見ないようにして、頭から布団をかぶり、眠ろうとした。

「だめだ。忘れる、忘れるんだ。早く眠って忘れる。くそ、この悪魔め！あっちへいけ！」

彼は必死で誘惑を遠ざけようと、呪文のように何度も同じ言葉を唱えた。

「くそ！俺はリディルになんてことを言っているんだ！」

誘惑をはねつけるあまり、彼はリディルに罵声を浴びせていることに気がついた。

しかしこれでは誘惑にとりつかれてしまふ。

彼はこの後、あっちへ行ってくださいとか、無理に敬語を使ったりして半泣きになりながら眠りにおちていった。

「おじさん、起きて、朝よ！」

元気いっぱい少女の声が聞こえる。

目を開くと、すでに明るいい日差しが差し込む部屋の中で、リディルがアンドリューの肩をゆすっていた。

「どうした、リディル？早起きだな。」

彼はそれだけ言うと、布団にもう一度もぐろつと、起こした体を横にしようとした。

「ダメ。もうお昼よ。」

「何？」

彼はあわてて窓の外を見た。

周りの店はもうとっくに開いていて、大勢の買い物客でこったがえしていた。

「おじさんのお仕事は？」

「仕事だつて？」

今日彼は幸いにも休業日だったから、ゆっくり眠っていたのだが、目の前のリディルを見て重大なことを思い出した。

この子を預ける貴族を探さなくては。

昨日のような夢は一度でたくさんだ。

「ああ、おじさん今日はある人と出会ってお話をしにいくんだ。怖い人のところだ。だから、君はついてきちゃだめだ。」

「私、怖くないわ。あと、リディルって呼んで。」

彼女は物怖じせずに言った。

親に捨てられた後だというのに、少しも悲しいところを感じさせない。

そんな彼女の姿に、彼はなんとという気丈な子なのだろうと驚かされた。

それに、彼が愛着がわいてしまわないように、君と呼んだことに對して彼女は反応した。

リディルは本当はさみしいのではないのか？

あるいは、彼の考えに気づいたのだろうか？

いや、そんなはずはない。

突き放されると分かっていて、冷静でいられる子などいるはずがない。

「危ないからリディルはここでお留守番だ。いいかい？」

彼は試しに彼女の名を呼んでみた。

「うん！分かった！」

えへへ、と彼女は笑ってみせる。

さらには彼の体に抱きついて顔を服にうずめてきた。

「お…」

彼は言葉を失った。

「おじさんのにおいがする。」

それはまさに臍物をえぐられる感覚だった。

リディルは彼を行かせないように、わざとこんなことをしているのではないか？

そんな妄想に駆られ、息苦しさで体中の血液が逆流していくようだった。

「リディルはさみしがり屋さんだな。でも待っていなさい。」

彼は彼女の髪に手を置いて出て行った。

しかし外へ出た後も、リディルの髪を触った手が妙に気になった。

あのつやのあるブロンドの髪を、もう一度だけ触ってみたい。

口に出すことはなかったが、彼はリディルを感じずにはいられなくなっていた。

第3章 慈愛の代役

アンドリユーは茶の間へと案内された。

貴族という貴族を訪ねた結果、やっとのことで子を引き取ってくれる者を見つけることができた。

見つけたとは言っても、実際は彼が子の引き取り手を探していると聞いた貴族が逆に彼に会いに来たということであった。

おそらく、彼が訪ねた貴族に知り合いでもいたのだろう。

それにしても、どこの子か分からない少女を、血にうるさい貴族が、こうも簡単にリディルを引き取る相談に取り合ってくれるとは思っていなかった。

それだけに彼は、この貴族は庶民からの成り上がりか、信心深い貴族かもしれない。

あるいはアンドリユーと同じく、ただ子供が好きなのかもしれないと、なるべく良い方向に期待を膨らませた。

「お持たせしてすみません。さあ、おかけになってください。」

少し太り気味の白いかつらをかぶった、フィリップという名の中年貴族が現れてアンドリユーに言った。

丁寧な言葉遣いと、ゆっくりとした穏やかな口調。

第一印象は、彼の求めていた理想にきわめて近かった。

「それで、この子はどこから来たのですか？」

「分かりません。」

アンドリューは正直に答えた。

たとえ嘘をついたところで、リディルがすっかり喋ってしまっただろうし、そこで文句を言う人なら、アンドリューが彼に少女を預けるのは危険と判断しただろう。

「まあ、いいでしょう。ここのところ、ようやく戦争も終わりましたし、孤児の一人や二人、いてもおかしくありません。」

「よかった。」

フィリップの言葉を聞いて、アンドリューは胸をなでおろして一息つくために、メイドが出してきた紅茶を口に入れた。

「ところで、その子は今何歳ですか？」

フィリップが彼に言った。

「年はまだ聞いていませんが六、七歳くらいのかわいい女の子ですよ。女の子ではご不満ですか？」

「とんでもない。女の子だろうと男の子だろうと、子供には変わりありません。引き受けましょう。」

「本当ですか？ありがとうございます。ありがとうございます…」

彼はフィリップに何度も力強い握手をして、リディルがこれから幸せになれると喜びをあらわにした。

「ではさっそく明日の朝、その子を引き取りに来るということですよ。よろしいですか？」

「ええ、お願いします。」

満足感で満たされた帰り道のことだった。

アンドリユーは確かに満足している。

良い貴族を見つけた。

これである少女も幸せにしてやれるし、仕事をして今までどおりに生きていられる。

悪いことなど何もないはずだった。

「いや、まさか、そんな…」

しかし彼は思い出してしまった。

フィリップの屋敷へと行く途中で、リデイルの髪に触れた手が、何かを求めるように落ち着かなかった事を。

「いや、だめだ。今だけだ。我慢するんだ。」

思えばよく考えもせずに明日の朝という約束をしてしまった。

言葉ではこれでよかったのだと言いつつ、彼は頭の中でリデイルを手放したくないと悶えていた。

「明日の朝なんて、早すぎる。」

リデイルを愛することに関しては誰にも負けない。

俺のリデイルだ。

俺のリデイルなんだ。

彼は自分に言い聞かせた。

思いつめるあまりに、自分の今までの行動とは逆の考えが頭の中に蔓延した。

慈愛の代役はフィリップに移ろうとしている。

今度はあの小太りな貴族が彼女をリデイルと呼び、リデイルは彼をおじさんと呼ぶ。

貴族だから、おじさまといったほうが適当だろうか？

もしくは夢に出てきたときのように、フィリップをお父さんと、フィリップお父さまと呼ぶ時がくるのだろうか？

「嫌だ！」

彼はいつの間にか自分の家を通り過ぎて、近くの噴水のある広場で叫んでいることに気がついた。

アンドリユーの様子を見た子供が、母親と思われる女性に話しかけて彼のほうを指さす。

女性は危ない人でも見るような目で彼をにらみ、子供を連れて早々にその場を立ち去った。

知らないほうが、少女を知らないほうが良かったとでもいうのか？

話してしまおう。

これまで彼が考えてきたこと、やってきたことを、何もかもすべて。

彼は彼女を失う悲しみから、どうしようもなく逃げ出したくなつたのだ。

アンドリユーは急いで自宅へと帰った。

「リディルは、リディルはいるか？」

彼は家に入るなり、彼女の名を呼ぶ。

「おじさん、おかえりなさい。どうしたの？」

「い、いや、なんでもない。ただ一人に生きてきたから心配でね…」

彼は真実を言えなかった。

自分の生活を失うことへの恐れ。

一方で少女を失うことへの後悔。

人間は追い詰められたとき、無意識に自分を守るようにできている。

アンドリューはこの時そう思った。

悲しかった。

自分の本能は、彼女なしでも何も困ることはなく、生きていける。

そう言ってリディルを冷酷に切り捨てることをよしとする。

そんなこと認めたくない。

絶対に認めるものか。

きつとこの子に対する愛が足りないからだ、彼は前向きに考え

ることにした。

「愛だって…」

はっとして思わず口から言葉がでた。

彼にとって少女を愛することはタブーだったはずだ。

それなのに、あれほど気をつけていたのに、いつのまに自分は彼女のそばにいて、彼女を見、彼女にふれ、近づいていったのか？

そしてついには愛を意識するまでになったのか？

「おじさん、私を愛してくれるの？」

「今日はもう疲れた。少し休ませてくれるかい？」

彼はリデイルの問いかけには返事をせずに、部屋の隅にあるベッドへともぐりこんだ。

できるだけ眠って気を楽しにしたかった。

明日になればすべてが終わるのだ。

「リデイル。明日の朝、おじさんの友達が君に会いに来るそうだから、会ったらその人の家まで遊びに来てほしいそうなんだ。だから、早く起きてほしい。いいね？大丈夫。とても優しい人だから。」

彼女が笑顔で返事をした事を確認すると、彼はそれ以上彼女を見ないようにして、頭から布団をかけた。

明日になれば、眠ってしまえば勝手に時間が進んで明日になっているのだ。

彼はこの時、彼女の額に、うつすらと赤みを帯びたほほに接吻したい気持ちでいっぱいだった。

第4章 美しき復讐の萌芽

「私を愛してくれるの？ねえ、おじさん。私を愛して。私を、お父さまが愛して。」

リディルが一面、白い花畑に立っている。

嬉しそうに笑みを浮かべ、そばになぜか一つだけ咲いていたアイリスの花を摘み取って、彼に手渡す。

そして彼のほほにキスをする。

そよ風が吹いて、ときおり彼女の髪を揺らす。

彼女を初めて目にした時、その髪はひどく乱れていた。

それが今では、昨日手に触れた時よりもきれいに整っている。

「リディルは良い子だな。」

アンドリユーは花をくれたお礼にと、彼女の髪を触ろうとする。

だが、彼女は突然、彼の手を避けるように後ずさりした。

「リディル？いったいどうした？」

「ダメなの……」

「ダメって、何が？」

アンドリューにはまったく理解できなかったが、すぐにその意味が分かった。

「私の髪はね、フィリップお父さましか触っちゃいけないのよ。」

「ああ。そうとも。」

いつの間にかアンドリューの横にいたフィリップが言った。

「君は私にこの子を譲った。だから君は今日から、リデイルのおじさんでしかない。君に父親の資格はない。もちろん、彼女を抱くことも、彼女のほほにキスすることもできない。彼女の髪をなでつけることもね。分かったかね？」

「そんな……」

先ほどからフィリップの態度が妙に陰険だ。

彼は少し頭にきて、目の前の貴族に言い放った。

「それくらいはいいだろう？他人の子の髪を触っちゃいけない法律がどこにあるって言うんだ？」

「いい加減にしたらどうなんだ？」

フィリップの性格からは思いもよらない反論がきた。

「君が私に押しつけたんだ。リデイルがいなくて気が楽になっただろうに。今さら何が不満だと言うんだね？薄汚いネズミ君。」

「なんだと…」

「おっと。もうこんな時間だ。リディル、早くしないと学校に遅れるよ？私が馬車で送らせよう。」

彼はリディルの手を引いて消えてゆく。

「リディル！待ってくれ。リディル！」

「さようなら、私のおじさん。」

彼女は彼に一言告げて、カモミールの白い花畑とともに遠ざかっていく。

耳元で鳥のさえずりが聞こえる。

窓が開いているためか、朝のひんやりとした、しかし悪寒を感じさせないさわやかな風が、寝ているアンドリューの頬を滑るように通り過ぎてゆく。

「今日もいいお天気ね。小鳥さんたちも晴れるって言っているみたい。でも、お昼ごろから曇り空だってお日様は言っているわ。おじさんはどうなの？晴れると思う？」

リディルが悪夢から目覚めたばかりの彼に問いかけた。

「大丈夫。きっと晴れるさ。」

彼はベッドから起き上がると、窓枠に腰掛けているリディルを持ち上げると、そつと木の床の上に立たせた。

「こんなところに座っていたらあぶないぞ？」

そう言つてアンドリューは彼女の髪をなでた。

夢ではない。

本物だ。

これがリディルなんだ。

あんな夢の直後だっただけに、彼は思わずリディルを抱きしめた。

「リディル。よく聞いておくれ。」

言つてはならない。

彼の言葉とは逆に、本能が、欲望が猛烈な勢いで邪魔をしてくる。

だが、彼は自分に嘘はつけなかった。

嘘をついてしまつたら、彼は悪者で、少女を売ることに加担したいまわしい獣なのだという焼印を、生涯消えることのない闇を背負い続けなくてはならない。

どんな理由があっても、少女をあのフィリップに引き渡すのは事実であり、彼の負い目になるだろう。

だが、どうしても根っからの悪にはなりたくない。

ここで彼女が本当は売られたのだということを伝えておかなくては、自分にけじめをつけることができずに、一生後悔するだろう。

「おじさんはリデイルのために、リデイルの幸せのために、これからいけないことをするんだ。だから、これから話すことを聞いておじさんのことを嫌いになるかもしれない。それでもよく聞いておくれ。」

「嫌いになんてならないわ。おじさんのこと、愛してるわ。大好きよ。」

愛するという言葉が彼に容赦なく突き刺さる。

罪とはこういうことなんだ。

自分のやろうとしていることは、こうして自らの良心という魂の呼吸を止めていることなんだ。

彼はそう直感した。

「おじさん。昨日言ったこと、覚えてる？私を愛してくれる？」

愛というきれいな言葉を、これから罪をやらかそうとしている者が使うことなどできるのだろうか？

できないだろう。

「リデイルのことは大好きだった。愛していたよ、リデイル。」

我ながらよく思いついたものだ。

昔のよしみとしてなら、犯罪人だろうが大目に見てくれるときもある。

すでに過去の事として彼は答えた。

「本当？嬉しい！」

彼女には彼の本意は伝わっていないようだが、フィリップに売ることだけは伝えなくてはならない。

「リデイル。おじさんは、俺は、今から君を売らなくちゃならない！」

笑顔で喜ぶ彼女の顔を見るのは、これ以上は耐えられなかった。

「え？」

少女の顔からろうそくの火が消えて、あたりが暗くなるように、笑顔がこわばった表情に変わる。

その幼い瞳の奥からは、やはりというか、彼の想像の範囲内で事が起こっているように思われた。

「どうして...」

信じていたのに、あなたは どうして私を裏切るの？

私のどこがいけなかったの？

今からではもう遅いの？

顔を見ているだけで、リデイルの言いたいことが手に取るように分かった。

「ごめんよ、リデイル。でも君の幸せのためなんだ。大丈夫。その人はおじさんよりも優しいから、きっと君を愛してくれる。」

アンドリユーが話をしていると、玄関の戸をノックする音がした。

きっとフィリップがリデイルを引き取りにやってきたに違いない。

「早いな。君の新しいおじさんが来たようだ。さあ、おいで。」

「やだ。」

リデイルは怒った口調で言った。

「リデイル……」

「私、おじさんと離れたくない。今のままがいい。」

そう言って彼女はそこから動こうとしない。

彼はますますリデイルを引き渡しにくくなってしまった。

彼の予想とは違って、この子は売りに出されることを知らされながら、知り合つてたつた二、三日の男にまだついて行こうとする。

これではアンドリユーが、崖に登る彼女をわざと突き落とすみたいだ。

ドアが再びノックされる。

「ちよつと待っていてなさい。」

アンドリユーはもうやけくそになって、事を強引に進めてしまおうと、木でできたドアを開けた。

「すまない、フィリップさん。」

彼はうなだれて下を向いたまま言った。

フィリップの子をもらうときの満足気な表情など、見る気も失せていた。

「子供はどこだ？」

フィリップの声ではない。

思わず前を向くと、見知らぬ男が後ろに馬車と三人の召使いを待

たせて立っていた。

「あんた、誰だ？」

しかし男は彼を鼻で笑って軽くあしらうと、奥に立っているリディルを見て言った。

「フィリップからの伝言だ。彼は急死した。だからフィリップの代理人としてお前をもらいに来た。」

アンドリューは嫌な予感がした。

細くつり上がった目に、人を見下すような口調。

声はつめたく、気軽に話しかけられるようなタイプではなかった。

「そんなことは聞いてないぞ？フィリップがあんたを代理に選ぶとは思えない。悪いが帰ってくれ。」

「おっと。そうはいかない。私はお前の弱みを握ってる。どういうことなのか分かるだろう？」

なんと男はリディルに見えないように、彼の胸に短剣を突きつけた。

きっと彼がリディルを手放すほかに道はなく、さもなければ殺すということだろう。

リディルを引き渡す話はフィリップにしかしていない。

やはり彼がこの冷酷な男をよこしたのだろうか？

いや、そんなこと信じたくなかった。

「誰から聞いたかは知らない。だが、リディルをお前のようなやつに渡すわけにはいかないんだ！」

彼は確信した。

この男を何とかしなくては、必ず彼女は連れていかれてひどい目にあう。

アンドリユーは男の服につかみかかって引き倒そうとするが、彼の後頭部に銃の冷たい鉄の感触が伝わってきた。

「おじさん！」

「リディル、来るな！」

しかし、家の外に出てきて戻ろうとしたリディルを、召使いの一人が捕まえて、馬車のほうへと引きずっていく。

「リディル！」

「おじさん助けて！」

アンドリユーは怒りに震えて男に叫んだ。

「フィリップを殺したのはお前だな？」

「殺しただつて？お前は何も知らないようだな？なぜフィリップがお前に近づいたと思う？彼が優しく見えるからさ。子を引き取るついでに、お前がどこに住んでいるのか聞き取るのが本当の目的だ。」

確かに昨日、アンドリユーは彼に自分の家への道を教えていた。

「おかしいと思わなかったのか？貴族なら、お前に来いと言うはずだろう？」

「そうか、あんたフィリップとグルになっていたのか！」

男は不気味に笑った。

「そのとおりさ。カじゃあいつはお前になわなない。だからこうして私がやってきた。リディルをもらいに。そしてお前を殺しにな。」

男は短剣をもちかえ、その手を高く振りかざした。

「あの子はきつといい値で売れる。売れなければ使用人として扱っただけだが。助けを呼びたいなら無駄だぞ。」

本当にその通りだった。

今は早朝で、外には一人も歩いている者はいなかった。

そのうえ、銃ならともかく、短剣で刺された音で、果たして近所の住民の一人でも気づいてくれる者がいるのだろうか？

「このやろう！こんなことしくなくても、俺はリディルを引き渡すつもりだったのに。どうしてだよ！」

「言っただろう。フィリップは死んだ。となれば、お前が首をたてに振るわけがない。私が無理にリディルを奪ったら、お前は仕返しに来るかもしれないだろう？」

彼が死んだということは本当らしいが、それにしてもひどすぎる。

「さよならだ薄汚いネズミ君。ああ、あと私の名はジェルマンだ。ジェルマン・フロンベール。死ぬ間際の人間に言っても意味はないがね。」

ジェルマンは笑って彼の胸に勢いよく短剣を突き刺した。

「うおっ！」

痛みが貯水池におちた水滴のごとく、胸から全身へと広がってゆく。

息が苦しくなり、短剣の刃がじわじわとアンドリューを弱らせる。

「死ぬ前だから教えてやろう。」

突然ジェルマンが言った。

「フィリップは死んでいない。」

「どういう、ことだ？」

アンドリユーは苦し紛れにたずねる。

「死んだことにしてくれと頼まれてね。あいつも臆病で心配性だ。万が一お前を殺せなかった時のためにな。わかるだろう？あいつは居場所をお前に知られてる。」

「死んで、ないなら、どうしてこんなことを？」

「実は彼には莫大な借金があつてね。私の金と、リデイルの所有権を交換したんだ。ああ、君には借金の話はしていなかったようだ。だから、彼はもう来ないよ。いくら待ってもね。リデイルは私のものだ。もちろん彼がくれば穏便に事が運ぶだろうが、私はお前を殺しておかなければ気が済まないんだ。世の中なにが起こるか分からない。何かのはずみでお前が真実を知る日が来るかも知れないからな。」

「何が望みだ？リ、リデイルを、売って、金、もうけか？」

「ああ、そうだ。それにフィリップは今だけだが、私の駒だ。殺されてはかなわんのだよ。」

「だから、お、お前が、先に、俺を？」

だが、アンドリユーにはもう話す力は残っていなかった。

薄れてゆく彼の意識の中で、最後に記憶にあったのは、すさまじい恨みと、後悔と貴族への復讐の念だった。

よくも騙したな。

よくもリディルを連れ去りやがって。

よくも俺の体を鉄くさい、そこらの短剣で、台無しに、台無しに
しやがって！

もう貴族など信用するものか。

善良な生き方も信用しない。

善良に生きてきて、良いことなんて一つもなかった。

まったく力が及ばなかった。

善が勝というのが世の理と言うなら、どうして俺はやつのような
クズに、こんなスタスタに引き裂かれて、こうしてみじめな姿にな
っているんだろう？

「あ、ああ。リディル…」

彼は手を伸ばし、走り去る馬車を見て少女の名を呼んだ後、地面
に倒れた。

アンドリユーの心の中に黒い溝ができていた。

彼女を守るべきであったのに、本当は守ってやりたかったのに、
なんて自分は馬鹿なんだ。

これからはなんでもする。

彼女のためならなんだってやってやる。

だから。

「だからリディル。もう一度おじさんの前で、笑顔を見せておくれ……」

その後、彼の目の前が暗くなり、何も見えなくなったが、同時に誰かの声とともに体が引つ張られ、持ち上げられる感覚が頭に残った。

第5章 殺しの手助け

熱い。

心の奥底から、怒りのみを頼りに這いあがった闇が姿を現そうとしている。

やがてそれは刃の痛みさえも克服していく。

「痛い。いや、痛くないぞ。俺は死ぬのか？もう死んだのか？」

このまま死ぬなんて、出来っこない。

俺は必ずやつらに報復してやるんだ。

今の彼には、生きていたいという願望よりも、貴族を地獄に葬ってやりたい気持ちのほうが強かった。

「俺が生きて、やつらを倒さなくてはならない。」

生きる希望や喜びとは違った生存を、彼は望んでいた。

悪魔が地の底からよみがえる場合とそっくりの生き返りを望んでいた。

彼自身が、自分を悪魔だと位置付けているのかは分からない。

だが、アンドリユーの心からにじみ出てくる憎しみは、もはや善

人の色を失っていた。

「ここは、どこだ？」

目が覚めると、彼は見知らぬ家のベッドに寝かされていた。

自分の体は包帯で巻かれていて、刺された胸のあたりからは血の跡がうつすらと残っており、白い布切れを赤く染め上げていた。

「気がついたか？」

声とともにがっちりとした体つきの大男が出てきた。

男は白衣を着ていたが、その体躯といい、栗色のはげ頭に近い短髪といい、どう見ても医者ではないように思われた。

「びっくりしたよ。家の前でお前が倒れているっていう知らせがもう少し遅けりゃ、今頃は命を落として棺桶の中だ。」

「オスカー。お前に借りができたな。」

男はオスカーという名で、アンドリユーの古き友人だった。

少し前まで彼は、シャンドレーの軍医をしていて、辞職してからは船大工という体を生かした仕事で生計を立てていた。

「一体、何があつたんだ？」

彼はベッドのそばにあつたイスに座つてアンドリューにたずねた。

「実は……」

彼は事態の一部始終をオスカーに話した。

「大丈夫。俺はお前を軽蔑したりなんてしないさ。ところで、そのリデイルつて子は今どこにいるんだ？俺は軍から足を洗つた身だから、できれば殺しはしたくないが、お前にとつて大事な人間なんだろう？協力してやつてもいいし、お前の復讐したい気は分かるが、どうするんだ？相手は貴族だぞ？敵にまわせば厄介だ。」

彼はアンドリューの話聞いたものの、不安気に言った。

一刻も早く仕返しをしてやりたい。

しかし、あせつてはリデイルを救うことすらかなわないだろう。

「考えろ。考えるんだ。」

彼は片手を額の上にあてて、一人で熱病にでも駆られたかのようにつぶやいた。

「おい、大丈夫か？まだ体が本調子じゃないから無理するな。」

アンドリューの憎しみに満ちた声に、オスカーは驚きを隠せなかった。

軍人としてあまたの戦場を経験し、また軍医として自らの手を他人の血でまみれさせた過去を持つ彼さえも、心の動揺を克服するすべを見失いかけていた。

彼はこんな人間だったのかと疑問に思いつつ、今は友人として励ますほかはなかった。

「そうだ。俺はもう死んだことになっていると思わせておけばいい。」

突然アンドリューが言った。

「ジェルマンの居場所は分からないが、もう一人に聞けばいい。フィリップだ。フィリップの屋敷に忍び込んでリデイルの居場所を聞くん。」

「なるほど。死んだはずの人間が自分の屋敷まで来るなんて、相手は思ってもいないだろう。のうのと酒びたりになっているかも。だが、聞くつて、脅すのか？仕返しを受けるぞ？」

アンドリューは荒い息をして、鋭い目つきをしている。

オスカーは悟った。

「まさか、殺すのか？おい、アンドリュー。なんとか言えって。俺は殺しなんてしたくない。最初にそう言っただろう？」

「俺がやる。」

「なんだって？」

「聞こえなかったか？俺がやつを殺す。血の海に放り込んでやる！うつ…」

彼はいきり立ったせいで激しい胸の痛みをおぼえた。

「その体じゃ無理だ。それに二人じゃ危険すぎる。」

しかし彼はオスカーの忠告をさえぎるように言った。

「いいや。リディルは、俺が守らなくちゃならないんだ。俺のせいで、早くしないと売られてしまう。そうになったらもうあの子を探す手がかりはなくなるんだよ！」

「なら、良い方法でもあるのか？」

オスカーは真剣な目で彼を見る。

「急いでいるのは分かってる。でもお前がいなくなったら、一体だれがリディルを連れ戻すんだ？あの子を捨てた親か？今は俺に任せてゆっくり休め。何か良い方法がないか考えてみる。」

「すまないな、オスカー。いつも借りを作ってばかりで…」

アンドリユーの言葉を聞いたあと、オスカーは後ろを向いたまま微笑して部屋から出て行った。

「殺しか。アンドリユーは殺しなんてするやつじゃない。」

部屋から出てきた後で、オスカーは船着き場で風に当たっていた。
恐ろしいものだ。

憎しみや欲望は、人をこんなにも変えてしまうものなのか？

自分が長年付き合ってきた、すべてを知った仲だと思っていた友人が、ある日突然心変わりしてしまうのはあまりにもショックだった。

「殺しなんて、罪人ならともかく、普通の人間がすることじゃない。いや、まてよ…」

罪人と言って彼は少しの間考えていたが、何かを思いついたのか目を大きく開くと、急いで酒場のほうへと走っていった。

「本当にそれで人が集まるのか？」

ベッドに倒れ、疑わしい目を向けるアンドリユーに彼は自信たっぷりに言った。

「ああ、もちろんさ。あそこは酒場の連中が情報集めによくやってくる。なかでもガラの悪いやつはああいう陰気な裏路地に集まりやすいからな。犯罪人の一人くらい、息をひそめていたっておかしくない。そこに貼っておけば、絶対に人手はそろう。」

オスカーは持っていた紙を得意げにひらひらと見せる。

紙にはこう書かれていた。

金に困り、罪に走ろうとしている者、募集。集合場所、シャンドレーの港。集合時間、三日後の深夜。人員制限、なし。ただし、あまりにも多く集まった場合は、人数を調整することがあるため、事前に了承しておくこと。

まるで軍の報告書のような言い回しだった。

「あとはお前の傷が治り次第、俺の家にならず者を集めよう。」

「ああ。そうしてくれ。」

アンドリユーが返事をする、オスカーが急にあらたまって言った。

「いくつかお前に言っておく。もし仕返しに困っても、俺を巻き込むなよ？これはお前の問題だ。それともう一つ。今なら間違いだと言って、あの紙をはがすこともできるんだぞ？」

「いいや、必要ない。」

その冷静な声を聞いてオスカーは、彼のやろうとしている罪に対する覚悟が本物だということを確認した。

「もう戻れない。お前は最後まで悪人だ。いいか、その事実から逃げるなよ？ 決して神なんかに助けを求めたりするなよ？」

「安心しろ。俺が選んだ道だ。」

これからアンドリユーは、盗みを働きながら生きてゆく。

一生恥を背負い、罪を自覚した自らに知の断罪という聖なる槍を向け、刺され、悶える。

たとえ何度刺されても、返り血を浴びる者が増えるばかりで、彼自体は滅びることはない。

彼の精神のみが腐っていくのだ。

彼女とともに生活するためとはいえ、彼をゆるしたのはオスカーただ一人。

そのオスカーも、必死に彼の目を覚ませてやろうと、善人に戻してやろうと呼びかけた。

だが、彼はそこから動かない。

オスカーは彼の言葉を聞いて二、三度うなずくと、それ以上は何も言わなかった。

第6章 最良の審義

オスカーが酒場の壁に張り紙をしてから三日が経った日の夜、シヤンドレーの船着き場ではフランス兵士が見張りをしている陰で、二人の若い男が息を殺して誰かを待っていた。

一人は背が高く、茶色い長めの髪の方で、名をヴィクトルといった。

もう一人はエミールという名で、ヴィクトルと同じく茶色い髪をしていたが、彼と比べると、なでてもたってしまうほど髪は短かく、背もほんの少し低い男だった。

二人とも市民の服を着ていたが、その目つきには、音を立てずに獲物を狩る、野生の猛獣に似た荒々しさがあつた。

無理もない。

彼らは相当な腕を持った強盗で、いつも二人でつるんでいた。

二人はふと、正面からやって来る人影に気づいて、手を振り合図した。

人影はあたりを警戒しながら二人に近づいていく。

「遅いぞ。何をやってた？」

ヴィクトルが人影に小声で言った。

「すまないな。人を看病していたんだ。」

「まあいいじゃないか。誰かが損をしたわけでもない。」

エミールは眠そうにあくびをこらえながら、早く帰りたいとばかりに退屈そうな態度を示した。

「いいや、損した。俺たちの生きている時間が、何もしないうちに短くなったじゃないか。」

「俺たちの時間か？どうせいつも酒におぼれているだけなんだから、少しぐらいはなくても変わらない。だいたい、兄貴が張り紙を見て、俺に行こうって言い出したんだろう？」

どういいう経過があつたかは分からないが、エミールはヴィクトルのことを兄貴と呼んで慕っていた。

強盗を兄貴と慕うとは、よほどのことがあつたのだろうと人影は思つてヴィクトルを見ていたが、エミールに言い負かされた決まりの悪さを彼に悟られて、何事もなかったかのように話題をそらされた。

「で？あんたが犯罪をやりましようつて、ふざけたことを言うてる野郎なんだな？」

ヴィクトルは冷静になったとたん、いかにもチンピラなまりの酒に酔つたような声でしゃべってきた。

「ああ、そうだ。」

人影はオスカーだった。

「俺たちは何をすればいいんだ？」

「金をやるから、人殺しを頼む。」

エミールはオスカーのまじめな顔つきを見て嘖き出すのを必死にこらえていた。

「何がおかしい？」

「ああ、悪かった。」

彼は意外と素直に謝ったが、オスカーが話を続けようとすると、再びほほを膨らませて両手で口を押さえていた。

「よく分かった。じゃあ俺たちはその病人が治るのを待ってから、フィリップっていう豚の屋敷に忍びこむってわけだな？」

「そういうことになる。ところで、お前たちは殺しをやるか？」

重要なのは彼らの正体や威圧感ではなく、人を殺すほどの精神を持ち合わせているかどうかなのだ。

こんなことは皮肉以外の何物でもないと思っただ。

負傷兵を助けてきた自分が、今は人の命を奪う仲間づくりを進めているなんて考えたくもなかった。

全てはアンドリユーが心変わりしたせいだと、彼を非難し、怒りの矛先を向けたくなったことは、この数日間のうちに数え切れないほどだった。

縁を切ったほうが良かったのか？

しかしオスカーにとって、それはあまりにもひどいと思える選択肢だった。

人はたいてい、付き合っている人間の性格が分かったとたん、手のひらを返すように縁を切るものだ。

自分は彼の友人なのに、友人とは、縁を切っても相手に間違いを正させる、といった決まり文句のような考えで行動したくなかった。

それはそういうものだという、子供でも騙されないような理由で、長年培ってきた縁を切りたくなかった。

自分は彼の友人なのに、いや自分は…

自分は彼の悪友なんだ。

人間の道から、やぶの中へそれていってしまった彼を後押ししている限り、たとえ自分がいくら善人ぶっても彼を糾弾し、非難し、拒まない限り、悪友という輪廻からは抜け出せない。

世間が抜け出したとは認めない。

断固として。

「俺は悪なんかじゃない。人を殺したくない。人を愛する心はちゃんと持っている。彼にだって忠告したじゃないか。なのにどうして悪者扱いなんだ？」

オスカーの頭の中で、さまざまな疑問が浮かんでくる。

彼は自分が悪だということを認めようとはしていなかった。

「そうかい？一度でも悪に染まったら信用ならないのかい？だから悪なのか？信用ならないから、自分たちが安心できないから悪なのか！なんて傲慢なんだ！」

自分はアンドリユーの後に続いて罪の手助けをしているのに、今さら善良な民だと言い張っている。

なんて傲慢なんだろう。

世間の人間は、少しでも悪に染まった人間には、いや、染まっていなくても素振りさえ見せればところかまわずその者を攻撃し、決まりの悪い表情を笑い話の種にして、祭りのように喜び騒ぐのだ。

なんて傲慢で、醜い心を持っているんだろう。

「なんだ貴様ら。どこから入ってきた？」

オスカーはその声で妄想から抜け出たが、その時彼の口はヴィクトルの手によってふさがれていた。

向かい側には銃を構え、サーベルを腰に下げた一人のフランス兵士が三人をにらみつけている。

「ここにいるということは、密航か？それともスパイか？正直に言え。どこから来た？」

いまさらただの市民だと言えるような状況ではない。

オスカーを除いて、二人は顔を見合わせると全速力で逃げ出した。

「待て！」

いつの間にか反対方向からも兵士が二人駆け付けた。

大変なことになってしまった。

三人のいる道は細長く幅の狭い石の路地で、側面を海に囲まれていたため、彼らは兵士に挟み撃ちにされてしまった。

「うおおおっ！」

突然、最初に現れた兵士がオスカーめがけて突っ込んできた。

手にはサーベル。

「ふん！」

しかし彼は巨体を生かし兵士のサーベルを握っている手をつかむと、足で突き飛ばし、海に落とした。

「やあああつ！」

海に落とされた兵士を見た残りの二人も突撃してくる。

「そいつらも海に落とすんだ！」

だがオスカーの指示に反して、ヴィクトルは持っていた短剣で兵士の腹部を突き刺した。

「ぐっ……」

兵士は痛みに顔をゆがめる。

腹を押さえながら、何とかヴィクトルを突き放そうとするが、血は次々とあふれ出てきて、視界はぼんやりとしてくる。

彼は弱っている兵士にこれでもかというくらい全身の体重をかけ、敵の懐にもぐりこみ、刃を奥深くめりこませる。

その時のヴィクトルの目は赤く燃えさかる炎のように血走っていた。

一方でエミールも兵士に突っ込んでいく。

「おい！よすんだ！」

彼の叫びもむなしく、エミールはヴィクトルと同じように返り血を浴びてひるんだ残りの兵士のすきをつき、乱闘の末、彼の頭を肩に寄せ、手で押さえつけると首を横一直線に刺し貫いた。

そうだ、忘れていた。

この二人は強盗だが、殺しができる者たちなのだ。

一般人と同様に話しかけ、会話もはずんでいたから、すっかり油断するところだった。

「なあ、あんた大丈夫か？」

「あ、ああ……」

ヴィクトルは血がついた顔を手で擦りながら、生々しい殺しあいの場を見て、うわの空の返事をするオスカーを疑わしげに見た。

「こんなの初めてだ。殺しのために仲間を集めてるって？ふざけるんじゃないよ。」

エミールはあきれた声で言う。

人を殺せないなら、彼らはオスカーに興味を示さなくなり、帰るだろう。

なんとか証明しなくては。

このままでは、せっかく集まりかけた仲間がいなくなってしまう。

だが、自分は殺しをしないと誓ったのだ。

だから軍から離れてここにいるはずなのだ。

そのときだった。

「危ない！後ろだ！」

だが遅かった。

先ほど海に投げ出された兵士が海藻まみれになった軍服を手で払いながら、二人の服をつかむと彼らを投げ倒したのだ。

「うあっ！」

エミールは着地に失敗し、頭を強く打ち気絶した。

「エミール、助けてくれ！」

ヴィクトルのほうは頭はぶつけなかったが、突き飛ばされたとき足を滑らせ、なんとか道の端に手をかけてぶら下がりエミールに助けを求めている。

「このチンピラめ！殺してやる！」

兵士は怒ってサーベルを抜くとヴィクトルめがけて斬りかかろうとする。

よせ、やめろ。

行くな！

オスカーの心は揺れていた。

今までの自分を否定して、アンドリユーのように悪に染まるのか？

考えている時間はない。

それに加え、彼には彼が誤った道を歩んでしまわないように忠告する者がいなかった。

彼自身でしか人の道を保てる存在はいなかった。

ヴィクトルが手をこまねいている自分をにらみつけているのが見える。

「なぜ俺を助けないんだ！ろくでなし！くそつたれ！しょせん正義なんてそんなものだろう？何が善だ！困っている人を助けるのが正義じゃなかったのか？あんたは、あんたには悪魔が宿っているんだよ。ただ、今は静かに眠っているだけさ。その気になりやいつでも牙は生えてくる。良い人間の価値観は自分の利益を中心に回っているのか？」

死を前にしたヴィクトルが、そんな言葉を口にした。

良くも悪くもない。

自分はオスカーという一人の人間だ。

善にも悪にも揺さぶられない強固な意志を俺はしっかり持っている。

自分なりの最良の考えで、自分の信じる考えに従って生きるのが俺だ。

オスカーは走っていた。

兵士に横から飛びかかった。

サーベルを奪い、背中を突き刺した。

手に肉を裂く感覚が伝わってくる。

俺がやったんだ。

彼は自分に言い聞かせる。

兵士は血を吐き、赤く染まった歯を食いしばり、オスカーを全人生の恨みをかき集めたような目でにらむ。

恐怖に体が震える。

人を殺した恐怖と、殺した相手に恨まれる恐怖。

「はあ、はあ、はあ…」

オスカーの息遣いのみがあたりに響く。

兵士は痛みにもがくことなく、静かに息を引き取っていた。

なるほど、この兵士は最期まで軍人の名誉を守るために、声一つ上げなかった。

やってしまった。

「俺が、やったのか？」

「ああ、あんただ。やればできるじゃないか。」

ヴィクトルは自力で道の上へと這い上がると、彼に握手を求めてきた。

「俺はヴィクトル。そっちがエミールだ。よろしくな。」

「よろしく。オスカーだ。」

彼はためらうことなく手を差し伸べた。

もはや彼もアンドリューと同じ立場なのだ。

「用件は分かるな？」

「ああ、フィリップってやつを脅せばいいんだろう？」

オスカーの部屋で寝ているアンドリューに、強盗の二人は言った。

「オスカー、お前は無理するなよ？」

「いや、大丈夫だ。」

彼のあまりにも率直な返事にアンドリューは何かあったのだろうかと顔色をかえた。

横ではエミールとヴィクトルが笑っている。

「殺したのか？」

オスカーは黙ってうなずいた。

「そうか。なら俺もこうしちゃいられない。」

「おい、もう傷は治ったのか？」

ベッドから這い上がるようにするアンドリューを、オスカーは止めるようにした。

「心配するな。お前のやったことに比べれば、こんなのたいしたことじゃない。」

アンドリユーは続いてエミールとヴィクトルに言った。

「顔を見られないようにする方法は？これからやることには危険がついてまわる。とくに他人に目撃されたらおしまいだ。」

「こついうことか？」

二人は荷物の中からヴェネチアの仮面をとりだした。

貴族が身につけるものではなく、木で彫られた安価なものだが、正体を隠すには十分だった。

「それと、こいつはおまけだ。」

エミールは黒いマントをとりだした。

聖職者が身につける丈が足首まであるローブを改造したものだった。

仮面とマントは、二人がいつも使っている犯罪道具だ。

これで罪すらも隠してしまいたい願望を掻き立てられる者は多い。

しかし、アンドリユーは違った。

自らに知の断罪を課した限り、隠したいという気など起こしてはならないのだ。

「今からやつの屋敷へ行くぞ。準備は良いか？」

皆それぞれに、武器を持ち変装した。

この世間でいう狂気に満ちた集団を止められるものはいない。

ところでアンドリユーには、リーダーとの区別がつくようにと、ヴィクトルが大切に持っていた金装飾の仮面が与えられた。

彼はリディルを救うため、走っていく。

夜の闇に消えていく。

「リディル、待っていてくれ……」

最後にはつきりと聞こえたのはアンドリユーの悲しげな声だった。

第7章 私の父、私の娘

屋敷の近くに馬小屋が見えた。

かなり大きな馬小屋で、十頭は余裕で馬が入りそうな大きさだった。

「帰りはあの馬で逃げるぞ。」

アンドリユーの声に皆うなずき、屋敷の裏口へと入ってゆく。

アンドリユーの胸は高鳴っていた。

しかしそれは人の道から外れてしまう時にあらわれるどうしようもない不安というより、早くリディルを助け出したい焦りからの高鳴りであり、同時にフィリップへの怒りの響きであった。

中は広く、廊下には白いろうそくが掛けてあり、近づくとほのかな温かさが頬をなでた。

そこから足音がこちらに近づいてくるのが分かる。

フィリップだった。

アンドリユーの目が彼を見た瞬間にひきつった。

オスカーはそのせいで荒くなりかけている彼の息を必死に抑えようとした。

「早く隠れる。」

四人はそれぞれ近くにあった死角や、部屋に入ってドアで聞き耳をたてた。

だがフィリップには何かの拍子に彼らが隠れる姿が見えたに違いない。

彼は驚いた顔になって走って、もと来た道を引き返してゆく。

「おい、奴が逃げた。人を呼ぶつもりなんだ！行くぞ！」

四人は階段を猛スピードで駆け上がっていく貴族の後を追う。

「きゃあ！」

先頭を走っていたアンドリユーがメイドと鉢合わせしてしまった。

三人は戸惑ったが、彼はそんなことは気にも止めずに走り続ける。

やがてメイドが気絶すると、残りの三人も後に続く。

「待て！」

フィリップが白いドアのある部屋に入り、内側からカギをかける音がした。

「そこか、逃がさんぞ！」

三人はドンドンと強く扉をたたいたが、開く気配は当然ない。

「どけ！」

アンドリユーは三人をどかせると、先ほど兵士から奪ったサーベルを抜いて、ドアに突き刺し始めた。

それも、ものすごい勢いで、刺して刺して刺しまくり、円形状に穴をあけ、弱くなった中心部分を蹴り飛ばしてはずしてしまった。

穴がぽっかりと開いたところから、彼は腕を伸ばし、カギをはずす。

「や、やめろ。来るな！」

フィリップは青ざめた顔で言う。

この偽善者めが！

アンドリユーの脳裏に醜い言葉が浮かんでくる。

止めようのない滝から流れる大量の水のように、フィリップを容赦なく責める。

「私の顔があ！」

「リディルはどこだ？ 言え！」

フィリップは痛みに悶え、顔を火であぶられたときのように左右に激しく動かしていたが、彼のリディルという言葉聞いて、突然動きを止めた。

「お前は誰だ？ まさか、いや、そんな。そんなはずはない。あの娘のことをどこで聞いた？」

どうやらフィリップは、あくまでアンドリユーが死んだものと思っ
っているらしい。

彼は腹がたった。

なぜ自分を認めようとしなののか？

殺してしまえ、殺してしまえば顔を見られようが、正体を明かそうが、彼がこの屋敷に忍び込んだ証拠を根こそぎ消し去ることができるのだ。

「もう一度言う。あの子はどこだ？」

その時アンドリユーの仮面に向かって、フィリップの泡の混じった気味の悪い粘液が飛びついてきた。

べっとりとした液体は名誉や名声、評判の崩落の象徴。

一市民でしかない彼にとって、それは尊厳の欠落を意味し、彼の奥底にある普段は悟られることのない心の弱さにまで響き、精神をねじ伏せようとした。

「殺してやる！」

仮面を外し、彼は理性なき頭で剣を抜き、フィリップの胸に飛び込んだ。

俺じゃない！

お前が俺に殺しを実行させたんだ！

あおられさえしなければ、殺しなんてできなかったんだ！

自分は強くなったふりをしていただけだった。

弱さがまだ残っていた。

弱いがゆえに殺しをためらい、弱いがゆえに違う生き方を恐れていたんだ。

彼の記憶はその後しばらくはどういうわけか消えてしまった。

「アンドリユー！ 見ろ、鍵がある。これでどこかの扉を開けられるかもしれない。子供はきつとそこだ。良かったな。まだ売られていなかったみたいだ。」

彼の仲間たちが口ぐちに言う。

目が覚めたとき、彼は片手を血に染めて横たわり、動かなくなつたフィリップのそばに立っていた。

貴族は死んでいた。

ピアノの方向に指をさし、うつろな力の抜けた目をして倒れていた。

アンドリユーはそこから目をそらさなかった。

「アンドリユー？どうした？」

オスカーが声をかけてきた。

「いや、なんでもない。」

目をそらすな。

殺した相手に向かつて、いくら憎くても、どんな理由でも、敬意を払う。

目をそらさないのは、さらし者になつた死者の不幸を楽しみ、あざ笑うためではない。

死後も相手の存在を記憶に残し、自分の行いとして留めておくためである。

彼は決して笑わなかった。

瞳も動かさず、不動の姿勢で立っていた。

心の中でも笑わなかった。

「死を喜ぶなんて、俺はそんな生き方はしない。不幸を笑うなんて、そんな生き方はゆるさない。」

フィリップの死体に一言だけ言葉を投げかけると、彼は三人とともに部屋から出て行った。

「どこなんだ、リディル！どこにいるんだ！」

これまで胸に経験したことのないほどの息苦しさで動悸が走る。

走っては鍵を扉に差し込んでいく。

「ここもだめか。後は地下倉庫しか残っていないぞ。本当にここに娘がいるのか？」

「黙ってる！」

すごい剣幕で叫び散らすアンドリューに、場は一瞬だけ静寂に包まれた。

早く見つけなくてはならない。

見つけれない、見つからないなどという選択肢は彼の中にはなかった。

どんなに時間がかかっても必ず見つける。

いや、見つけなくては…

リディルのもとへ行かなくてはならない。

あきらめたら、アンドリューがリディルへの愛を閉ざしてしまうことになる。

あきらめられるわけがない。

彼は自らの本心で走っているのだから。

「あれじゃないか？」

ヴィクトルがらせん状の階段を降りたところに重々しい鉄棒がはめられた牢獄のような扉を発見した。

「リディル！」

アンドリューは誰よりも早く階段を降り、一人で扉の前に立つ。

鍵がかかっている。

きっとこの奥にリディルがいるに違いない。

どうか無事でいてくれと、彼は精一杯願った。

鍵を差し込み、扉を開けた。

ギシギシと鉄のきしむ音とともに、扉は開き、中からひんやりとした外気にも似た風が彼らの髪を揺らす。

「真っ暗だ。これじゃ何も見えない。エミール、たいまつをかりてくれ。」

アンドリユーは灯り一つない闇の先を赤き炎で照らした。

中は明るくなり、壁が石造りであること、そして山のように積み上げられた金銀、装飾品の横にベッドがあること、そのベッドに静かに小さく丸くなっている姿勢で寝ているリディルがいることが分かった。

「リディル！」

アンドリユーはベッドに近づいていく。

だが、彼女の頬に手を触れようとしたとき、誰かの声が聞こえた。

「その子に触るな！人殺し！けがらわしい怪物め！」

ふとあたりを見回すが、オスカーも、財宝を見て夢中になっているヴィクトルとエミールも声を発している様子はなかった。

彼の心の声が、生き残っていた昔の良心が反発を始めていたのだった。

「アンドリユー？どうかしたのか？」

「いや、別に。」

彼はオスカーにそう言うと、再びミレットのほうへ顔を向けた。

とても苦しそうだ。

眠っていて、無意識のはずの彼女は、身を守るように小さな体を丸めている。

「俺は確かに人を殺した。世間で言う、悪になったんだ。だが軍人はどうだ？人を殺すためにいるようなものだ。国を守るために戦う。それが大義となり正義となるなら、俺だって正義だ。この子を守るために戦ったんだ！どうしてそれが罪なんだ？どうしてこうも世間の目は傲慢なんだ！」

「お前は人を殺したんだぞ？人の可能性を奪ったんだ。死んでいい人間なんているはずがない。それにあの子はもともとお前の子じゃない。それに命令された軍人と違って、お前は自らの意志で人を殺したんだ。お前は本当の悪魔なんだ。」

「ああ、なんて傲慢な言葉を投げつけるんだ。良心のある人間が、こんなにも果てしない糾弾と文句を永遠に俺に浴びせるなんて、まったく予想もしなかった。善の奥にいる黒い心を俺は知っているぞ！知っているとも！不幸を笑っているんだ！世を正す仮面をかぶって、他人の不幸を笑っているんだ！お前たちなんかに更生とか正義なんて言葉は似合わない！」

心の葛藤はアンドリユーの肉体のはざままで激しく争っていた。

他方が言い返せば、もう一方が反論した。

だが、どんな言葉よりも、結果としては自分の意志にしたがったほうの彼が勝利をおさめた。

「死んでいい人間なんていないだって？リディルを守るためにはそれしかなかった。ひどい目にあった人間しか分からないつらさがあることを知っているんだろう？お前が一度体感してみるといい。そのとき罪は罪だなんて高尚な言葉が聞けるのか？正義感だか何だか知らないが、人を糾弾する本能を抑えられないような人間に、そんな冷静な判断ができるわけがない！これが俺の意志だ！後悔はしていない。来るなら来い！お前たちが黒く強大な牙で俺の心を砕こうとするなら、俺は信念に誇りを持って、より巨大な雷でお前たちを刺し貫いてやる！」

「おじさん！おじさんっ！」

ふと気がつくとしリディルが彼の胸にすがり、涙を流していた。

「リディル。もう心配ない。おじさんが悪かった。恨んでいないのかい？」

「どうして？ずっとおじさんに会いたかった。怖かったわ。」

久しぶりに彼女の髪を触った。

ペットの毛に触っているような気持ちだった。

彼女の髪感覚に飢えていた自分はなんと情けないのだろう。

自分の手汗で髪がべとつかないように、彼は二三度だけ彼女の頭に手を置いておくことにしたのだが、リディルはアンドリューの胸のほうへ首を傾けて、自分の頬をくっつけてきたから、ほどほどにするはずが、結局は長い間彼女の髪を触っていることになってしまった。

「リディル。おじさんの髪は汗でいっぱいだ。大事な髪なんだろう？」

「後でお手入れするわ。でもわたし、すごくこわかったのよ。」

「ああ、分かっているよりディル。おじさんもすごくさみしかった。だからいつまでもここにいないで外へ出て帰ろう。」

月夜に照らされた小道の上を、四頭の馬が走っていた。

馬は屋敷のそばにある小屋から持ち出されたようだが、盗まれたと騒ぎ立てる者は誰ひとりいなかった。

四頭のうち、一頭の馬には少女と男が乗っていた。

男が手綱を持ち、少女のほうは男の体にしがみつき、馬の揺れに耐えていた。

しかしその表情は苦々しくなく、さわやかな笑みに満ちていた。

彼女は言った。

「おじさん。おじさんのこと、お父さんって呼んでいい？」

彼も言う。

「ああ、いいとも。好きに呼ぶといい。」

そこには心の灯りがともっていた。

激しいあまり、暑苦しいほどだったが、不思議と汗をかいてもう
つとうしくもなんともないのだ。

むしろまとわりつくほどに、そばにあってほしいと願えるような
ものであった。

私の娘はここにいた。

実の娘ではないがここにいた。

血によってではなく、人間の理性とはほど遠い情という特殊なも
のによってできた娘がいたのだ。

父もそこにいた。

そこには娘を守る父もそこにいた。

人としてのありかたには個人によって違いが出てくる。

個人によって考えが違えば、当然どちらが正しいかという闘争が生まれる。

人はどうして異質な考えを恐れ、つまはじきにするのだろうか？

自分こそは聖なる者という意識があるのではないか？

きつとそうに違いない。

そうでなくてはこの世に正義などという都合のよい言葉が存在するはずがない。

傍目からは歪んで見える愛が、彼にとっては正しさの塊であり、彼とリデルについてごちゃごちゃと文句を垂れるものがいたなら、彼はためらわずにその者を追い詰めるだろう。

今の二人の関係は、彼の最良の審議によってもたらされた意志であり、その意志を阻むものは傲慢な偽善者でしかなかった。

「何が正しいかなんて人が決めることだ。今や俺にとって、悪こそが正しい生き方なんだ。いや、悪なんて押しつけられたような言葉はやめよう。これが俺の意志だ。なあオスカー？」

「ああ、俺たちは仲間だ。騎士だ。自分の考えで行動する騎士なんだ。」

オスカーは内心驚いていた。

今まで悪と言われた人ならざる者たちの集まりが、これほど暖かいところだとは思わなかった。

アンドリユーにリディル、エミールに、命を助けたヴィクトルも小さな枠の中にいた。

互いを認めてくれる場所だった。

歪んでいるとされる愛さえも…

第8章 リデルの日記（前書き）

この章は会話を重点に置いているため、「」の部分であっても一文ごとに分けてあります。

第8章 リディルの日記

「こんにちは、私はリディルです。」

「今年の冬で七歳になる女の子です。」

「日記なんて書くのは久しぶりだけど、とにかく頑張って書いてます。」

「私には両親がいません。」

「お父さんもお母さんも、お家から出て行ってしまったの。」

「私は一人ぼっちで、すごくさみしくなりました。」

「でもあるとき一人の男の人が、私を家まで連れていってくれたの。」

「名前はアンドリュー。」

「初めて会ったときはおじさんって呼んでいたけど、今はお父さんって呼んでいます。」

「私の新しいお父さんよ。」

「私とおじさんは親子になったの。」

「なんだかとても不思議な気分です。」

「でも、今度はお父さんじゃなくて、お父様と呼ぶことになるの。」

「なぜかって？」

「私にも分らないの。」

「お父さんが、新しいお家ができたらしう呼びなさいって言ったの。」

「この呼び方、言いづらくて舌を嚙んでしまいそう……」

「でも我慢するわ。」

「お父さんは私を愛してくれるもの。」

「私もお父さんが大好き！」

「そうそう、私が変な男の人にさらわれたとき、お父さんに助けてほしいってずっと願ってたの。」

「そうしたら、本当にお父さんが来てくれたの。」

「すごいでしょ？」

「私のお父さんは離れていても、私の考えていることが分かったやつ。」

「どうしてだろう？」

「いけない、ほかにもお父さんのお友達がいるのを忘れていたわ。」

「一人はオスカーおじさん。」

「お父さんの昔からのお友達で、私にも優しくしてくれるわ。」

「体はすごく大きくて、軍人さんだったの。」

「あと怖い顔をしたお友達が二人いるの。」

「まずヴィクトルおじさん。」

「男の人なのに、女の子みたいに髪が長いの。」

「変な人だけど、オスカーさんが私たちの仲間だって言っていたわ。」

「あとの一人はエミールさん。」

「ヴィクトルさんといつも一緒にいて、まるで兄弟みたい。」

「それでね、お父さんが助けに来てくれた次の日に、乗っていた馬を隠したの。」

「街の外れにある丘の洞穴の中よ。」

「あんな場所があるなんて驚いたわ。」

「それから私が閉じ込められていた部屋にあった宝石やお金は、

みんなで持ち帰って馬と一緒に隠したの。」

「でもヴィクトルさんとエミールさんがお金を持ち出そうとしたら、お父さんと喧嘩になってしまったわ。」

「今は仲直りして、ヴィクトルさんとエミールさんが、お父さんにツカエているのよ。」

「どういう意味かしら？」

「あともう一つ、お父さんがね、私に服を買ってくれたの。」

「白かわいい服に、青いリボンと靴、それに黒くて変な服よ。」

「お父さんが必要になるからって言うの。」

「でもうれしい!」

「ありがとうお父さん、大切にするわ。」

「なんだか手が疲れてきちゃった。」

「明日は早起きしなくちゃ。」

「お父さんが私を教会に連れていってくれるの。」

「私、教会って初めてでドキドキするわ。」

「それじゃあ、おやすみなさい……」

リディルは日記を書き終えると、大きく伸びをしてベッドへと入っていった。

第9章 我々は悪を根こそぎに抑えつけなくてはならない

血を吸い上げたカーペットに手を触れてみると、水とは違う、ぬめりのある水気が感じられた。

何度触ってみても、現実には冷たくなっているのだろうが、同じ液体が自分の全身をめぐっていると思うと、フアンソワ警察長官にとってはこの染みには生あたたかさがあるように感じられた。

「仮面の男か…」

メイドからはもうこれ以上のことをきいても何も分からないだろう。

そう思い、部下を連れて外に出た彼は、一市民の少年たちの話を耳にした。

「あいつらは騎士だ。でもなぜ仮面なんてつけていたんだろう？」

「きつと正体を隠さないと、ロマンがないからだろう？」

「分かってないなあ。お前は。騎士は堂々としていなくちゃならないって父さんが言ってた。顔を隠すのは悪者のすることだって。」

彼は少年たちの話をそばで聞いていて、何か手掛かりがあるのではと直感した。

「おい、お前たち。その騎士たちについて、分かることを教えて

くれないか？」

「おじさん誰？警察？それとも軍人？」

「話したら何かくれるの？」

少年のうちの一人がそう言った。

「ああ、もちろん。お金をやろう。」

もう一人の少年が、調子のいいことを言うその少年をたたいて自粛させたが、フランソワは笑顔でポケットから二枚の四十フラン銀貨をだして少年たちの前で見せびらかした。

「すげえ、僕こんなお金見たことないや。本当にくれるの？」

その白銀の輝きを前に、少年たちはすっかり興奮している。

「君たちが話してくれたらね。」

「なんでも話すよ！」

少年たちはフランソワの質問にはなんでも答えた。

アンドリューたちが馬小屋から馬を持ち出したこと、馬のうちの一頭には幼い少女が乗っていたこと、それらを詳しく話した。

「ありがとう。君たちのおかげで知りたいことがたくさん分かったよ。」

そう言つてフランソワは部下たちのほうへ視線を向けて首で合図すると、その場を立ち去ろうとする。

このとき少年たちは、彼が話してくれたお礼を忘れてしまったのだらうと思つていたから、二人そろつて彼に金を要求した。

「待つておじさん！お金は？」

少年の一人がフランソワを追いかけるが、そのことに気づいた部下に腕をつかまれ、彼は突き飛ばされた。

「待つてよおじさん！約束が違うじゃないか！」

もう一人はなんとかフランソワに追いついて彼のズボンのすそをひっぱつたが、彼の冷ややかな顔を見たとき、少年は動けなくなつてしまった。

フランソワはゆつくりと、つかんでいた少年の手をそつとズボンからはなすと、その部分をもう一方の手で払つて言った。

「私は慈善家じゃない。物乞いなら教父にしろ。それに私は国王陛下のために動いているだけだ。私の邪魔をすることは国家への叛逆を意味する。分かつたらさつさと立ち去れ。薄汚いガキどもが。」

フランソワは再び歩き出したが、すぐに止まつて少年たちに付け加えた。

「ああ。それから、今度から物乞いをするときはちゃんと金をもらつてから話をするといい。」

それから三たび歩き出したとき、フランソワの後ろのほうで、少年たちがワンワンと号泣している声がしたが、彼は振り向くどころか表情一つ変えずに淡々と歩いていった。

フランソワは悪に対しては容赦のない男であった。

悪人をもはや動物同然と見ていて、彼らの不幸をここぞとばかりに楽しむ男だった。

こういう類の人間はたいてい人情に欠けていて、人なつこい子供にはひどい仕打ちをしたりするもので、彼も例外ではなかった。

「仮面の男め。見つけしだい即法廷にひきずりだしてやる。お前たちも仕事はぬかりなくやれよ。そうすれば薄汚い獣どもの神にすぎる儀式が見られるぞ。」

「はい、長官。」

肩を軽く叩かれた部下の一人が、緊張した口調で言った。

「いいか、お前たち。必ずやつをさらし者にしろ。我々は栄えある陛下のしもべだ。悪を倒せ。彼らは、いや奴らは、しらみつぶしに探して抑えつけなくては害となる。決して慈悲を求められても応じるな。何を考えているのか分からない連中だ。そんな者どもの言うことなど聞くにもあたいないということを、よく覚えておけ！」

フランソワが部下たちに喝をいれ、叫ぶ。

彼は思った。

いつものように、世に正義をもたらすため、悪を根絶やしにするのだ。

奴らは劣った価値観で歩き回り、極めて野蛮であるから、我々が上から抑えつけなくてはならないと。

自分たち以上の優れた考えは存在しないと思っていた。

だが、こういった慢心した考えを持つ者の部下の中には、疑問の声をあげる者もいた。

「本当にそうでしょうか？」

クロードという、まだ入隊してから半月の新米警官だった。

「何がだ？」

「彼らは弱いだけではないのですか？」

「どういう意味だ？」

「人は誰でも感情を持っています。ただ、その感情を抑えることが苦手な集団なのではないでしょうか？」

「そのくらいにしておけ。奴らは人ではない。理性を持たない存在だ。違うか？」

「あなたもそうですよ。」

クロードはフランソワの言葉を無視して言った。

「あなたは正義は悪を抑えつけて、初めて成立するものだと言いました。しかしあなたを見ていると、悪におびえるあまり、悪人を戒める域を超えてしまっているのではという気にさせられる。それは長官、あなたにも弱さがあるので…」

「黙れ！」

フランソワの怒号があたりに響いて、まるで乾いた拳銃の音のように近くの石壁に跳ね返った。

「おっと、すまなかった。だが一つ言っておく。悪人を陥れて何が悪い？ そんなに人の目は甘くないぞ。それに弱さだと？ 悪人に対する私の態度は正義感の強さだ！ 悪人の反乱が怖くて警察長官が務まるのか？ このふぬけめが！」

明らかに自分の本心ではない。クロードにはフランソワがそう見えた。

そして彼らが遠ざかった後、一人でこうつぶやいた。

「それでも、我々は悪を、根こそぎに悪を抑えつけなくてはならないんだ…」

なんと都合の悪い立場に自分は立たされているのだろう。

この居心地の悪い空間から一刻も早く逃げ出してしまいたい。

しかし、やっと見つけた仕事なのに、ほかに自分を受け入れてくれる場所はあるのだろうか？

「なんだか、分からないな…」

彼はとっさにこうつぶやいた。

自分はどうしてここにいいのか分からない。

自分はどうして警官になったのか、警察の何に魅力を感じたのか分からない。

ただの店員の仕事なら、何も考えずに働いて金をもらってればいい。

しかし自分は人の人生を狂わせたりする仕事をしているのだ。

犯人が悪いのだとしても、何も考えずにはいられない。

街の人を守ったりする正義のヒーロー。

そんな姿にあこがれていたのに、あの長官のせいで全てがわからなくなった。

彼は打ちのめされた気分になった。

「人の目はそんなに甘くないぞ。」

先ほどのフランソワの一言が、やたらと重く感じられる。

ひとの目ではなく、彼は本当は人の世は、と言いたかったのではないのだろうか？

「ならなぜ、あなたはそんなやり方を変えようとしないのでですか？悪人を牢屋に入れて悪さをしないようにするならともかく、なぜ必要以上に悪を嫌うのですか？正義感ですか？あなたの正義感は、私にとって呪いをかける行為にしか見えない！」

追い求めていた理想は崩れてゆく。

神よ、教えてください。

あなたならどうするのですか…

彼は数日してから仕事に来なくなった。

仕事に行かず、神の意志を聞くという行為に、一日のほとんどを費やしていった。

いつしか教会の神父に顔を覚えられ、よい話し相手となっていたが、彼の理想が崩れたショックは消えなかった。

彼はついに教会にある空き部屋に住むようになった。

神父も彼を気の毒に思い、神の意志を聞けるまでの間なら教会に
いさせてくれると言ってくれた。

第10章 呪われし者の申し子

教会の鐘の音が聞こえ、耳に重くのしかかってくるような響きに驚いた鳥たちが、いつせいに空を舞う。

そんな鐘の音とは反対に、教会の中では荘厳なるミサの合唱がゆっくりとしたリズムで行われていた。

このとき教会の中は中世そのもので、言いかえれば時空によって切り取られた島であった。

宗教に自分の意志をゆだねるやり方はもう古い。

フランス革命の後から、こういった古い伝統を崩す考えが街には生まれつつあったが、それでも人々の中には修道院のシスターほど熱狂的ではないものの、神の意志にすがろうとする者たちが集まってきた。

アンドリューはこの日、リディルを連れて教会へ来ていた。

何も知らない彼女に、せめて心のよりどころをつくってやりたかった。

「お父さん、ここはどこ?」

彼女は周りで祈り、手を合わせて目を閉じる人々や、その人々が握っている十字架、加えてアンドリユーに買ってもらったミサ用の丈の長く暗い色の服を、落ち着かない様子で何度も触ったりつまんだりして当惑していた。

「静かに。今はミサの最中だから、この人たちの歌が終わるまで目を閉じて手を合わせていないといけないよ。こんなふうだね。歌わなくてもいいからやってごらん。分かったかい？」

彼はリディルの手を取って合掌のポーズをさせる。

「ええ、お父さん。」

「そうそう。良い子だ、えらいぞ。」

アンドリユーもそう言ってミサを歌い、目をつぶる。

しかしながら、彼は先ほどから居心地の悪さを感じていた。

神は、俺の中の精神は、善人と呼ばれる人々が生み出した創造物を歓迎していない。

それどころか蹴散らそうとしている。

彼には全てが分かっていた。

自分は今敵に囲まれているんだ。

俺は悪魔で周りは天使。

少なくとも、この空間では、何が何でも俺は虐げられる存在だ。
だから胸が苦しいのかもしれない。

なにかされるのではないかと、不安だけが勝手に一人歩きしていく。

どうすればいい？

逃げてしまおうか？

いいや、いつそのこと神にこの身をゆだね、罪を告白し、楽にな
ってしまいたい！

ミサを唱えているだけだというのに、彼の額にはいつの間にか汗
の粒が浮き出てきていた。

「お父さん？どうしたの？具合が悪いの？」

リディルが心配そうに見つめる。

「大丈夫だ。それよりしっかりミサをしなさい。」

結局アンドリューは神に助けを求めるようなことはしなかった。

たとえ自分が告白したとしても、恥を背負ってのけ者にされ、生
き続けなくてはならない。

そんな世界が嫌で、彼は自分の意志を通してきたのだ。

彼はこの時偶然に悟った。

俺は神を冒読しているのか？

神の前で、神に従わない異教徒が信仰するふりをしているのだから、そうに違いない。

しかしリディルはどうなるだろう？

彼は彼女のほうへ視線を投げた。

少女は目を閉じて静かに手を合わせている。

彼女も、いつかはこうして一般人と同じ世界にいる以上は、何かのきっかけで、悪とはどういうものかを知る時がくることだろう。

そうなれば、アンドリユーのもとを去ってしまうことになるのだろうか？

早くリディルを連れ戻さなくては！

ここから立ち去ってしまわなくては！

だが、彼は彼女に手を伸ばしかけたとき、はっとして思いとどまった。

なんということだ。

これが親のすることかと、自分を戒めたのである。

自分がリディルと一緒にいたばかりに…

これでは彼女の考えを無視するばかりか、自分だけ助かるうとするとしてもない人間ではないか！

「いいだろう…」

アンドリユーは心の中で憎しみをこめてつぶやいた。

「あんたらの神を俺は呪ってやる。最期までな！リディルを、俺の子を奪おうとするなら戦うまでだ。」

やがてミサが終わると、神父が説教を始めた。

アンドリユーにとってそれは呪いの言葉そのもので、神父の口から神は言われたとか、主は、という言葉が出るたびに、彼には心の中の何かがびくびくと震えているように感じられた。

「驚いた。人の立場によつては、何気ないことが死にたくなるくらいに強烈に伝わってくる。」

「ねえ、お父様？じゃなくて、あ…」

リディルは彼を呼んだが、しだいに頬を赤くしてうつむいてしまふ。

どうやらお父様という呼び方が恥ずかしいようだ。

こんなにかわいらしいしぐさも、神の前では、お前はこんなに無垢な子を騙しているんだ、という言葉に変化を遂げる。

俺とリディルは神に呪われたんだ！

彼は叫びたくなって、つい無意識にリディルの手を取った。

「呪われた！神に呪われた！もうおしまいだ！いや、こうなることは初めから分かった。リディルは絶対に渡さないぞ！」

彼はそう言ったつもりで、神のいると思われる天井の壁画をにらみつけた。

「神父さん。もうミサは終わりましたか？」

教会でもうほかの人間が全て帰ってしまい、アンドリューもこれからリディルと帰ろうとしていたとき、教会の奥から一人の男が出てきて言った。

ひどくやつれた顔をした若い男だった。

第11章 迷走する意志

ミサが終わってあたりに人の気配がなくなると、決まってクロードはいつもどおりに神の意志を聞くために一人で祈り始めるのだが、今日という日にある二人の客人と出会った。

「ミサはもう終わりましたか？」

念のためクロードは二人を見ながら神父にたずねた。

「ええ、もちろん終わりましたが、人がいてはやりづらいのですか？」

神父もアンドリユーとリディルのほうへ視線を向けながら言った。

「いいえ。」

しかし彼は二人の姿から目をそらし、教会の十字架に描かれた主の前に向き直ったとき、何かを思い出したようにもう一度、今度は気づかれないようにそっと二人を見た。

「馬に乗ってたんだ。かつこよかったよ。でも一頭の馬には女の子が乗ってた。僕たちと同じくらいの年の女の子でね、髪の毛はさらさらしたようなブロンドの色をしてた。こうやって、両腕を前に回して仮面をかぶった怪人にしがみついていたんだ。」

情報収集したとき、確かに少年たちはそう言った。

その瞬間、クロードは確信した。

間違いないと。

目の前にいるのは明らかに自分とフランソワが追っている男とその子供だった。

いや、だめだ！

彼はフランソワにこの事実を知らせようとしたが、とつさに踏みとどまった。

「確かに私の仕事は犯人を捕まえることです長官。しかしあなたは犯人を捕まえたとき、どうなさるか、私には分かっています。きつと…」

きつと長官に知らせてしまったら最後、この男はともかく、女の子の運命はかつてないほどに不幸になるだろう。

「人の目はそんなに甘くないぞ。」

「分かっています。しかし、人の目を気にしてでもこれだけは譲れません。譲ってしまったら、自分が壊れてしまいそうです…」

彼とフランソワの妄想の中での会話は続いていく。

「逃げてしまいたいのだろうか？」

彼はフランソワの言葉に、自分の想像した言葉ながら殺気を感じた。

自分が恐ろしい。

この立場から逃げてしまいたい。

しかし逃げてしまったら、悪をかくまった罪悪感が自分に襲ってくるのだらう。

すなわち逃げることは、クロード自身が悪になることを意味していた。

「嫌です！悪にはなりたくない！」

「なら私のもとに來い。そして私に仮面どもの居場所を教えるんだ。そうすればお前は正義のヒーローだ。なりたいたんじゃなかったか？正義の味方に？英雄に！」

「それも、嫌です……」

「なぜだ？お前は手を直接下さず、私に報告するだけでいい。口を数分動かしているだけで、お前は今まで通り市民と同様に大手を振って街を歩けるんだ。」

「でも……」

「何が不満なんだ？」

不満じゃない。

どうしたらいいか分からない。

「分からないんだ。神様。いつまで待てばいいのですか？このままでは私は。私は……」

「よく考える。」

心の中のフランソワは言った。

「お前がもし悪に手を貸してしまったら、私はお前と戦わなくてはならない。つらいものだ。部下を手につけなければならぬとは私の残忍さはお前が一番よく分かっていると思うが？それでも悪の味方をするというならしかたない。私自ら貴様に引導を渡してくれよう。」

言いようのない、表現することのできない恐怖が彼を襲う。

「い、いや、いやだああああーっ！」

人間は追い詰められたとき、本能をむき出しにする。

ここでもそういった事が起きてしまった。

急いでフランソワのもとへ行かなくては。

彼は大声をあげて走りだした。

渴いた叫びは教会のロマネスク様式のアーチ型の天井まで行くと、ステンドグラスに跳ね返り、より高い悲鳴のような声になってクロードの耳もとへと戻ってきた。

本当に自分が出した声なのか？

しかし彼にはそんなことを考えている暇はなかった。

顔を赤くさせ、泣きながら乱れた息づかいで、街中を走りまわっていく。

自分の身を守らなくては！

この際、悪や正義などという言葉すら、彼にとってどうでもよくなっていた。

フランソワは一人で自分の執務室にこもって、物思いにふけっていた。

今度会った犯人にはどんな仕打ちを与えてみようかと、笑いもせず真顔で指を噛みながら、机に足を行儀悪くのせて考えていた。

「長官！」

あわただしく部屋に入ってきたのは、取り乱したクロードだった。

警察の服も着ずに、私服で現れたのだ。

「誰かと思えばクロードじゃないか。ここのところ姿を見せなかったが、一体何をやってたんだ？女でもできたか？それとも私の考

えに不満で仕方がなくなつてやめにきたのか？」

フランソワは顔を正面に向けたまま彼を見ずに言う。

まるで考え事をしているところを妨げられたような言い草だっただけに、クロードがおどおどするかと予想していたのだが、彼はと
いうと微動だにせずフランソワを見つめていたから、彼は冗談を言
う気が失せてしまった。

「どちらでもありません。」

「そうか。残念だよ。それで、何の用で来た？言っておくがお前
は仕事を休んだ。本来ならクビにするところだ。しかしお前の性格
に私はしばしばそられる時がある。返事によつてはもう一度職を
戻してやってもいい。何を言うべきか、そこで良く考える。」

心臓の血はたぎり、バクバクと音を立てて活性化する。

だめだ、言うな！

ダメだ、ダメだダメだダメだ、悪にはなりたくない！

「奴を、見つけました…」

「嘘をつくな。」

「嘘ではありません。こんな状況で嘘なんて…」

「こんな状況とは？」

フランソワは顔をしかめた。

「あなたには、あなただけでは言うことができません。」

「言え！でないと私は信じないぞ。」

その言葉を聞いた瞬間、クロードの口の隙間からもれる歯ぎしりの音を彼は聞いたような気がした。

「嫌な人だ……」

フランソワの口がみるみる緩んで、白い歯が姿を見せる。

「あなたは私の知る中で、もっとも嫌な人だ！」

「なるほど。これは良い話だ。」

クロードからの話を聞いたフランソワは満足気に言った。

「ついに見つけたのだな。よし、約束だ。お前は今まで通りに仕事しろ。しかし傑作だ。本当に神がお前に人間へと戻るチャンスを受けくれたのかもしれないな。授けてくださった、と言ったほうが良かったか？」

「失礼します！」

クロードは苦しかった。

よりによって一番嫌いな人間に、自分の取り乱した行為を告げ、何よりもあの男と少女の運命をねじ曲げる火ぶたを切ってしまったことに、自責の念を感じてもがいていた。

そして一刻も早くこの場を立ち去り、一人になりたかった。

「待て！」

部屋のドアノブに手をかけたところで彼に止められた。

「そうか。そんなに後悔しているのか。だったらクロード、貴様は今夜あの仮面の男が捕まり、少女と引き離され、叫ぶ様を見ているがいい。けじめはしっかりつけたほうがいい。私はお前に残忍なことを要求したか？」

明らかに彼は、はつきりとクロードの不幸を楽しんでいる。

「いいえ……」

確かに自らの苦悩と向き合うことは大切だ。

しかし彼は密告した自分が嫌だった。

進んで選んだ決断なのに、彼の本心は常にそれとは別方向に立っているのだ。

どうすればいい？

自分は自分が楽になりたいばかりに、その時の気分で人を不幸に
してしまった。

彼は今度は上官に失礼の一言もなしに部屋を出て行った。

その夜のことだった。

アンドリユーはリディルと騎士の仮面をつけて遊んでいた。

「やだ、お父さんったら、変な顔。」

その時だった。

「よし、武器を捨てて手をあげろ！そのまま床に腰をおろせ！」

銃が鳴り、家庭の温かい雰囲気が一瞬にして壊れ、直後にドカドカと足音を立て、警官たちが次々にアンドリユーの家の中に押し寄せてくる。

「動くな！その娘！座ってる！」

リディルは突然の出来事に驚きアンドリユーにしがみつこうとしたが、警官の一人が怒鳴り散らしたために、恐怖で動けなくなってしまった。

「お父さん、この人たち誰？私たち殺されちゃうの？」

「大丈夫だよりディル。この人たちはリディルを殺したりしないよ。お父さんに用があるんだ。」

アンドリユーは予想外の出来事に一瞬たじろいだが、覚悟を決めるとリディルに優しく言った。

「立て。」

ひげの生えた、警察長官らしき男が彼に命令した。

「お父さん、いや！」

彼女が叫ぶのを見て、長官は再度アンドリユーに言う。

「早く立てと言っているんだ！このクズめが！」

間違いない。

この長官は家族愛のような二人のやり取りに吐き気がして、彼を呪っている。

ここ周辺では名の知れた警官、フランソワだ。

アンドリユーは強引に立たされると外へと連れていかれる。

「やめて！お父さんを連れていかないで！誰か助けて！」

「来るんだ！」

「いやだ、はなして！」

そばにいた警官にかつがれるリディルは足をバタバタとさせ、必死に抵抗するが、まったく無駄であった。

「ダメなの！助けて！お父さん助けて！」

「リディル！」

「おい！誰がしゃべっていいと言った！前を向いてろ！」

腹いせだろうが、フランソワがアンドリューのすねのあたりを思い切り蹴飛ばして、痛さのせいでしゃがみこんだ彼のみぞおちに何度も蹴りを入れて追いつちをかける。

「早くしろと言っているのが聞こえるのか！」

だがそれだけでは終わらなかった。

「なんだその目は？」

アンドリューがあまりにも強烈な仕打ちに腹を立て、フランソワをにらんだのだ。

「貴様……」

彼は部下に合図を送るとアンドリューに聞こえるように、わざと大きな声で叫んだ。

「よし、全て燃やせ！こいつの魂ごと火刑に処すつもりでやれ！」

周囲で燃やせ燃やせと部下の怒号が飛び交う。

ああ、俺の家が！

「やめて！嫌よ！お願いやめて！やめて！やめてっ！やめてえええええーっ！」

少女のか細い悲鳴が響き、その頬からそばでパチパチと飛ぶ火の粉や炎よりも熱い涙が流れ出る。

「仮面をしているな。本当ならこれをとってやりたいところだが、私の友人に申し訳ない。後日ゆつくりと拝ませてもらうぞ。」

フランソワは民家の壁に隠れて様子を見ていた人影にでも話しかけているようだった。

「リディルーっ！」

アンドリユーを乗せた檻のついた馬車は牢獄のほうへと走っていた。

彼が最後に泣きそうな顔の彼女を見たのはその夜だった。

その後少女がどこへ連れていかれたのかは誰にも分からない。

ただはつきりとしているのは、家が燃やされるのをこっそり見ていた警官がいたということである。

第12章 天罰は下された

「あ、あ…」

クロードはその場に座りこんだ。

今日ほど後悔した日はない。

フランソワに告げてさえいなければ、あの二人は今頃楽しい、さやかな幸せに包まれていたことだろう。

「なんて自分はバカだったんだ！人を犠牲にしてまで生きているなんて。そして長官。やはりあなたは恐ろしい人です！あなたのせいで、私の中の精神は病んでしまった。もう自分は、私は私でいたくない！」

彼はゆっくりと向きを変えて海岸のほうへと走った。

そして水面に映る自分の姿に向かって言った。

「長官。もうやめにします。あなたのおかげです。おかげで死ぬのが楽になりました。それだけ最後に伝えておきます。だってそうでしょう？私は死ぬよりつらい経験をしたんですから。本当は経験する前に死にたかったな…」

「ならばすでに終わった事だ。経験してしまった事を今さら言っても仕方がない。生きればいい。」

フランソワの声が聞こえる。

振り向くと彼がいた。

「終わりなんかじゃない！一生続くんですよ？死ぬよりつらいことがこれから何度もあるなんて、私には耐えられない！」

「だがなクロード……」

「嫌だ！聞きたくありません！」

クロードは必死に耳をふさいだ。

「あなたはいつだってそうだ！生かしてつらい思いをさせるじゃないか！来ないでください。もうおしまいです。」

彼は思いきり地面を蹴って空中に身を投げる。

風がヒューヒューと耳をかすめ、やがて全身には凍てつく海洋の世界が泡とともに彼に襲いかかる。

やっと解放される。

クロードは海の中にいるというのに、まるで激務をこなして家に帰って一息ついた時のような、実に力の抜けた、和やかな顔をしていた。

「死後の世界に秩序はあるのかな？正義と悪はあるのかな？あるわけないか……」

クロードの思考はそれを最後に停止した。

母なる海へと人は帰る…

「おしまいか…」

フランソワは静かになった港を見て、クスクスと小さく笑った後、急に大きな声を出して叫んだ。

「お前は負け犬だクロード！負けたんだぞ？自ら負けを認めただ！悪魔の男！あの仮面に騙されたんだ…」

何が心の弱さだ、何が感情をうまくコントロールすることが苦手な連中だ。

奴らほど心をうまく操れる者たちはいない。

彼は思っていることを次々に口にした。

「奴らは悪魔だぞ？人を騙すことぐらい朝飯前の血も涙もない連中に、お前は魂を売ったんだ。あわれなクロード…」

そう、あわれなクロード。

彼は目の前の地獄の光景から逃げたのだ。

「私のやり方がまずかったか？」

フランソワの異常なまでに激しい悪への制裁に、彼は心を動かされて自害したのではないだろうか？

「いいえ、そんなことは……」

近くにいた部下が言った。

「いいか、私に同情するな。お前が思っていることを言え。」

部下は少しばかり困った顔になったが、恐る恐る口を開いた。

「私としては、その、彼の性格を考えると多少ながら……」

しかし部下が言いかけたとき、彼は思い切り片足を上げ、地面にストンと振りおろして気をつけの姿勢をとった。

「バカ者！前にも言ったはずだ。我々は国家の繁栄のために動く崇高な組織だ。ガキの自殺ごときで血迷って、何が警察だ！泣きたければ泣かせてやればいい！やめたければやめればいい！私は試しただけだ。クロードが、あいつが我々の威信を保つに足る存在なのかを！奴にこの仕事は向いてない。ただそれだけだ！」

部下は怯えきって声も出なかったが、フランソワは続ける。

「私に影響されて死んだとは、勝手な！やつはやつの意志で死んだ。やつ自身の問題だ。そもそもそんな弱い人間など我々には必要ない。貴様もそうだ。クロードに同情することは弱いあかした。奴は我々の面子を丸つぶしにしようとして、見事にやってのけた！そ

の意志の強さは買うが、私は認めない。このまま潮にもませろ！いいな！」

「は、はっ！」

部下は敬礼すると一目散に走っていった。

「どうだ、楽になったろう？」

彼は再び揺れる海面の様子を見て笑う。

「なんとという愚かなまねを。」

理想を追い続けたあげく、現実にはせつし、死に至る。

なぜ彼はそんな現実を変えようとはしなかったのか？

いや、変えようとはしていた。

神の意志を聞くという彼なりのやり方で、変えようと努力していた。

だが、その行動と考えに問題があった。

「彼らは弱いだけではないのでしょうか？」

実はクロード自身も弱かったのだ。

フランソワにも弱さがあるぞということばかりに気をとられ、自身はどうなのか、見つめなおす必要があったのだ。

しかし、あるうことが、彼は死ぬときまで自分の弱さに気づくことができなかった。

「自分は弱い奴らとは違う。」

そんな意識があったからこそ、弱さに気づかなかったのかもしれない。

これは強いていう一種のうぬぼれのようなものだ。

「悪にはなりたくない！」

彼自身もはつきりそう言ったのだから、自分は正義だから大丈夫だと、無意識のうちに決めていたはずである。

決めていたのではなく、フランソワに決めさせられたと言ったほうが適切であろう。

弱さゆえの自害。

弱さゆえの意志のぐらつきと後悔。

神の意志とは、彼に傲慢になってしまったことを戒めさせること。

つまり、フランソワを使って彼に自害をさせるよう仕向けた神がそこにいたのかもしれない。

神は信じる者全てを救うと言うが、それはあくまで人のつくりだした理想に過ぎない。

もともと神は人の味方をするという考えが、うぬぼれの証であるかもしれないのだ。

それでも人々は災いが起きると、神でも破壊神だの邪神だのと都合のいいように使い分ける。

まるで自分たちが神の支配者にでもなっ たかのように…

第13章 羊たちは狼の死肉をむさぼる（前書き）

シャンドレーの騎士団「知と血の断罪」はこのたび10000アクセスを突破いたしました。読者の皆様に深くお礼を申し上げます。ありがとうございます。私自身、今後手を抜くことなく執筆を続けて参ります。次話にご期待いただけたら幸いです。

第13章 羊たちは狼の死肉をむさぼる

ジャラジャラという音とともに、馬車についていた檻から錠前が外される。

「出る。」

アンドリューは強引に警官に引つ張りだされ、牢獄へと連れていかれる。

なんとなくかりしていたことか。

あいにくオスカーたちは丘の洞窟で番をしていたから、少なくとも明日の朝にならなければ、自分とリディルが捕まった事が分からないだろう。

「ここへ入れ。」

鉄のカビ臭さとほのかにたちこめる尿の悪臭は、たちまちアンドリューの鼻をねじ曲げようとした。

そればかりでなく、床に敷かれているのは擦り切れてボロボロのわらだった。

「あんた、新入りだな？どこから来た？」

牢に入れられてすぐに彼は、壁の向こうにいる男の声を聞いた。

かなりしわがれていたために、彼は声の主が老年に近いことを悟った。

「俺か？この生まれだ。あんたは？」

「実は、俺は地獄から来たんだ。」

冗談を言っただけで笑っている老人に、アンドリューはこんな余裕がどこからでてくるのかと思った。

すでにこの腐敗した環境に慣れてしまったのだろうか？

「あんた、大丈夫か？」

「ああ、ピンピンしてるよ。頭のほうだけな。」

「なら、体のほうは？」

アンドリューは老人にたずねた。

「もう随分と痛めつけられたね。悪事を働きたくなる性分だな、そのたびにおっかないひげを生やした親玉警官がやってきて俺を踏んだり蹴ったりするんだよ。」

親玉と言えば…

自分の家に入ってきた、家を燃やしたあの男だ。

しだいに彼の体から怒りがわきあがってくる。

「いつ出られる？」

「さあね。もう長いことここにいるが、入れられた奴は俺の目の前で皆血を吐いて死んでったよ。あんたが今ここに来るまで、俺はもう嫌な思いをしなくて済むと思っていたのに残念だよ。」

こんなところに落ち着いてられない。

アンドリューは老人の言葉を聞いて焦り始めた。

どうにかして出る方法、逃げる方法を考えなくては…

「焦ったって無駄だ。このことは俺が一番よく知ってる。あの長官ににらまれたらおしまいだ。あんたも気をつけるこつたな。」

「まてよ。あんたはしょっちゅう悪事を働いているんだろう？だつたらなんで生きてるんだ？あんただけ体が丈夫にできてるのか？」

老人は笑いながら言った。

「そんなわけあるか。俺が生きているのはあいつのやり方のせいさ。さんざん人を苦しめたあげく、死ぬのを待っているんだ。自分にとって気に入らない存在が、絶望しながら力なく倒れていくのをな。」

どうやらとんでもないところに来てしまったことは確かだった。

しかし彼は脱出をあきらめるつもりも、リデイルを手放したままにいるつもりもなかった。

全身を使って、牢の鉄柵に体当たりを始めたのだ。

ドシンというものすごい音が、牢全体に鳴り響く。

「おい、うるさいぞ。何をやってる？」

音に気付いた兵士がアンドリューのいる牢までやってきて言い放ったが、彼が柵を壊そうとするのを見て急に顔色を変えた。

「やめろ！無駄だやめろ！」

だが彼は体当たりをやめない。

それも仮面をつけたまま、何度も抵抗を続ける。

「よしんだ。そんなことをしても柵は壊れないぞ。」

「そうだやめろ。自分が傷つくだけだ。あんた、あの長官に目の敵にされたいのか？」

老人も静止させようとするが、彼は全く耳をかそうとはしない。

「どうした！なにがあつた？」

音はほかの兵士にも届いたのだろうか、次々と見張り役たちが集まってくる。

「おい、長官に報告だ。」

一人の兵士が仲間にそう告げるのを聞いた老人は、ああもうおし

まいだと両手で頭を抱え込んだ。

「私はてつきりお前かと思っただぞ。違うんだな？」

「ええ、私は今回ばかりは無関係です。ああ、でもそのかして彼に体当たりさせたとお考えでしたら、喜んで罰を受けますが……」

やってきたフランソワを見るなり、老人は怯えた口調で腰を低めて言った。

よほど恐ろしい男なのだろうが、家を燃やされた経験をしたせい、アンドリユーはフランソワを今はなんとも思っていないかった。

「いいや、私は言っただぞ。お前を殺しはしない。まだその時ではないからだ。分かるな？」

老人はその言葉を聞いたとたんに涙目になって彼の足にすがった。

「どうかお願いします。最後にあの牢の中で息絶えるのは嫌なんですよ。どうか私に罰を与えて元気なうちに殺してください。」

「離せ！このドブネズミめが！」

彼は老人をうつつしそうに足でけると牢に押し込んで鍵をかけさせた。

「どうか！お願いです！私に罰を！私に罰を、わたくしめに罰をお与えください！」

鍵をかけたはいいが、今度は老人のほうで柵に体当たりを始めたため、フランソワは一度彼を外に出して部下に言った。

「仕方ない。うるさいこいつを連れていけ。いいか、死なない程度にやるんだ。」

「分かりました。」

兵士たちは彼の言葉に従い、一礼すると二人ががりで老人を引っ張っていく。

「うわあああ！いやだ！殺してくれ！頼む！私に死の儀式を！」

暴れる老人に笑うフランソワ。

「相手を満足させないのがお前のモットーか？嫌な奴だな。」

「その通りだ。だが安心しろ。お前には生死を問わない苦しみを与えてやる！」

ムチで打たれるアンドリューは痛みを感じながらも、決して声をあげなかった。

皮膚にむごい傷跡が増えていくたびにフランソワの感情を感じとっていた。

「そうだ！罪を自覚しろ。お前が悪なんだ。我々の前にひれ伏せ！」

怒りの暴走はもはやだれにも止められない。

俺は正義なんて形だけのものに、悪人を戒めさせる物事とは無関係に痛めつけられているんだ！

彼は心の中で痛みに耐え、そう叫んでいた。

悪は罰しなければ！

このときのフランソワの目…

人間のはずなのに、目だけが狼だ。

いや、羊の仮面をかぶった狼たちが、アンドリューをなじっていた。

善の意識、悪の意識は吹き飛び、秩序もかき消された。

群れる者の勝利と血の宴が、大平原のかなたにまでこたまし、完全なる自然の掟がここに完成した。

第14章 支配者のルール

この世に息づいている者たちには感情が備わっている。

生物たちは皆、感情で動くものだ。

しかしあるとき、強力な支配者によって感情を抑圧されてしまつたら、息苦しいことこのうえない。

もちろん、進んで支配へ下る者もいるだろう。

その逆も…

「お父さん…」

リディルはアンドリューと引き離された日から、孤児院へと連れていかれ、そこで不安な日々をすごしていた。

あの時、あの夜、警官に身よりがないと思われてしまったようだ。

事実そうなのだが、それでもオスカーにしばらく面倒を見てもらうくらいはできたはずだ。

たえそうだとしても、あいにくフランソワの部下は子供の言うことなど信じてくれなかった。

「お父さん、どこ？」

彼女はまたひとり言をつぶやいた。

さみしくてたまらないという気分でもあったが、この孤児院が恐ろしいというのが本音だった。

この孤児院には、昔は子供が多くいたようだが、今はリディル一人しかないのだ。

一体ここどこが恐ろしいのだろうか？

確かに庭は荒れ放題で、朝方にはしばしば不気味な霧が立ち込めたが、問題は別にあつた。

「リディル？リディル？」

「はっ！」

中年の野太い女性の声に、彼女はビクリと両肩をこわばらせた。

女性とは言っても、男勝りの肥えた体つきをした女で、よく我々が想像するような美人ですらつとした女性とは程遠い印象だった。

リディルは女の声がすると同時にすごい速さで、目の前の落ち葉をかき集めて一つにまとめると、女性のほうへと走っていった。

「このバカ娘！」

女性は一ディルが来たたん、ものすごい勢いで彼女の頬を打ち、はり倒した。

「どうして皿を片づけないのさ！いつも朝食の後は紅茶を飲むから早めにカップを洗っておけて言っているだろう！このまぬけ！」

いかにもきつい目つきの女性はナタリーという名だった。

彼女は今怒った出来事の通り傍若無人で人をこき使う、男のような女であった。

孤児院に一ディルしか子供がいなかったのはそのためで、不幸なことに、彼女を連れてきた警官はそんなことは一切知らなかったのだ。

おかげで彼女は孤児院に来て早々、ナタリー夫人よる、ナタリー夫人のための規則を激しい苦役とともに体に叩き込まれるはめになった。

「ここでは私が絶対なんだ。逆らうんじゃないよ？」

初めて言われた言葉がそれだった。

彼女は、彼女一人の力ではたとえ支配に不満があっても、それに立ち向かうことすらできないのだ。

「お父さん助けて。オスカーさん、助けて……」

「ああ、なんだって？聞こえないね？」

「助け……」

「うるさいんだよ！」

ナタリーはリディルの服を力強くつかむと、パンパンと何度も右へ左へ彼女の頬を打った。

「何か不満があるのかい？言ってごらん！十回でも百回でも叩いてやる！」

「ごめんなさい！不満なんてありません！ゆるして……」

リディルは頬をさすりながら、夫人に必死に謝った。

「だから、聞こえないんだよ！」

「ゆるしてください！お願いです！ゆるしてください！」

彼女の泣きじゃくる声が、その後何度も響いたが、あたりには人気のない草原や木々の群れが並んで立っているだけで、むなしい叫びは、いともたやすく黙殺されてしまうのだ。

「分かったらさっさと皿を片づけてきな！泣いてんじゃないよ！私が悪いみたいじゃないのさ！」

もうこれ以上はナタリーの暴力につき合う余裕がない。

彼女は涙を袖でぬぐう暇もなく、震える体でぎこちなく走ってい

った。

もうお分かりの通り、彼女は眠れぬ夜を何日にもわたって過ごしてきた。

初日より随分と落ち着いてきたが、ナタリーに明日も会わなくてはならず、こっぴどく叱られるかと思うと、そのたびに彼女はアンドリユーの名を呼んで恐怖に耐えねばならなかった。

なぜナタリーは人をこき使うのだろうか？

人は誰も見ていないところでは素の自分をさらけ出すものである。

人々の監視の目が理性を与え、野生的な行為を止める役目を果たし、暴虐にはしる者を奈落へと落とすのだ。

しかしここにはそれがなかった。

そうだとすると、これが間違っている、これが正しいといくら言ったところで意味がない。

ただ、弱い者が強い者に従い、搾取される世界があるのみである。

彼女が過去のひがみとして現在のような性格になったのかは分からないが、彼女の心の中には、人のためになどという考えはまったくなかった。

リディルは夜中にふと目が覚めた。

空き部屋はあったが、ナタリーがそれら全てを私用として使っていたために、彼女は夫人が近寄らないような古びたがらくたがほりをかぶった部屋で寝ていた。

時折、窓の割れ目から入ってくる冷たい風が、リディルの首もとを冷やすせいで、彼女は何度も粗末な毛布を深く頭からかぶらなければならなかった。

その頼みの毛布も長いこと放置してあったためか、汗のにおいや豚の食べる干し草のにおいが混じり、眠りを妨げた。

これでは明日の仕事に支障をきたしてしまう。

彼女はゆっくりと立ち上がって、何か別の毛布はないものかとあたりを探し始めた。

部屋の中は散らかってはいないものの、金銀に光る壺や水差しなどのアンティークが置かれている。

ナタリーの趣味だろうか？

「これじゃよく見えないわ。」

リディルはカーテンを開けた。

月の青白い光が窓枠のシルエットを見事に映し出し、部屋はほんのりと明るくなった。

あるのはやはりがらくただけだった。

彼女は氣落ちしたが、ふと小さな鏡台に目が釘づけになった。

女の子ならば興味をひかないことはまずない。

しかし彼女は平民の出だったから、彼女のかつての母の化粧する姿を目にしたことはなかった。

「なんだろう？どうやって使うのかしら？」

恐る恐る鏡台の前に立ったりデイルはイスを動かしたり、鏡台の裏をのぞきこんだりした。

そして鏡のすぐ下に取っ手があるのを見つけると、これは何か物を入れるところなのだとな得した。

「何が入っているのかな？」

部屋には誰もいなかったが、それでもやはり興奮する。

見れば夫人に怒られるのだろうが、今ナタリーは寝ているはずだ。

彼女は決心すると、やたらと凝った模様の銀色の取っ手を引っ張った。

「きれい。でも、これは一体……」

中には大樹のレリーフが施された金の懷中時計がはいっていた。

もちろん彼女は懐中時計など見たことがない。

中でカチカチと何かが動く音に驚き、ゴキブリでもいるのではないかと思い、反射的に懐中時計を放り投げてしまった。

「あつ！」

だが時すでに遅く、時計はグシャリと卵が割れたような音を立て、床に落ち、その衝撃で上ぶたが開き、無残に折れて動かなくなった針が目に入る。

「あ……」

とたんに彼女の顔が涙目になる。

これはこういう物だったのだ。

リディルは取り返しがつかなくなってしまうたと思い、グズグズとその場に朝まで泣き崩れていた。

幸い夫人は鏡台の引き出しをあけることはなかったが、リディルにとってはむしろ不幸だったのかもしれない。

いつバレるか分からないという恐怖で、彼女は鏡台の引き出しに隠した懐中時計を見張り、常に緊張していなくてはならなくなったのである。

第15章 逃亡（前書き）

諸事情により、R15とさせていただきます。読者の皆様、なにとぞご了承ください。

また、マイページに自己紹介文を追加しました。興味のある方はぜひお気軽にアクセスしてください。

第15章 逃亡

無数にできた傷が、罰の凄惨さを物語るなかで、フランソワの命令のおかげで、アンドリュウの顔だけは無事ですんだ。

結局、長官は仮面の下をのぞくようなことはしなかった。

なぜだろう？

「私の経験からして、秘密を知ってしまったら、たちまちそれがつまらなくなるからだ。だから、お前の顔は死んでから見ることにしよう。」

たずねたところ、彼からの返事はそれだった。

ちなみに彼が罰を受けた日から、老人がいなくなった。

どうしていないのかと兵士にきいても、何も答えず、しつこく問うと、うるさいという返事が返ってきた。

これもフランソワの命令なのだろうか？

それとも、老人を殺しはしないという話は嘘だったのではないのか？

ああいう人間ならやりかねないが、はっきりとした根拠はない。

「もうやめだ！」

アンドリューはついに気が滅入って床に大の字に寝転がった。

ここではそよ風にゆらぐ草の香りも、パリ郊外のフォンテーヌブローの森に生い茂る葉のざわめきも聞こえない。

ここで俺は死ぬのか？

「残念だ。死は怖くない。だがリディルを守ってやれなかったことが残念だ。」

こうして彼が絶望の淵に立たされていた時、またも交代の兵士が来た。

この一時間ほどの間に、すでに五回以上になる。

なにかあったのだろうか？

彼がそんなことを考えていると、今度は五分も経たないうちに交代が来た。

何かが変だ。

「今日は妙に交代が多いが、長官の命令か？」

さすがに不審に思い、交代しろと言われた兵士がもう一方の兵士にたずねた。

「ああ、そうだ。だから早く行け。」

兵士はフランソワの命令ならば仕方ないと、半ば顔をしかめて出ていった。

だが今度は兵士が出ていった直後に、十人の兵士が縦二列にならんで現れ、声をそろえて交代の時間だ、と言ったのだ。

これを見た残りの兵士はおどおどしながら、互いに視線を投げあって驚きを隠せない様子だ。

「おい、今交代したばかりだろう？一体何の必要がある？」

「分からないが、何かあるんだろう？あの長官の考えていることはさっぱりだ。」

「俺たちをからかっているんだろう？いつものことだ。それともこれも訓練だ。諸君らの規律ある行動は、国家繁栄の輝かしい第一歩だ、か？」

「ふつ、はーっはっはっはー！」

兵士たちはフランソワの口癖をまねして大笑いしながら、牢の外へと何の疑いもせずに出て行った。

あまりにまじめな台詞は逆に兵士をばかばかしいという気分させることがある。

普段は恐ろしいフランソワがこんな見方をされていることが、アンドリユーにとっては驚きだった。

「おい、アンドリユー。元気か？」

「ん？誰だ？」

見知らぬ兵士に話しかけられ、彼はとまどった。

「俺だ。オスカーだ。」

「なんだって？」

耳を疑ったが、彼に近づいてきた兵士は深くかぶった帽子をとって、代わりに仮面をつけてみせた。

「大丈夫か？こんなところで…」

「心配ない。諸君。我らが騎士団長にごあいさつしろ。」

するとオスカーの一言で、その場にいた全ての兵士が帽子を脱ぎ、仮面をつけアンドリューに頭を下げた。

「どういうことだ？どこからこんなにたくさんの仲間を？」

「今ははなすと長くなるから後だ。それより時間がない。リディルの居場所を突き止めないと。だろ？」

彼は牢屋の鍵をポケットから取り出して言った。

「ほかの兵士はどこだ？」

「ああ、あいつらには少し眠ってもらうことにした。別に殺しても良かったがな…」

その声とともにヴィクトルが出てきた。

相変わらず酒に酔った声は直っていなかったが、アンドリユーにとっては彼に再会できたことがなによりうれしかった。

「よし、開いたぞ。馬はエミールが外で待機させてある。だから急ぐぞ。」

「なんだ？お前ら、何やってる？仮面なんかかぶって。今は勤務中だぞ？長官に見つからないうちに、早く片付けるよ。」

そのときオスカーは焦りを覚えた。

一人だけ遅刻して、牢へこっそり入ってきた兵士の存在に気付かなかったのだ。

だが兵士は彼らが侵入者だとは思っていないらしい。

「悪かった。片づけるよ。でもお前も早く長官のところへ行っただろうが、ほづが、いいぞ。お前の遅刻に怒って、今お前の罰を考えてる。」

「本当か？」

「本当さ。遅れるほど厳しい罰になるぞうだ。分かったら早くしろ。」

「ああ。ありがとう。」

ヴィクトルがうまく機転を利かせたおかげで、兵士は足早に執務室のほうへと走っていった。

「よくやったヴィクトル。行くぞ。」

彼らは静かな足取りで素早く牢を抜け出し、外へと出た。

外ではエミールが馬に乗って部下たちとともに待っていた。

「エミール、久しぶりだな！」

だがアンドリユーが彼に向って片手をあげてあいさつした瞬間、オスカーが声を張り上げた。

「おい、伏せろ！」

「なに？」

銃の音とともに、弾がものすごい速さでアンドリユーの前をかすめた。

「うおっ！くそっ！」

「奴が来た！急げ！」

後ろから怒りに満ちた顔のフランソワがわずかな手勢をひきつれて、アンドリユーたちに向かって発砲したのだ。

「逃がすか！撃て！撃ちまくれ！」

逃がしてたまるか！

絶対にお前の化けの皮をはぎ取ってやる！

まんまと騙され、プライドを傷つけられた長官は我を失い、なかなか命中しない部下の銃を取り上げた。

「かせ！私がやる！」

今は昼間だったが、周りは街から離れた牧草地帯だったため、隠れる場所がなかった。

彼は遠ざかり、すでにぼやけて見えるアンドリューに狙いを定めた。

「見ている！今に見ている！私をだしぬいたことを、後悔させてやる！今だ！」

ドカン！

風圧とともに弾が騎士団のほうへと一直線にとんでいく。

「…」

一瞬、アンドリューが体をこわばらせたような気がしたが、彼はその後も何事もなかったかのように走り去った。

「ちくしょう！このくそつたれ！」

フランソワは手にした銃を思い切り草地に投げつけた。

そして先ほど遅れてきたことを報告した兵士をにらみつけた。

「このマヌケが！お前のような奴がいるから軍の規律が乱れ、仮面をかぶった変態一人にも逃げられるんだ！」

兵士のゆるしを請う悲痛な叫びと、フランソワの怒りの声がその日の晩、長きにわたって響いたのは言うまでもない。

第16章 貴族にとっての屈辱

朝目が覚めると、外から陽が差し込み、それは人類にとって希望の燃ゆる光となるのだ。

だがリディルにとっては全く逆であり、絶望の日々の新たなる幕開けだった。

「いつまで寝てるんだよ！」

初めのころは、よく夫人にこう言われたものだが、今となつてはリディルのほうが早起きで、ナタリーを起こすようになっていた。

「リディル！リディルどこだい？客人を迎えな！」

「は、はい！ただいま…」

ナタリーの大きな声に驚いて、彼女はパタパタと走っていき、玄関の扉を開けた。

「あ…」

扉を半分開きかけたとき、彼女の体に悪寒が走った。

扉の隙間から見たのは、白い皮の軍足、腕には軍の校章。

そして見上げた先には警察の帽子。

「いや！」

彼女は叫び声をあげて勢いよく戸を閉めようとしたが、夫人によって止められた。

「あんた、何やってるのさ！バカな子だね！客との接し方も分からないのかい！」

夫人は彼女を叱りつけると強引に扉を開いた。

「何の用だい？」

「ここは孤児院だろう？身寄りのない子供を預けに来た。」

リディルをさらったときとは違う兵士が現れたが、それでも彼女の恐怖がおさまることはなかった。

「あんた、分かってるんだろうね？ほいほいと子供を送ってくるけど、国からの寄付もないと、ここはつぶれるんだよ。そんなことをあんたに言ったところでしょうがないことは分かってるけどさ。」

「では、私はこれで。」

「ああ、とつとと失せな。朝から騒々しいね。」

夫人は兵士がいなくなると、リディルにだるそうな視線を向けて残った子供と話をするように首で合図して二階へと消えていった。

「こ、こんにちは。じゃなくて、おはようございます……」

彼女はナタリーに教えられた通りに、丁寧に挨拶した。

しかしむこうからの返事はなく、むしろ笑い声がかくかくすと聞こえてきた。

「なあに？その挨拶、なんだかごっこ遊びみたい。」

「ご、ごめんなさい……」

「どうしてあやまるの？変な子。」

子供はさらに笑った。

その態度にリディルは少し頭にきたが、騒ぎを起こすとナタリーの雷が落ちると分かっていたから、すこしでも愛想よくふるまおうと努力した。

「私、リディル。あなたは？」

「シャルロットよ。呼ぶ時はシャルって呼んでね。」

金髪で青い眼のゲルマン系。

リディルと同年で、少し彼女よりも背の高い、いたずら好きな少女であった。

良家の娘で貴族の出身だが、妻と夫が離縁したため一人になり、ここに來たのだという。

リデイルは友人ができたことに、これまでにない喜びを感じていたが、内面では平静を装いつつシャルロットに接しながらも、彼女の運命に強く同情した。

貴族で一人っ子であるがゆえにいたずら好き。

この孤児院でこれほど不幸な彼女はいないだろう。

自尊心が高い貴族にとってはナタリーに踏みつけられる毎日はずらぐ、いたずら好きの性格は、夫人のかんしゃくを招きやすいことは明白だった。

「ここではナタリーさんに逆らったらいけないの。」

「逆らうとどうなるの?」

「大きな手でたたかれるの。すごく痛いよ。」

「孤児院って、私たちを守ってくれるところじゃないの?それってなんだか変だわ。」

「そうなの?」

「そうなのって、あなたそんなことも知らないの?」

シャルロットはあきれた声で言う。

「大丈夫よ。身分の低いおばさんができるのは、ただわめいて泣くことだけなんだから。」

「おやおや、新入りの子ときたら、ここに来たとたん、とんでもないことを言うもんだね。」

いつの間にか夫人が降りてきて言った。

「リディル！」

「は、はい！」

怒られる。

すっかり夫人の接し方について言わなかった私のせい。

彼女はそう思った。

「そこで見てな。確かにあんたが悪いけど、こついつのは新入りに直接分からせたほうがいい。とくに貴族のお嬢様にはね。」

数分後、シャルロットの叫び声が、孤児院中に響いた。

「あたしはね、貴族っていうのが大嫌いなんだよ！偉そうにしゃがって！」

そう言って彼女の頭をわしづかみにして、ぐいぐいと前後に揺らす。

金の長髪はすごい握力で、背中で一本に束ねてあった三つ編みもくしゃくしゃにされてゆく。

「痛っ！何するの？やめなさい！」

「やめなさいだって？生意気な口を聞いてんじゃないよ！」

リディルに言われたばかりだというのに、シャルロットは孤児院に来て早々、夫人にはり倒され、恐ろしい経験をした。

「やめて！シャルをたたかないで！」

「あんたは黙って見てればいいんだよ！」

相変わらずの迫力のある声に、リディルは圧倒されて押し黙ってしまった。

「あたしからはつきり言っておくけどね、ここじゃあたしが全てなんだ！逆らうんじゃないよ！」

ナタリーは目を大きく見開いて、今にも殺人を犯すような勢いでシャルロットに忠告する。

「い、いや。そんなの納得できないわ……」

シャルロットは涙声になって、それでも夫人に反論する。

「だつたらあんたが納得できるように努力すればいいだけの話だよ！あたしに何か文句言うんじゃないって言ったばかりだろう！人の忠告を何秒で忘れるのさ！頭の悪い子だね！」

「頭は悪くなんかないもん！」

しかしその言葉は夫人の神経を逆なでした。

「そうというのが頭が悪いって言うんだよ！」

その後何回にもわたってシャルロットは頬をたたかれ、どつかれた。

普通の人間なら、もう懲りて大人しくしているのだろうが、貴族のプライドを泥にまみれて生きてきた庶民に汚されたシャルロットは、夫人の大事にする物をうばってやろうと、リディルになだめられながらも考えていた。

「リディル、あなた悔しくないの？」

「えっ？」

彼女は夫人をどうすれば怒らせないように行動できるか、ということだけを考えていたから、シャルロットの言葉と勇敢さに驚いた。

「こんなの嫌よ。仕返ししてやらなくちゃ気がすまないわ。」

「仕返し、できるの？でもやったらまたたたかれるのよ？」

体力では圧倒的にナタリーのほうが勝っている。

だからと言ってほかの手段を選んだところで無事ですむはずもない。

「う…」

結局、夫人への仕返しは無理と分かったシャルロットは、悲しさ
と悔しさ、やりきれない思いを抑えきれずにリディルにすがって泣
き始めた。

「あ、泣かないでシャル。泣くとまた怒られるわ。」

「何よ。ここじゃ泣くことも許されないの？めちゃくちゃよ。こ
こは何から何までおかしいのよ。」

リディルはそれでも、泣くと夫人に怒られる、シャルロットがひ
どい目に遭うからと、説得し続けた。

第17章 無意識な心（前書き）

毎回シャンドレーの騎士団と知と血の断罪をお読みになっていただいている皆様へ、更新日についてお詫び申し上げます。

基本的に更新日については何の取り決めもございませんが、最低でも一週間に一話の割合で更新させることにしております。早めに申し上げるべき事項だったため、報告が遅延いたしましたことを深くお詫びいたします。

また、本作品はこのたび2000アクセスを突破いたしました。これからも読者の皆様にご支持いただけるよう、全力で執筆に取り組む所存であります。

第17章 無意識な心

シャルロットが孤児院に来てからというもの、リデイルの地獄のような日々は、わずかながら和らいでいた。

夫人の叱る対象が二人に増えたおかげで、どちらかが怒られることがあれば、もう一方は無事ですむからである。

とはいっても、シャルロットがミスをするのはまれで、ほとんどの場合はリデイルが失態をやらかすことが多かった。

さすがは貴族の娘といったところだろうか、おおよそのことはぬかりなくやり遂げるのだ。

「シャルロット！そのイスはもう使わないからお前たちの寝る部屋に持って行っておくれ。」

「はい。」

シャルロットは決して夫人への接し方に満足したわけではなかった。

はい、と返事をしながらも、心の中ではナタリーを疎んじていた。

「お、重い…」

小さな体では、階段をのぼりながらイスを運ぶことは重労働だったから、彼女は途中で止まっては、またしばらくして上へと登って

いくのだった。

リディルが手伝おうとする事もあったが、意地の悪い夫人にいつも止められてしまうのである。

「つ、ついた。」

やつのことで二階にたどりつくと、今度は床に引きずらないように上体をそらしてイスを運ぶ。

以前、床に引きずっていたところをナタリーに見つかり、叱られたことがあった。

いつまでこんなことが続くのだろうか？

八つ当たりでもしてやらなければ気が済まない。

寝室まで来たシャルロットはそう思って、いつものようにいたずらを考えついた。

しかしこのいたずらは、結局は夫人の顔を浮かべているうちに未遂に終わるか、やっても元に戻すかのどちらかだった。

それでも自分は、あの夫人の所有物をいじくり倒してやったんだという気になれるから、いくらか憂鬱さを払いのけることはできた。

彼女は今日は鏡台に指で落書きしてやろうと思い、身を乗り出した。

「あれ？」

ふと鏡台の引き出しがわずかに開いているのがシャルロットの目に入った。

隙間からは、金色の何かが顔をのぞかせている。

「何だろう?。」

彼女はそっと引き出しを開けてみる。

「きれい……」

中からでてきたのは、金色の懐中時計だった。

久しぶりに貴族に戻ったような感覚。

彼女は嬉しくなってその時計のふたを開いた。

「え……」

カランという音とともにふたが外れた。

そして中には割れて亀裂の入った時計盤と折れた長針。

「シャルロット!こんなところにいたのかい!イス一つ運ぶのに何分かかっているのさ!早く下に降りて庭の……」

夫人の目にうつったのは、懐中時計。

それも壊れている。

「何やってんのさ？それは何かと聞いてんだよ！答えな！」

「違うんです！私じゃない！」

「とぼけんじやないよ！リディルはずっとあたしのそばにいたんだ。あんた以外、ほかに誰がいるってのさ！」

彼女の焦りは頂点に達した。

ちよつとしたいたずらのつもりだったのに…

しかしこれは最初から壊れていたものだ。

正直に話せば軽く済むかもしれない。

「最初から、こ、壊れていました。」

だが夫人の怒りはとどまることを知らない。

「あたしには最後にしつかり動く時計をしまった記憶しかないよ！あんたが持つてるってことは、いたずらでもしてたんだろ？ええ？夫の形見だったのに…」

いたずらしていたことは事実だったから、シャルロットは何も言えなくなった。

それに夫の形見だったとは、何たる不運だったろう。

シャルロットの目から、じわじわと熱いものがこみあげてくる。

「う、うめんなさい…」

「嫌だね!」

心からの謝罪をナタリーはたやすく突き放すと、シャルロットの服をつかんで下の階へと引きずっていった。

秋も中期に入り、上に何か着るものがなくては肌寒さを感じるようになってきた。

葉は緑から黄色や赤へと染まり、よく地に落ちて、幹のそばに積もるようになる。

「やだよ!」

「あんたが悪いんだろう!」

午後四時に入り、あたりの空気が冷え始めるころ、少女の悲鳴が木々にとまるカラスたちの平静をかき乱した。

そして夫人のつんざくような声に恐れをなして、せっかくの木の実を鳥たちはあきらめ、バタバタと飛び立ってゆく。

「これでもくらいな!」

シャルロットを後ろ手に縛り、樽にいっぱいにためた雨水をナタリーが何度も彼女の顔にたたきつける。

「むじ…」

息苦しさでシャルロットは大きく体をゆらしてもがくが、夫人はゆるさない。

抵抗が激しくなると、なぜか水から顔を出させて、彼女の息が安定した頃を見計らって、また樽の中へと顔を押し付ける。

リディル、助けて…

しかし彼女の心の叫びはリディルに届くことはない。

なぜなら、夫人は狡猾にも、事前にリディルに庭の手入れをするように命じておいたからである。

「や、やめ…」

シャルロットは水面に浮かんでいた落ち葉を髪にからませながら、夫人に抵抗し続ける。

「うるさい！あんたが悪いんだ！」

ナタリーは怒りの表情で、ついには彼女の服の後ろのすそをつかんで、そこから震える幼い背中に向かって、水を一気に注いでいく。

「ひゃあ！」

彼女はその瞬間、罪人たちがムチで打たれたときのように、びくりと背中をのけぞらせる。

服はそのせいでびしょぬれになってしまったのだが、夫人はあえて服を脱がせなかった。

結局それはリディルが庭の手入れを終えるまで続いた。

「シャル！どうしたの？」

リディルは夫人に手入れが終わったことを報告しに来た際、ずぶぬれになりくたびれ果てたうつろな目のシャルロットが、縛られているせいで起き上がることもできないまま地面に土まみれになって倒れているのを発見した。

「終わったのかい？」

そばにはにやにやと笑顔で満足そうな夫人の姿。

「どうしたんだいリディル？おっかない顔をしてるじゃないか？」

その言葉には、何か言ったらお前も同じ目に遭わせてやるぞという夫人の考えがあり、リディルは何か気配を感じ取ったのか、口を閉じていた。

「早くその倒れている娘を着替えさせな！汚いったらありゃしない。」

気配を読まれたためだろうか、ナタリーは舌打ちをして、今度はリディルにきつくあたった。

「シャル、しっかりして。大丈夫？」

彼女は二階の寝室へシャルロットを連れていき、物置にあった、もう使われなくなった子供用の服のほこりを手で払うと、シャルロットに着せた。

シャルロットは服を着せられる時も震えが止まらなかった。

震えというよりは、人間が水銀を誤って飲み込んだときに起こすけいれんといったほうがいいだろう。

悪い病気ではなく、おそらく精神的なものだろうが、シャルロットの意志ではどうすることもできなかった。

「殺される。私たち殺されちゃうのよ。」

その日の晩の間ずっと、彼女は一人でそんなことをつぶやいていたのだが、朝になるとすやすやと眠っている彼女がリデイルの目に入った。

きっと体の具合も良くなっているはずだと、このときばかりは二人ともそう思っていたが、ことは単純ではなかった。

「熱があるわ……」

シャルロットの額に手を当てて、リディルは言った。

きつと昨日の体罰のせいだろう。

「熱があるから休ませたい？バカ言うんじゃないよ！生意気なあの娘のために、あたしに仕事しろって言うのかい！冗談じゃないよ！あんたがあいつの分まで頑張ることもなしだよ！あたしはあいつにやらせたいんだ！もともとあの時計を壊したのはあいつなんだ！手を出したら分かってるね？」

時計と言われてリディルは絶望した。

まさか、まさか、自分のせいであの子はあんな目に遭ってしまっただのか？

「私のせい……」

「なんだって？」

とたんにナタリーの恐ろしい視線が注がれる。

「いいえ。なんでもありません……」

なんでもないわけがない。

わかっていたのに、彼女は夫人にそう告げた。

怖い。

怖くて夫人に告げる勇気がない。

「シャルロットを呼んできな！仕事をさせるんだよ、いつもおりに！何してるのさ？早くしな！」

なんとなさけないのだろう。

生まれて初めて感じる罪悪感にリディルは戸惑って、何もできなかった。

シャルロットは目を覚ます気配がない。

「ねえ、シャル？」

彼女が肩をゆすつても、返事一つしないのだ。

こんな疲れ果てた子に、今から働いてくれと、どこのだれが言えるのか？

夫人は言うだろうが、リディルにはまず無理だった。

「だめ。できないよ。そんなこと言えっこないわ……」

見れば見るほど哀れな彼女に、リディルは胸が張り裂けるような思いだったが、ナタリーが後ろからやってきて、かすかな平穩さえも奪っていった。

「どきな！」

彼女はリディルを部屋の隅へと追いやると、すごい勢いで寝ている少女の体をゆすった。

「何やってんだいこの子は！起きるんだよ！起きて働きな！」

「やめて……」

安眠を邪魔されて、小さな声で彼女は抵抗する。

しかし夫人に手で突き飛ばされて、毛布を取り上げられた。

「起きればいいんだ。甘ったれるんじゃないよ！起きろ！起きろ！起きろ起きろ起きろ！」

シャルロットは床に倒れ、突き飛ばされたときに打った背中をさすりながら、ナタリーの叫び声に必死になつて耳をふさいでいる。

そうかと思えば、夫人は彼女の髪を引っ張つて下の階へ連れていかうとする。

「いやあああつ！痛い！髪が抜けちゃうよつ！」

激痛に狂つたような声をあげるシャルロットに、夫人はなおも時計を壊された仕返しを続ける。

「痛いだつて？なら昨日の続きでもあたしは結構だよ！それとも水じゃなくて熱湯を注いでやろうか？もしくは痛みを忘れられるように、髪をバサツとやってやろうか！覚悟しな！丸坊主にしてやる！」

「ダメ！」

夫人は髪をしつかりと握りしめると、ポケットから小さなかみそりを出して、今にもシャルロットの髪の生え際にあてようとしている。

「それだけはだめ！」

突然のことだったこともあり、夫人はリディルに押し倒された。

「何するのさ？こいつをかばうのかい？」

「違うの……」

「こいつをかばうのかって聞いてんだよ！」

「違う！私が悪いの！シャルは悪くない！時計を壊したのは私なの！だから、もうシャルを許してあげて！私のせいなんだから……」

一体だれが黙って見ていられようか？

こんな状況で、誰が己が虚栄に走れようか！

おそらくだれもが、このようなときは利己の一切を意識することなどできるしないだろう。

「どういうことだい？そうか。そうか！」

時計を壊したのはシャルロットではなく、リディルであり、夫人があの時見た光景は、すでに壊れていた時計を、シャルロットが発見したということだったのだ。

「…」

ナタリーは無言だった。

無言のままそばにあったイスを持ち上げて、リデイルのほうへと大きく振りかざす。

やられる…

そのときだった。

下のほうから、コンコンと玄関の扉をノックする音がする。

客人が来たようだ。

それとも新しい子供だろうか？

「悪運の強い娘だね。」

ナタリーはイスを半ば八つ当たりするように元の位置に戻すと、目をつぶって怯える彼女に吐き捨てて下へと降りていった。

急にあたりは静まり返る。

騒乱の元凶が夫人なのだから当然のことだが、あまりの恐怖に彼女たちにとっては、そこが一層静かな空間になりえた。

「ごめんねシャル。ねえ、シャル？」

シャルロットはだらしなく唾液を口からたらし、ピクリともしな

い。

死んでしまったのだろうか？

そんなはずはない。

そんなのは嫌だとリディルは彼女に「ごめんなさい」と言っただけで体をゆする。

何十回かゆすつたのち、彼女は肩に弱々しい、まるで這うともなぞるともいえるような、シャルロットの指使いを感じた。

まだ生きている…

「シャル！本当に、本当に、ごめんなさい！うつつ、うわああああああんっ！」

第18章 かすかに幼い息づかいが聞こえる

ドアをノックする音に、ナタリーは下の玄関まで降りていつて外に出る。

「なんだいあんたたち。一体どこだよそ者だい？」

外には四頭の馬に乗った男たち。

子供の姿はない。

ナタリーは何かあるぞと心の中でそう解釈して、彼らを怪訝の表情で見つめる。

「ここにリディルって子は来なかったかい？」

「リディルだって？」

どういうことだろうか。

彼女の両親はもう死んだときかされていた夫人は、見るからに怪しい男たちを盗賊だと思った。

「そんな子知らないね。」

「そうか…」

男の一人の反応に、またも彼女は混乱した。

強盗にしては意外な反応だった。

では一体誰だろう？

「おいおい、確かか？ ほかはもうしらみつぶしにして、あとはこ
こだけだ。お前、本当のことを言っていない？」

「だから、知らないって言ってるだろう！」

よく分からないが、この者たちはあの子が目当てだということは
理解できた。

とにかく、あんなに都合のいい存在を手放すわけにもいかないナ
タリーは、あくまで強気にでて、髪の高い男に言い放った。

「なあ、本当のことを言ってくれよ。ここがダメなら俺たちはあ
の子が売られたと思うしかないんだ。それも遠くに。あんただって
嫌だろう？ 知らない土地に知らない人々。そんな毎日が続くんだぞ
？」

「もうやめるんだ。もういい。行こう。」

ひげの生えた中年の男が止めに入って、ひどく落ち込んだ顔でそ
んなことを言う。

アンドリューはここ数日、寝る間も惜しんで彼女を探してきた。

しかしどこへ行っても人々は、いない、知らないの一点張り。

遠いところへ、パリにでも行ったのか？

いずれにしろ、彼女は人さらいに遭って売られてしまった可能性が高かった。

「俺のリディル……」

彼は名残惜しそうにナタリーの孤児院の窓を見つめる。

中では少女たちが、何やら抱き合って泣いている。

俺の娘は、あんな感じでいつも何かに怯えていた。

あんな感じで、ときには笑っていた。

「リディル？」

あんな感じではなく、まぎれもなく彼女だ。

「リディル！おいリディル聞こえるか？」

彼の叫び声に、仲間たちも振り返り、喜びの声をあげる。

「よかった、やっぱりいたんだ！おーいリディルーっ！」

四人は力一杯手を振った。

「リディル…」

「えっ？」

彼女はその声に驚いた。

窓を見るとアンドリユーが手を振って叫んでいる。

「お父さん？お父さん！やっぱり来てくれた！お父さん！」

しかし次の瞬間、ナタリーが手を振るリディルの腕をつかんだ。

はり倒されるリディルに、アンドリユーはショックを受けた。

ああ、なんてことを！

「あの女、うそだろ…」

そばで見ていたエミールも顔をゆがめる。

「このままでいいのか？アンドリユー。リディルを取り返すんだ。」

「

オスカーが言った。

「言われなくなつてそうするさ。」

四人は孤児院の前まで来て、ドアを開けようとするがびくともしない。

ナタリーのことだ。

きつと鍵をかけたに違いない。

「あれは誰だい！あんたの手先かい？」

リディルに向かって、夫人は焦った表情でつかみかかった。

「私のお父さんよ。知らなかったの？」

「あの警察の男！あたしに嘘ついたんだ！ああ、なんてことになっちまったのさ！親がいたなんて！」

「大丈夫？」

「気安く触るんじゃないよ！庶民のくせに！」

ナタリーは彼女の手を払いのけると、私の人生は終わったも同然だと泣き叫んだ。

「リディル！」

「お父さん！」

気がつくつと、ドアを蹴破って家に上がりこんだアンドリユーが立っていた。

「ああ、リディル。無事でよかった。また会えるなんて！」

彼はリディルを抱きかかえて、まるで生まれたての赤ん坊のようにあやした。

しかしその直後、ナタリーが泣きながら大声でアンドリユーに言った。

「その子は渡さないよ！」

わたすものか。

この子を渡したら、大事なメイドがいなくなってしまう。

この子を渡したら、私が孤児院で虐待していたことが、この親子によって世間の明るみに出てしまう。

「うわああああっ！」

夫人はついには、怒鳴り声と金切り声が混じった鳥のような声を出して二人を押し倒そうとする。

「わたすものかあ！」

「この魔女め！」

間一髪、遅れて現れたオスカーが、ナタリーの力の入った手を止めた。

そしてこぶしで何度も彼女を殴る。

「オスカーさんやめて！」

意外にも声をあげたのはリディルだった。

ナタリーは憎いが、リディルはこれまで多くの暴力を経験してきたから、これ以上は争いたくないという気があったのだろう。

「ああ、やめるとも。こいつにはお前はもううんざりだろう！こんな魔女には！見る！その証拠にこの子はなんだ！すぐく顔色が悪い！軍医の目はごまかせないぞ？熱があるみたいじゃないか！ほったらかしにするなんて、やっぱりお前は魔女だ！」

ぐったりしているシャルロットを指さして、オスカーはわめき散らす。

「二人とも渡してもらうぞ？」

アンドリユーにためらいはなかった。

昔と違って、今は子を養えるだけの十分すぎる財がある。

「そう、は、させないよ！この、ふたりは、私の、うつつ。奴隷なんだ。」

殴られながらも、痛みをこらえて夫人が立ち上がろうとする。

しかし、途中で力尽きて気を失ってしまった。

「治せそうか？」

アンドリユーはシャルロットを抱くオスカーにたずねたが、彼は

首を振った。

「俺は確かにもと軍医だが、できるのは銃創の傷を治すほうだ。医者を探さないと……」

「急ぐぞ！」

アンドリユーたちは馬にのり、街のほうへと大急ぎで向かっていった。

孤児院に残ったのはただ一人、ナタリーだけだ。

「うつうつ……」

高いうめき声をあげて、彼女は起き上がる。

「ナタリー。おいで。」

ふと彼女の耳元で若い男の落ち着きのある声がした。

「誰？まさか、あんた、そこにいるのかい？」

夫人はきよろきよろと周囲を見渡すと、誰もいない窓のほうを見て、今まで見たこともないような笑顔をして、語りかける。

「あんた、探してたんだ。今までどこに言ってたんだい？」

「君の知らないところさ。とてもいいところ。どうだ、一緒に来ないか？久しぶりに会ったんだ。君の喜ぶ顔が見たい。」

「ああ、もちろん行くともさ。ちょっとだけ待っておくれよ。」

彼女はそれから鏡の前に立って、色が抜けかけた髪をくしで整え、再び窓のほうを向いた。

「また前みたいに冒険できるなんて夢みたいだよ。あんたに会えるなんて…」

彼女の瞳は死んでいた。

体は動いているのに、意識もはつきりとしているのに、おかしいことである。

「ナタリー、おいで…」

声の主は手を差し伸べる。

彼女も手を取り、窓に足をかけ、よじ登る。

「あっはははは！オーギュスト、あははっ！」

それは恐怖ではなく、歓喜の声だった。

その後…

「ウエっ！」

ドサツという物が落ちたにしては鈍い音が混じっており、バキッという何かが折れる音もした。

さらには醜く低い声もした。

「君は苦勞しすぎた。僕も君には苦勞をかけすぎた。ごめんねナタリー。でも、もう大丈夫だ。もう大丈夫……」

男が語りかけた時、土にまみれた彼女の頬に、わずかながらえくぼができた。

結局、何日も経ったのち、警官が来て取り調べを行ったが、どう見てもこれは自殺だと判断された彼女は、孤児院の庭に誰にもみとられることなく静かに眠ることになったのだ。

「せめて彼女の髪を、イル・ド・フランスの大地に……」

第18章 かすかに幼い息づかいが聞こえる（後書き）

次回の更新は28日を予定しております。

第19章 権利を求める人々

とある夜、とある闇空の下、冷たい空気にさらされて、樹の葉たちは熱が逃げないように密集し、ざわざわと退屈な音色を奏でている。

それでも風によって地に落ち、葉の隙間を埋めることはできずに一つ、また一つと枝から離れていく。

死の順番を暗示しているかのような。

「シャル、しっかりして！もうすぐよ。もうすぐ順番が回ってくるわ！」

アンドリユーに抱かれたシャルロットをリディルは精一杯励まし続けていた。

物寂しい夜だというのに、シャンドレーの病院は、どこも患者でいっぱいだった。

医者たちは忙しく駆け回り、ひどい時には軽傷の病人が医者への補助をしていた。

「おい、まだか？もう二時間も待っているんだぞ？薬はまだか？」

「もう少し待ってください。お願いします。もう少しだけ。」

苦情を言う男に、看護婦が謝っている。

「この子、さっきから息をしていないんです！お願いします。お医者様。この子を、うちのピエールをどうか助けてください！」

みずばらしい格好の女性が、一歳にも満たないような赤ん坊を抱えて、たまたま前を通った医者に懇願している姿もある。

「もし？お医者様？」

母親は医者が開いたままの口を動かさずにいることに不安を覚えた。

医者は案の定、一度だけ母親のほうを向くと、真顔になってすぐ向きを変え、足早に立ち去ろうとする。

「お待ちを！お医者様！うちの子は助かるんですよね？何かおっしゃってくださいな！きゃあー！」

母親は沈黙を続ける医者を追いかけることに夢中になっていたため、近くにいた患者にぶつかり転倒した。

「ギャツ！」

母親が転倒したのと同時に、獣じみた得体のしれない泣き声が出た。

その声のした場所だけが、丸い空間となつてがらんとしている。

人々の流れを断ち切る何かがあるようだ。

「ピエール！」

腕に抱いた息子がいないことに気づいた母親はまさかと思い、急いでその場に駆け寄った。

赤ん坊は投げ出されて石階段の角に頭をぶつけて死んでいる。

「ああ、あ、あつ、あああああ！私のピエール！あんまりよ。あんまりだわ！」

そんな母親にさえ人々は何食わぬ顔で通り過ぎ、我先にと薬と医者診察を手を伸ばして追い求める。

「いやあーっ！あああーっ！」

母親はまだ叫んでいる。

近くを通りかかった中年の男が耳をふさいでいるにもかかわらず、ぎゃあぎゃあと声を張り上げている。

「おい、あんた！静かにしろ！うるさいぞ！」

男はついに母親に文句を垂れるが、隣にいた若い女性に逆に怒られた。

「何よ！人が死んでいるのよ？それもあんたみたいに飲んだくれているような奴じゃなくて、赤ん坊よ？あんたこそ黙りなさいよ！この人でなし！ろくでなし！」

若い女は親子のそばに寄ってきて、母親の手を取って落ちつかせ

るが、その手はすぐにはねつけられた。

「触らないで！」

「あんたね、人がせつかく親切にしてやってんのに！」

母親は自分をにらみつける女に向かってさらに激怒する。

「親切がなんですって！そんな押しつけがましいもの、あたしにはいりません！うぬぼれないで！私にはこの子しかいのよ。この子しか…」

「薬をよこせ！この死神め！」

先ほどの医者が戻ってきたことに気づいた男が叫びだしたのを皮切りに、すごい勢いで民衆が押し寄せる。

「薬をよこせバカ野郎！俺たちを殺す気か！」

大衆の波はとどまることを知らない。

医者は今にも押しつぶされるといった具合に、両手をあげておたおたとしている。

しかし、騒ぎを聞きつけた警官隊がやってきて、空に向けて銃を発砲し、病院の入口に立ちはだかった。

「静まれ！おい、貴様ら、静まらんか！」

フランソワだ。

大声を張り上げ、馬に乗りながら大衆を一喝している。

「まずい。ここは逃げないとやばいぞアンドリユー。」

「心配ない。奴には顔を見られていない。それよりこのままじゃシャルロットは助からない。オスカー、別の医者を探してくれ。俺はここでもう少しねばってみる。」

「分かった。できるだけすぐ戻る。」

オスカーは不安そうな顔をしたリディルの頭に一度手を置いて、全速力で馬を駆っていった。

医者などどこにでもいそうなものだが、シャンドレーは地方の街で、パリにくらべたら、まだまだ未熟な医者たちや薬不足で悩まされ、市民たちはそのせいでこぞって大病院へと押しかけるのだ。

「静かにしろ！」

いつまでたっても騒がしい患者たちに、フランソワはしびれを切らして近くにあった樹に発砲した。

さすがに驚き、押し黙る民衆たち。

「いいか、騒ぐな。順序を守れ。撃たれたくなかったらおとなし

く待つてろ！」

しかしひとたび押し黙って同じ行動をしようとすると、愚かにも抜けかけをする者がでてる。

一人の若い男が民衆の海をかき分けて、病院の中へと入っていきうとする。

それに気付いた民衆がドミノ倒しのように次々に、私も俺もとまた騒ぎだした。

「頼む。入れてくれ！このままじゃわしら死んじまう！」

「黙れ！じつとしてろ！おい、お前、戻れ！戻らんと撃つぞ！」

フランソワが老人の相手をしているすきに、他の人々がなだれ込む。

「長官！ダメです、抑えきれません！」

それはまるで戦場も同じであった。

「お父さん。みんなが、みんながおかしくなったわ！怖い……」

アンドリューにしがみつくリディルは轟音を沸かせ、波のようにうねる市民たちと、鳴りやんでは響く銃の音にびくびくと震えだす。

「仕方ない。おい撃て！暴徒を鎮圧しろ！いいか、暴徒を鎮圧しろ！」

「しかし長官…」

「しかし何だ？それが我々の使命だ！やれ！やるんだ！」

「うつ、うつ…」

「早くしろ！でないと貴様を撃つ！」

それでも部下たちは引き金を引くのをためらっていたが、恐怖に耐えかねていた部下の一人が近くにいた老婆に弾を放った。

「うわあああ！」

ついに目をつぶりながらも彼らは市民に向かって発砲する。

そんな！

彼らは助かりたくてここまで来たんだぞ？

なぜ殺すんだ！

なぜだ！

アンドリユーはすさまじい怒りを覚えた。

そしてリディルに目隠しをする。

「よし撃て！容赦するな！」

フランソワの声が聞こえ、叫び声をあげ、逃げまどい、転び、散

っていく人々。

そんな混乱のなか、オスカーが戻ってきた。

「おい、アンドリユー！見つけた！」

「本当か？待ってる。今助けてやるからな。」

第19章 権利を求める人々（後書き）

次回の更新は31日の予定です。

第20章 私はシャルロット

あの男さえ、いなくなればいいのに…

フランソワのやったことに、アンドリューは今だに腹をたてていた。

どうして病人を殺してまで彼らは国家に忠実であり続けるのか？

逃れられない運命なのか？

そんなことをかんがえながら、彼はシャルロットをおぶって小さな石造りの建物に入った。

「おや、お客さんですかな？」

旅行かばんをベッドのわきに置いて、荷物の整理をしている老人が、ドアをノックするとともに出てきた。

「あんた、医者なんだって？」

「ああ。ああそうですも。あいにく今到着したばかりでね、白衣は着てないが、医者でないとええばうそになる。」

老人は笑ってアンドリューにたずねた。

「こんな夜に訪ねてくるなんて、そうとうお困りのようだ。しかも外人嫌いのこの街で。だがよかった。君は私を選んで正解だと思

うだろう。何の用かね？」

えらく聡明な顔つきで、痩せていて、しかしどこか気の抜けるようなしゃべりかたをする男だった。

「この子だ。はら、熱があるだろう？」

「どれ？ほお、これまたかわいい娘さんだ。おっと、失礼…」

アンドリユーとオスカーは、本当に任せて大丈夫なのかと顔を見合わせた。

「ん？うん、うん。うん！」

医者は何度か一人でうなずいて言った。

「かなり風邪をこじらせたようだ。この分だと、体も弱っているから、三日くらい安静にしている必要がある。それにしても辛抱強い子だ。さぞつらかったろうに…」

医者の言うとおり、シャルロットは苦しみながらもしっかりと意識を持ち、ここに来るまで弱音一つはいてはいなかった。

そのせいでリデイルはまたも彼女には貴族としての意識があるということ进行を思い知らされた。

「お医者さん。お水は？」

「水？ああ、ここだ。使つかい？」

彼女はうなずくと、布を浸してしばらく、シャルロットの額の汗を拭いてやる。

「私がついてるわ、シャル。」

何か自分が役に立てることはないのだろうか？

シャルロットの強さに、リディルはこのとき、憧れを抱いたのかもしれない。

「ところで、あんた外国人なのか？」

オスカーが医者にきりだした。

シャンドレーの街では昔から、外人は何をやらかすか分からないから、信用するなという風潮があった。

「ああ、大丈夫。文句があるなら金はいらんよ。今回は試しに来たんだ。この街が、どれくらい外人に対する風当たりが強いのかをね。で、君たちはその類なのかね？ぜひと話をしたい。なんとつて私は、正真正銘のドイツ人、ヨアヒム・リヒトケルナーなんだから。」

「残念だが、俺たちは難癖をつけるようなタイプじゃない。この子を助けてくれたことに感謝しているよ。」

しかしアンドリユーはシャルロットの眠っているベッドの横に腰掛けた時、肩に痛みを感じて顔をゆがめた。

「ん？どうしたのかね？」

「いや、大丈夫だ。」

医者に言われて彼は拒絶しようとしたが、代わりにオスカーが異変に気づいた。

「お前、あいつから逃げた時に撃たれたのか？」

「撃たれた？銃の傷で？ぜひ治さねば、筋肉が腐る。さあ、はやく。」

アンドリユーはできれば娘の前で手術はしなくなかったのだが、リデルからの強い勧めもあって、仕方なく腕をまくった。

「う、うあつ！」

「じつとしてください。娘さんは耐えてきた。あなたも男なら、これくらいでうろたえてはいけません。私なんて、足に三発もくらって、平気で夜通し歩いたくらいですから。若いころの話ですがね。はははっ！」

手術中だというのに、この老人はまるで真剣さがない。

しかしうでは確かで、治療の手際の良さにオスカーもうなるほどだった。

「終わるか……」

「ええ、痛くなかったでしょう？それでもあとは残りますが、これくらいなんともありません。」

「ああ、ありがとう。」

包帯を巻き終わると、彼はシャルロットの金髪をなでつけた。

すると彼女は小さくあえいで苦しそうにするのだ。

「よかった。まにあってよかった。」

そばでヨアヒムの声がした。

それから二日後のこと。

「ここは？」

シャルロットは見慣れない部屋を見渡した。

そばには医者と思われる老人と、四人の男たち。

「誰なの？リディルは？」

どうやら二日も寝ていたせいで記憶が曖昧になっているようだ。

「シャル！」

そとで遊んでいたリディルは、彼女の声に気づいて駆け寄ってく

る。

「よかった！シャル、ごめんなさい！ごめんなさい……」

シャルロットに抱きつくなり、リディルは涙をポロポロとながして謝りだした。

「いいわ。気にしないで。あんなことで怒るひとが悪いのよ？リディルのせいじゃない。」

彼女はリディルをなだめると改めて言った。

「この人たちは？」

「私のお父さん。それでね、ほかの人はお父さんのお友達なの。」

彼女は全てを思い出した。

あの頑強な背中感触、あの自分を包んだ大きな手のぬくもり。

目の前にいる男は、ずっと自分のために行動していたことを理解した。

「あ、ありがとう。」

シャルロットは照れくさそうにアンドリユーに礼を言うと、ベッドから立ち上がって外へ出て行くとする。

「おや、お嬢さんどちらへ？まだ病み上がりの身だ。無理をするもんじゃない。」

ヨアヒムが引きとめるが、彼女は出ていこうとする。

「私、決めてたのよりディル。親に捨てられても、一人で生きていくつて。」

「えっ？」

リディルは何を言っているのよとばかりに、さみしそうな顔をする。

「自分の命なんだもの。それくらい自分で守るわ。ご先祖様に申し訳ないし、いつかは一人になるもの。だからここであなたとはお別れ。これから仕事を探して働きにでるのよ。」

「そんな。嫌だよシャル。一緒にいてくれないの？」

シャルロットは首を横にふる。

「せつかくお友達になれたのに、行っちゃうの？ 私たち、まだ子供なのに、シャルはそれでいいの？」

「リディルの言うとおりだ。」

アンドリユーが口をはさんだ。

「働きに出れば、誰も助けしてくれない。今みたいに君が熱を出したって、誰も診てくれない。はたして生きてゆけるのかい？」

アンドリユーの言葉に、シャルロットはしばらく黙りこんでしま

った。

「出ていくといつても、君にはお金もない。そうだ。今日飲み食いをするために物を買ってお金もない。どうするんだ？俺は君にとつて他人でしかないけど、あの孤児院で見たときから、君のことを心配してた。もちろんリディルも心配してる。」

「…」

「それでも出ていくと言うなら仕方ない。止めることはできない。俺もリディルも、ここにいる全員も。もう少しよく考えてくれないか？君がいなくなってしまうたら、俺たちには君の生死すら分からないんだから。」

「うつ、ぐすつ…」

彼の声を聞いていた彼女は、どういいうわけか突然両手を顔で覆って泣きだした。

貴族の生まれというのは厄介なもので、庶民とは違うことを教え込まれながら育てられる。

それゆえに、どこかで自尊心やらエリート意識やらが高まってくものだ。

「強がっちゃいけないの？うつつ、強がってなにが悪いのよ。」

シャルロットは文字通り、自分の立場にもてあそばれていただけなのだ。

本当はリディルともっと一緒にいたかったし、この若さで社会へ出て行きたくなかったに違いない。

「どうしたらいいの？ねえ教えて…」

アンドリユーの服のすそを強く握りしめて、涙は流れているものの、顔は絶対に見せず、彼の胸にすぎるシャルロット。

「生きる。俺たちと一緒に。リディルもそれをのぞんでる。それとも、ほかに道が？」

「いいえ、ないわ。」

彼女は首を振ると、初めて泣き顔を彼に見せようとする。

しかし、そこには瞳を赤くしながらも笑顔のシャルロットがいた。

「やれやれ、本当に忍耐強いお嬢さんだね。」

ヨアヒムはシャルロットの頑強な貴族精神に、半ば感銘を受けた口調で言ったのだ。

第20章 私はシャルロット（後書き）

次回の更新は11月2日の予定です。

第21章 新たな家と暖炉の炎（前書き）

第21章 新たなる家と暖炉の炎

彼は、この目の前にある屋敷の光景にわが目を何度もこすっては、それが夢ではないことを確認したはいが、とても信じる気にはなれず、啞然としたまま立ちつくしていた。

これは夢でなければ何なのだろう？

自分はこうして二人の娘と一緒に手をつないで、樹の群れの中にある、周りを緑の芝に囲まれた見事な住まいを眺めている。

「リディル。シャルロット。あれがなんだかわかるか？」

二人は声をそろえて言う。

「お屋敷です。」

「本当にか？」

「何を言っているの？お父様の買ったお屋敷よ？私は前に住んでいたからわかるけど、もしかして初めて？」

シャルロットは何をあたりまえのことを、とばかりにアンドリュ―に言う。

「ええ、そうなの。前のお家はね、燃やされてしまったの。とても怖い人たちにね。」

彼の代わりにリディルが答えた。

本当に夢のようだ。

犯した行為の代償がこれならいつ死んでもいいとさえ思ってしまうほどである。

「だんな様、お入りに？娘さんたちはもう先に行ってますよ？」

すっかり執事の服に着替えたヴィクトルとエミール、そしてオスカーが笑顔で答えた。

「これが俺の屋敷だ！信じられない！」

「私、こつちがいい。」

没落貴族と言われて、屋敷の状態は最悪だとアンドリユーは予想していたのだが、リディルが見事に整理されたベッドに飛び移るのを見て、彼は内心ほっとした。

貴族は庶民と金銭感覚が違う。

それに家柄や威信を大事にするから、普通に暮らすぶんには十分すぎるくらいの銀食器や寝室、さらには必要ない絵画もあった。

部屋が整っているのも、彼らの人生が家とともにあることを意味しているのだろう。

没落してもなお、その高貴な身分意識というか、一種の人間の誇り高い尊厳を守っていこうとする心に、彼は敬意の念を抱いた。

「リディルはあわてん坊だな。」

「だってこんなふかふかなベッド、初めてなんだもの。お父様も横になるとすぐに分かるわ。」

彼女は彼の服のすそを引っ張ると、自分の寝ているそばまで連れてきた。

そして彼を抱き枕のようにして抱え込んで、気持ち良さそうに目を閉じる。

「リディルばかりずるいわ。」

シャルロットも彼の背中に寄ってきて、反対方向から手をのび、彼の心臓のリズムに酔うように息づかいを合わせていく。

「ねえ、お父様。」

「ん？何だいシャルロット？」

「なんでもない……」

そう言って彼女はいつまでも彼にくっついて離れずにいるのだ。

今の生活に満足したというわけではないが、シャルロットにとっては昔の生活に戻ることができたという事実が、最大の喜びだった。

親は違えど、時は過ぎ、親は違えど子は育つ。

今こうして彼にくっついていているシャルロットにそう言ったら、たとえば大事なことで深く傷つくに違いない。

彼女は前の親についてどう思っているのか、まだ分からないからだ。

今はそっとしておこう。

「見てごらん。二人とも。世界は広い。」

「ええ。」

「うん…」

気のない返事をする二人。

どういう意味がよく分かっていないようだ。

「窓の外を見てごらんさい。ほら、あそこにとまっているだろうっ。」

屋敷のすぐそばには樹が立っていて、彼の指さした方向には灰色の羽毛を広げてガーガーと、愛くるしい姿の割にはしわがれた声で鳴く鳥が樹の枝にいた。

「かわいいけど、変な声…」

「そうだね。今自分たちが見てきたこと。今まで自分たちが生きて感じたこと。今は無理でも、いずれ分かる日が来る。そうさ二人とも、頭の良い子たちなんだから。」

二人は顔を見合わせるとくすくすと小さく笑って元気にベッドを飛び出した。

「ああ、走っちゃ危ないぞ？」

「平気よ。だってここは私たちの家だもの。誰も襲ってこないから平気よお父様。」

シャルロットとリディルはその後、屋敷の中をぐるぐると走りまわって冒険した。

だが、それに飽きると、午後になったばかりだというのに、疲れて静かに眠ってしまった。

穏やかな日差しがふりそそぎ、風にゆられる紅葉の優しい時間に包まれながら。

「お父様、待って…」

二人とも夢を見ているようだ。

そのため、ときに寝返りを打つたびに、掛け布団の外へ露出する肩が見えた。

細くて真っ白に近い、小さなすらっと伸びる二の腕。

窓から入ってくるそよ風が、しばしば彼女たちの髪をふわりと持ち上げる。

もしそばに画家がいたら、この二人のニンフたちを好んで描いたことだろう。

「旦那様。」

「どうした？」

「ジェルマンという男が、シャンドレーに戻ってきているそうです！」

「……」

第21章 新たな家と暖炉の炎（後書き）

次回の更新は11月5日の予定です。

第22章 誰もこんなこと聞いちゃくれないんだ。けどね…

シャルロットはある夜、夢を見た。

とても恐ろしくて、つらく悲しい夢だ。

自分という存在はそこにはなく、いるのは若い女性と男性。

「あははっ。ちょっとやめてオーギュスト。」

オーギュストという若い男性に走りながら手を引つ張られて笑う女性ですらっとして、どこか気品があつて金持ちの格好をしている。

「走ると危ないわ。またお父様に叱られてしまふ。それに今度見つかつたら、結婚する前におしまいよ？」

男は和やかににやついて言う。

「おしまい？君の子供時代が？よかった！これで僕らは大人になれる。聞いてくれ！大人になれるぞ！」

実に軽薄な笑い声をたて、彼は小さな噴水の水に、靴のまま入りバシャバシャと裾を持ちながら足音を立てて叫ぶ。

「私も入っていい？」

しかしオーギュストは彼女の許可を得る前に、その腕を引き寄せた。

そのせいで足場のぐらついた彼女はバランスを保てずに、浅い水たまりに尻もちをついてしまった。

「あっははは！あーあ。びしょぬれ？びしょぬれよ？あなたのせい。」

そう言いながらも口もとを緩ませて笑顔でいる彼女は、彼の返事を待った。

「僕のせい。そうさ！俺様は君をくらう悪魔だ！食べてやるぞ！」
しかし食べてやる、の意味を勘違いしたのか、彼女は頬を赤くする。

「どうしたのかな？黙っていると食べてしまうぞ？ん？」

「食べる？どうぞご自由に！私はあなたのものよ！オーギュスト！」

彼が彼女の考えていることに気づくと、女性は冗談まじりに腰をくねらせて色気をアピールする。

「ナタリー！」

突然、男性の体が彼女の後ろから折り重なる。

「な、なあに？」

先ほどの態度と打って変わって、彼女は半分怯える声で答える。

「僕は君といられて幸せだ。ずっとこうしていたい。」

「あなたといると、退屈しないわ。毎日が楽しい。オーギュスト……」

「オーギュスト！いやあああつ！」

目の前にはパリの宮殿の前で湧き上がる人々の、いや庶民たちの叫び。

「貴族をぶつ殺せ！やるんだ！」

彼女の瞳には、庶民に衣服をはぎ取られ、倒され、体のあちこちを蹴られるオーギュストの姿がうつる。

「やめてっ！殺さないで！」

しかし庶民の中で、人一倍大きな男がやってきて、持っていたレングで彼の頭を何度も殴る。

「この野郎ふざけやがって！死ね！死んじまえ金持ち野郎！」

男の大声につられて、市民たちはワーワーと半ば笑いにも似た歓声をあげる。

「いや。いやよオーギュスト！私たち、結婚するのよ。結婚するはずだったのにつ！」

悔しさで歯ぎしりしながら、彼女は地べたに座り込む。

すぐそばには彼のはぎ取られて汚れた衣服。

「ああ…」

彼女は嗚咽して片手で震える唇を押さえながら、彼の服を手にする。

そしてしっかりと両手で擦り切れかかった布地を抱いた。

彼のほうは頭から血を流し、すっかり動かなくなっている。

「おい見ろ！金持ち野郎の女だ。捕まえろ！」

人々が突然、オーギュストのそばにいた彼女に気がついて追いかけてくる。

逃げなくては。

その時彼女は服の中で何か固い物に触れる感触に気付いた。

中には金の懐中時計。

「私たちの思い出…」

そう言っただけで彼女は急いでポケットにそれをしまつと、走って物影

に隠れた。

「ちくしょう女！どこ行きやがった！」

「あんなババアほっときなよ。それより、あいつも金持ちじゃないのかい？」

市民たちはどうやら別のターゲットを発見したようで、その場から立ち去った。

よかった、助かった。

安心した彼女に湧き上がってきたのは、怒り、深い恨みや復讐心。

「庶民なんて、庶民なんて！」

「いやあああつ！痛い！髪が抜けちゃうよ！」

貴族も嫌いだ。

このシャルロットって子は、私よりもずっと若くて、痛風のせいで太ったあたしよりもずっとスマートで、おまけに……

「おまけにそのつやのある金髪。私の若いころにそっくりだ！私の幸せをみんなみんな奪ってった！シャルロット。あんたを見てるよね……」

昔を思い出すんだよ。

それは良い意味でも悪い意味でもある昔のこと。

二度とあんな思いなんてしたくないとナタリーは思っていた。

彼と出会ったばかりに。

「聞いておくれよ！この重苦しく野太い声を！このずんぐりした豚みたいな、肩と首がつながった肉を！そしてこの性格！全部変わってしまった！何もかも。」

そして時計も壊れていく。

たとえ壊さなくとも、いつかは動かなくなる。

昔に戻りたいがそれもできない。

できると言われたらどんなことでもやるが、そんなチャンスは一回もない。

全部変わってしまった。

あの事件があった日から。

あれから三十年あまりの時間が経ち、彼女の心はすさみにすさんでいた。

「あのころはよかった。」

彼女はふとそんなことをつぶやく。

「あたしはね、あんたみたいな子は大嫌いなんだよ！でもね……」

突如として彼女は穏やかな口調になる。

「あんなことがなけりや、あんな時代に生まれてこなけりや、あんたをずっと愛していたかつたんじゃないかって、そう考えてたよ
うな気がするんだよ。」

シャルロットは夫人に夢の中で抱きしめられた。

「私の生まれ変わりとはいかないかい？」

「ええ、でも。でも私たちってなんだか似てる。似たもの同士ね。」

眠っていたシャルロットの頬に一粒の涙が流れた。

「うえっ！」

ナタリーがそう言っただけで彼女を抱いたまま頭をもたげる。

「彼女の本当の名は、アントワヌ・ド・ブローージュ・シャロレ。ナタリーは僕の呼んでいた愛称さ。幼いころから彼女とは一緒だった。昔は君みたいにかわいい笑顔ではしゃいでいたのをよく覚えてる。君のお父さんは、一体どんな名前だったの？」

「だんな様！だんな様！」

子の寝顔をそつと見守るアンドリューのところに、ヴィクトルが
あわただしく近づいてきた。

「静かに。二人が起きてしまう。で、どこだか分かったか？」

「はい。奴は社交界によく現れるそうです。」

第22章 誰もこんなこと聞いちゃくれないんだ。けどね…（後書き）

次回の更新は11月8日の予定です。

第23章 社交界で見たもの（前書き）

シャンドレーの騎士団「知と血の断罪」をお読みの皆様、こんにちは。本作品はこのたび4000アクセスを突破いたしました。たくさんの方のアクセスありがとうございます。また、誠に申し訳ございませんが、近々こちらの作品は最終話を迎える予定です。その際には、後書きに最終話との予告をさせていただきます。

第23章 社交界で見たもの

「なんだって？確かか？」

「はい。間違いありません。ジェルマン・フロンベールは社交界によく来るそうです。」

まさか戻ってきたとは意外だったが、これはチャンスだ。

今まで苦しめられた借りを奴に返してやるのだと彼は考えた。

「どうか、ご慎重に。あなたは二人の子の父です。」

「ああ、分かってる。死ぬようなことはしないさ。」

その通り彼には二人の娘がいて、復讐のためとはいえ、身を危険にさらすことには変わりはない。

以前のように、彼の命は一人のものではないのだ。

だからと言って復讐を諦めることはできない。

「忘れるなよ。俺たちは騎士だ。自分だけ平和になって、あとはほおっておくなんてできないってことさ。止めても無駄だぞ？」

「ええ、止める気はありません。私はそんなあなたに惹かれてここまでついてきたのですから。」

ヴィクトルはそう言って一礼すると部屋から出て行った。

「ジェルマン…」

彼が出て行った後、アンドリューは憎しみを精一杯増殖させるようにこぶしに力を入れた。

「いつか、必ず…」

その翌日の夜、彼らはリディルとシャルロットを連れて社交界に来ていた。

危険ではないのかと思いついたが、その日は偶然にも、仮面をつけての出席となっていただけに、彼は思い切つて娘二人を連れてきたのだ。

「お父様。ここは一体何をするとところなの？」

リディルはきらびやかに着飾った人々を見て半ば興奮気味だった。

「ここは大人の世界だよリディル。だから走ってはいけないよ。大人たちが楽しいお話をして、お友達になれる人をさがすのさ。リディルにも新しいお友達ができるといいな。」

「私にはシャルがいるわ。ねえシャル？」

「え、ええ。」

どこかぎこちない口調のシャルロット。

周りの大人たちの視線が自分に注がれているのを見て、もじもじとしている。

どうやら大きい声で話すリディルと一緒にいることが恥ずかしいようだ。

「シャルロットは意外に世話を焼くのが好きなんだな？ いいことだ。それとリディル。ここにいるときは少し小さな声で話をしないと。できるかい？」

「はい。お父様。」

リディルはそんなんじゃないものと照れ隠しをするシャルロットを尻目に笑顔で言った。

しかし彼は立ちあがって前を向いたとき、見知った顔がすぐそばを横切っていったのをちょうど目にした。

その人物は彼に見向きもせず、別の貴族の女性のところに行き、あいさつする。

ジェルマンだ。

彼は仮面をしていたから、ジェルマンはその存在に気付かなかった。

「今ならやれる。」

心の中の彼が突然に語りかけてきた。

「どうしたんだアンドリユー。今なら仮面をかぶっているし、誰にもお前が犯人だとは分からないんだぞ？」

彼はいつ襲われてもいいように、護身用の小さなナイフを貴族になつてから常に忍ばせていた。

「これで奴を後ろから？」

「そうだ。そのあと子供を連れて何事もなかったかのように立ち去る。」

「いいや、だめだ。たしかにジェルマンに復讐をしようと俺はここまでやってきた。でも子供の前だ。」

連れてこなければよかったものを、どうして彼は子供といふのだろっ？

その答えは彼にも分からなかったが、その時…

「うっ、うおおおおーっ！」

なんとジェルマンがタキシードから血を流し、倒れた。

「ああああーっ！」

女性たちの悲鳴とともに会場は大パニックに陥る。

ダレダ？

殺したのは誰だ？

だが混乱して逃げまどう人々でいっぱいの会場の中を、一人の間を特定して見つけ出すことなどではしない。

犯人はどこにもいない、いや、どこに溶け込んでいるのか分からない。

彼に直接刺したのであれば、目撃者がいてもおかしくないのだが、誰ひとりとして、あいつが、こいつが、とは言わない。

「犯人は誰なんだ？どこかにいるぞ？」

社交界にたまたま来ていたフランソワがかろうじて混乱を治めようとしますが、諸悪の根源が見つからない限り、人々はあちこちに動きまわる。

「落ちついて、皆さん落ちついて、私は警察長官です。」

警察という言葉を使ったのは、彼にとって三文の徳であった。

その単語を聞くだけで、人々は救世主でも現れたときのように安心し、落ちついていく。

また、私が警官だという人々が味方のような言い回しをすれば、大衆は身分の枠に関係なく、ああ、こいつはとりあえず味方だから安心だ、だから犯人ではないと思わせることができる。

疑う者も出てくるかもしれない。

しかし自分が次に殺されるかもしれないという状況の中では、落ち着きを取り戻してはいても、心まで完全に冷静になりきれない人々をあざむくことなどたやすいことだ。

フランソワがそんなことをするとは思えない。

悪を何よりも嫌う人物という肩書きがあるからだ。

人を落ちつかせるために、勝手に犯人を仕立て上げるタイプであるかどうかは分からないが…

「この中に犯人がいます。お手数ですが、皆さん所持品のほうを…」

だがフランソワが一人の青年貴族を調べた時、彼の腕が止まった。

「なんだこれは？」

「違うんだ。これは…」

青年のポケットからは小さなナイフが出てきた。

それに血のついたハンカチ。

「これは転んだ時彼女から貸してもらったんだ。ナイフは護身用だよ。」

「そんな話を誰が信じると言ったんだ？犯人はお前だ。」とフランスソワ。

「そうだ！この人殺し！」

「やめて！こないで！」

逃げて遠ざかる人々に、彼は必死に弁明する。

「僕じゃない！本当の事だ！僕はやってないし、この人がどんな人かも知らない。」

「嘘をつくな！凶器はナイフだ。それをハンカチでふいたんだろう？」

人々の黒い魂が見える。

一刻も早く、彼にいらなくなっしてほしい。

消えてほしい。

でないと安心できない。

「ばくじゃ、僕じゃないのに……」

ついに少年の額にフランスソワの銃が突き付けられる。

「皆さん、もう安心です。これが犯人です。ですから、どうぞ引き続き、楽しんで。」

人々は、ああよかったと口々に話し、青年を白い目で見る。

そして口々に、あの鼻たれ坊主とか、鬼だとか、神に呪われるとひそひそと彼に向けて言い放つ。

「お父様、怖い…」

シャルロットが震えている。

いけない、早くここから立ち去らなくては、この子たちに悪い刺激となってしまう。

「さあ、もう行くよ。」

「まだ遊びたい。」

「何言ってるんだリディル。行くよ。」

アンドリューは一礼する入口の両端にいた兵士に見送られ、早々と馬車に乗った。

「人殺し！おい、人殺し！早く出てけ！でないとパパに言いつけるぞ！」

青年の周りを、どこかの貴族の男子がぐるぐると走りまわっている。

それに気づいた父親がやってきて、子供を大事そうに抱えた。

「これ、ジャン！そいつに近づくな！お前が殺されてしまう。」

そして父親は青年にたつぷりと憎しみをこめた声で言う。

「大変だな君は。この若さで刑務所入りなんて。だが、出所しても我々は忘れないぞ。神はお前ではなく、我々の味方をなさるのだ。」

子供の前でなかったら、この父親はもっとひどいことを言っただろう。

眉にしわを寄せて、彼のほうを二度も三度も振り返りながら去って行った。

「よし、歩くんだ。」

彼はフランソワに言われて、一歩一歩足を踏みしめる。

その間も人々は彼が通り過ぎるのを待っているかのように、視線を痛々しいほど注いでくる。

それに笑い声もしばしば聞こえる。

こいつらは、ただ犯人がほしかっただけだ。

身勝手な連中め！

彼の怒りはわきあがり、やがて爆発した。

思い知れ！

「うっ！」

パンというフランソワの銃声が響く。

撃ったのは青年だ。

彼の銃を取り上げ、自分の脳みそをぶち抜いた。

その音を、馬車の中でアンドリューは聞いていた。

そして震えるこぶしを抑え、御者に出してくれと悲しみに満ちた声で言った。

「ジェルマンは死んだ。なのにどうしてこんなに悲しい気分なんだろう……」

第23章 社交界で見たもの（後書き）

次回の更新は11月11日の予定です。

第24章 過去に薪をくべる行為

私を知る者が一人いる。

その者は私のことなどまるで考えずに自由奔放に世渡りする。

シャルロットの心の中の時計は、あの社交界以来、止まったままになっていた。

あの時のあのしぐさ、顔の輪郭、髪の毛、成熟した声色。

全て覚えている。

「シャルロット？どうしたんだ、元気がないな。」

「なんでも、ないわ……」

ベッドの上でアンドリューに話しかけられても、彼女はすっかりしおれた花弁のように、ひざに額をつけてうずくまっている。

「何か怖い夢でも見たのか？話してごらん。きっと楽になる。」

一体何が起こったというのだろうか？

彼はシャルロットを刺激しないように、なるべく優しく話かけた。

「怖い……」

「怖い？一体何が？夢が怖いのかい？」

「いいえ、でもいまさら…」

彼女はなおも否定し続けて悩みを打ち明けられずにいる。

「大丈夫。なんでもいい。素直に言ってくれ。」

その言葉が効いたのか、シャルロットはゆっくりと口を開けた。

「わ、私。ごめんなさい。私、あるとき社交界にいた警官の娘なの。」

警察の長と言えばもう一人しかいない。

アンドリユーはしばらく開いた口がふさがらないと言った具合に、無表情でシャルロットを見つめた。

「お、お父様？」

「ん？まあ、なんだ。いいじゃないか。それは前の父親だろう？会ってしまったからって気にすることはない。」

しかし彼女はまだ何か言いたいことがあるようだ。

「あの人が怖い。でも私ったら変な子なのよ？怖い人なのに、会いたいなんて変な子…」

そついうことだったのか。

リディルと違って、彼女は前の父親のことをあきらめきれてはいないのだ。

よりによって相手はあの長官だ。

あんなくせのある人間のところにいくらいなら、いつそ死んだほうがましだと考えるのが普通だ。

だがシャルロットは…

「シャルロットはお父さん想いの良い子なんだ。少しも変な子じゃない。」

「でも、お父様も、もう一人のお父様で、すごく優しくて、良い人で、私には決められないよ。どうしたらいいの、お父様？」

「おいで、シャルロット。」

彼は泣き崩れる彼女を、膝の上にのせて抱える

「会ってみるかい？」

「いいの？私はお父様の子になったのに、また別のお父様のところへ行ってもいいの？」

「シャルロットが望むならね。どこの人のところにいるのが幸せかなんて、俺に決める権利はないよ。帰りたいんだろう？」

「で、でも。お父様は？お父様は私と一緒にいたくないの？」

本当ならずと一緒にいたい。

あんな男に渡したくはない。

「シャルロット、分かるだろう？」

「っ！」

アンドリユーに抱かれて、その行為が何を意味するのか分からなかった彼女だが、自分を締め付けるくらいに伝わってくる彼の抱擁がいつもと違って、寝巻のレースのリボンに触れるくらいで、まったくもって体に触れていないことに気付いた。

「俺は、お前を愛していないとは言わない。」

「やだ。もっと強くしてよお父様。」

「いいやダメだ。お前は帰りたいはずだ。別れるのはつらい。けど、本当の父親に会えないのはもっとつらい。」

「でも、私、お父さんに、もう二度と帰らないって喧嘩して。だってお父さんは怒るとものすごく恐いの。私もう耐えられないわ。」

そのままシャルロットは涙を見せないように後ろを向く。

父には会いたい、恐くていまさら会いに行けない。

これから待つ不安の中に自分の心を投げ入れたくはない。

いつそ忘れてしまいたい。

しかし、自分にうそはつけないし、父をそれでもまだ愛している。

彼の想像を絶するような葛藤の中で彼女は自分に答えを求めているが、一方で自分は答えることを拒み続ける。

「父に優しくしてくれというのは嫌か？なあ、シャルロット。俺はいつでもお前を見てる。別れたからっておしまいじゃない。っらくなったら戻ってきてもいいんだ。いつでもお話しよう。」

トントンとドアをノックする音がする。

アンドリユーの家に負けなくらい立派な屋敷。

「お、お父様。」

シャルロットは結局アンドリユーに説得されて、フランソワの屋敷にやってきたのだ。

あの恐ろしい男の家に。

「お父様？入れてください。私です。シャルロットです！」

しかし返事はない。

「シャルロット。あきらめるな。もう一度。」

アンドリューはそばの茂みに隠れて彼女を見守っている。

それで彼女は勇気をだして、もう一度大きな声で言う。

「お父様！入れてください！お願い入れて。」

「うるさいぞ。誰だ？」

ドアを開ける鍵の音がする。

シャルロットはごくりと唾をのみ、心の準備をした。

なるべく叱られても耐えなければ、認めてもらえまい。

「ん？誰かと思ったが。」

フランソワは外に出るとシャルロットをぎろりとにらみつける。

「お父様……」

「家出ごっこは楽しかったか？だが私はこんな小娘の顔など知らん。その服、その手入れされた髪。どれも私の知る娘ではない。」

「……」

シャルロットはこれくらいのごことは予想していた。

だからどんなことを言われても耐えるつもりでいた。

しかし、耐えろと自分に言い聞かせるほどジワジワと涙が出てくる。

それでも顔をあげて言った。

「私がいけなかったの！だからお屋敷に入れてください！お願いします！」

「ふふっ……」

その笑い声に、シャルロットは許してもらえたのかと、小さな希望の光を胸のうちにともしてゆっくりと前を見る。

「ふざけるなあ！」

希望はついえた。

「お前は自分から屋敷を出て行ったんだぞ？それを今さらおめめと戻ってきて、赦してくださいだと？図々しい！お前にとって世の中はそれほどお気楽に見えたのか！私の前から消えろ！」

消えろ……

シャルロットの耳に、その音が幾層にも重なって伝わる。

「待ってお父様！私を置いていかないで！見捨てないで！」

「うるさい！貴様のような女など必要ない！帰れ！」

「待って！待ってよ！いやあ……」

彼女は貴族の誇りも捨てて、泣いて彼にしがみついている。

「もうやめろ！やめるんだシャルロット！」

アンドリューはついに我慢できなくなって茂みから這い出した。

しかし、彼女のもとへと近づこうとした時、ピストルが向けられる。

「なんだ貴様！」

うかつに飛びだして来たのが間違いだった。

フランソワにとっての怪しい人物はじりじりと距離を詰められ、手を挙げながら後ずさりする。

「こ、この子を保護していたんだ！」

「そうか、それは良かった。これからはこいつを頼んだぞ？」

フランソワはあくまでシャルロットを受け入れる気はないようだ。

「そんな、嫌よ！お父様！」

だが彼女があまりにもしつこいと感じたのか、フランソワは芝生の上にその小さな体を突き飛ばした。

「おい、お前！」

「なんだ？文句があるのか？お前みたいなコソ泥も情があつたのか。」

アンドリユーの中で、その瞬間何かが壊れた。

夢中になつて彼に飛びかかる。

それも、フランソワが銃を突きつけているにも関わらず、近くにあつたレンガで彼の頭を砕こうとする。

「仕方がない。お前の無愛想でくだらない死に付き合つてやる！」

フランソワはそう言つて冷静な顔つきで引き金に手をかける。

カチツ。

不発だ。

「うおおおおおっ！」

アンドリユーがいきり立ち、シャルロットがやめたと手を伸ばす。

なぜだろう？

フランソワは顔色一つ変えない。

有効な手段があるわけでもないのに…

死を恐れていないのか、それとも彼には情がないのか？

しかし彼が笑っている姿をアンドリューはこれまで何度も見てきた。

「すまない、クロード…」

それとも自分の生き方を、決して曲げることのなかったものを罪として感じていたのだろうか？

彼は倒れた。

一体クロードとは誰のことだろうか？

「ああ、あ！いやああああーっ！お父様のバカ！大嫌い！大嫌いよー！」

アンドリューを残し、彼女は立ち去る。

それ以来、シャルロットはアンドリューと口をきかなくなった。

第24章 過去に薪をくへる行為（後書き）

次回は最終話です。11月16日に更新する予定です。

第25章 知と血によって安らぎを得た

私の心は今無に帰そうとしている。

これまでに多くの血が流れ、それでも私が事無きを得たのは偶然にすぎない。

だがフランソワを殺してしまったということは偶然だという言葉では、黒い部分を覆いつくせるほどのものではない。

シャルロットは本当の父親が亡くなった事で、しばらく口をきいてはくれなかった。

しかしながら、子供心というものは移りやすいこともあり、すでに彼女はアンドリユーと普通に、また以前と同じように会話を弾ませていた。

しかし表面的にはそれでも、人の心というものは分からない。

憎んでいた、あるいは想いをよせていたりするが、ほとんどの場合はそういうことは伝わりにくくなっている。

そう、彼女もある想いをを抱えていた。

それをアンドリユーに思い知らせてやろうと、そっけない反応をしたり、離れてみたりはしなかった。

彼に自分の気持ちを分かってほしくなかった。

これはよくありがちな、あなたに私の気持ちの何が分かるのか、
というものでもなかった。

彼に分かつてもらうことで、自分だけの父親像の横に別の存在が
入り込むのを恐れた。

すなわち、分かる分からは抜きにして、私とフランソワの空
間に入ってくるなということである。

これもまた表面的ではない。

何も言わないから、これ以上はもう実の親子の関係についてかか
わるな。

あなたに私とフランソワお父様の居場所を壊されたくない。

心の中にそっとしまっておいた居場所を。

でて行くのかとも考えた。

だがそれはやめた。

金の問題ではない。

憎しみの対象がそばにいれば、心が当然乱れるが、同時に亡き父
の想いに熱い情熱を注いでいられるからだ。

それだけでフランソワがすぐそばにいたような気になるから…

ゆえに彼女はとどまる方を選んだ。

しかし、それも長くは続かなかった。

「触らないで！」

それは突然に起こった。

父と昔歩いたシャンドレーの並木道の風景を思い浮かべ、じつと窓の外を眺めていた時、アンドリユーに手を握られた。

入ってこないでよ、この人殺し！

私のお父様を殺したくせに！

心の窓を開けていたスキをつかれたような気分になったシャルロットは、手を握らされたことを、恥とも罪とも思って激怒し、彼の手を払いのけた。

「シャルロット？」

「…」

ふいに彼女は押し黙る。

唐突にこんな行動をとってしまうなんてと、意志の弱さを感じた

のだ。

父から受け継いだ精神を、誇り高い人格をこんな男にぐしゃぐしゃにされてしまったと…

「ごめんなさい、忘れて…」

アンドリユーを残して、シャルロットは頬を涙で濡らしながらその部屋を出て行った。

口をきかなくなった彼女は、彼にとって苦痛そのものだった。

だが今は前よりましになってきたと思い込んでいた自分が苦痛で仕方がない。

「俺は、間違っていたのか？なぜあんな男に！なんでフランソワのような恐ろしい男にあの子は！あの子はなぜ尊さを覚えているんだ！」

「やめてっ！言わないで！入ってこないで！」

シャルロットの声がする。

ドアに隠れてアンドリユーの様子を探っていたのだ。

「私の、私とお父様の世界を邪魔しないでよ人殺し！」

人殺し…

彼は全身の力が抜けていくような気がした。

そうして窓際の壁に寄り掛かろうとしたが、窓は開いていた。

「あっ！」

シャルロットが叫ぶがすでに遅く、彼はバランスを崩して頭から逆さまになって空中に投げ出された。

つい感情的になってしまった私のせいだ。

「ああ……」

アンドリユーが落ちていく。

あわてて彼に手を差し伸べるシャルロット。

間に合わない！

風を切る音が耳に入ってきて、しばらくしても途切れることはない。

彼の眼は穏やかだった。

穏やかな心で彼女を温かく包みこむような、いつもと同じ目をしていた。

彼女に後悔しろという想いは込められていない。

しかし瞳の色は、励ましの言葉や優しさを訴えかけてくることはない無色。

彼にはもはや何も残されていなかった。

たった一つの生き方を否定された彼の命に、色はなくなった。

彼が転落した事は偶然ではなく、必然かもしれない。

単なる事故と言えば偶然、しかし、彼の意志や精神について語った時、それは覆る。

アンドリューは民衆の持っている精神の奴隷にはならなかった。

ああ、と瞳を大きく開いた彼女の目の淵からは、見えないのしり声。

自分とは別のもう一人が、言ってしまったんだと追い詰めていく。

叫び声が封殺されるほどのショックと自己嫌悪。

力が入らず、そのままへたり込んで床にひざをついた。

「あああああーっ！お父様！お父様っ！」

下からリデイルの声が聞こえる。

きつと彼に気付いたのだろう。

この人殺し！

リデイルが言ったわけでもないのに、シャルロットの耳にそれが

聞こえるのだ。

フランソワを彼が殺した時、彼女は憎しみでいっぱいだった。

ののしるのは人の勝手だが、それが自分についてまわるときには、人は卑しいながらも自分を守ろうとする。

「シャル！お父様が、お父様が！」

「知ってる。」

悲報を知らせにきたリディルに向かって、彼女は放心したように前を向いて、ただ淡々と答える。

「どうしてここにいるの？」

「知らない。」

リディルは彼女のいる位置、そして彼女の身边に最近起こった事を重ねる。

「あなたがやったの？やっぱりお父様を赦してないの？」

「違うわ！」

「うそつかないで！私、分かってるんだから！」

「事故なの！どうしようもなかったのよ！」

彼女は必死に事情を説明するが、最愛の存在を消されたリディル

は一步も引かなかった。

「大うそつき！お父様をシャルが殺した！どうしてなの？あなたは、シャルはお父様を憎んでただわ！私もシャルが憎い！もう知らないんだから！」

「信じてよ！ねえリディル！信じてよ…」

「…」

部屋の中でシャルロットはひざを抱えて床に座り泣いていた。

リディルが怒って部屋を出て行ってから何時間も経っていたが、彼女は全くそこから動かなかった。

人に憎まれる気持ちというのは、しかもこれほど黒い部分を傷として負っている者の気持ちは、めったに経験しないだけに、ほとんどの人には何一つ分からない。

ひとたび沼に落ちてしまえば、味方に押し沈められ、敵にはもちろん引きずりこまれ、二度と這い上がる事が出来ず、こうして彼女のなかで闇の心が出来上がっていく。

人を憎む心と、絶対に消えることのない圧倒的な憎悪に体中の血液が支配されていく。

あるいはその対象が穏やかな心を持つ者なら死神に魂を刈られ、何もできないカラの人形となる。

今のシャルロットはまさにそれだった。

「シャル、いるの？」

先ほどとは比べ物にならないほど冷静になったリディルが戻ってきてドアを開ける。

「さつきはごめんね。言いすぎてしまったみたい。」

「…」

シャルロットからの返事はない。

ただ一点に濃い影ぼつしができるほどに、まばたきもせず視線を集中させている。

「シャル？」

リディルが体をゆするが、何も言わず、彼女の瞳の色はあせたまま生氣を取り戻すこともない。

そして…

「もう疲れたわ。ねてくるね。」

静かにそう言って、まだ昼下がりだというのに、立ち上がり寝室へと向かっていく。

「お父様……」

リデイルのほうも、彼女を元気づけようといつものようにふるまっていたが、やがてシャルロットがいなくなると、今までためていた悲しみを一気に噴き出すようにわんわんと号泣した。

「いやだよお父様。戻ってきてよ。こんなの嫌よ!」

やがて日が暮れ、オスカーが戻ってくる。

「おい! アンドリユー! しっかりしろ! いやだああああ!」

「はあ……」

数日たっても、ベッドから彼女が食事の時以外降りてくる事はない。

毎日ため息ばかりついていて、リデイルと話もしない。

食事の回数も、ここ最近では三回から二回に減った。

頬はこけ、たとえ笑顔をたまに見せる事はあっても、浮き出てきた眼のふちのつがいや乱れた髪のせいで、果てた兵士のような不気味な顔つきがあるだけで、かえって話し相手が目をそらしたくなるような様である。

食事の量はさらに少なくなって、シャルロットはそのときからよく咳をしたり食事中に吐くことが多くなった。

体の栄養不足による免疫の低下と、極度なストレスのための食欲不振により起こる拒食症状と医者に言われた。

一日中寝ているために筋肉は落ち、手足はおろか、あばらの一本にいたる細かい骨の筋までもが鮮明になってゆく。

そして翌日、オスカーは彼女を起こしに来た時、愕然とした。

ベッドに黄色く湿った大きな染みがひろがっている。

ベッドの上に放尿しているという意識さえなく、人に見られても声一つ上げないシャルロット。

こんなことは、この年の子供ならよくある事だが、今は異常の一言につきる。

仕方がないからとオスカーは、彼女のシーツを取り換えようと近寄っていく。

すると彼女はゆっくりとオスカーのほうを向いて、彼の視線の先を見る。

「あ。あ。や、やだ。いや！やだやだやだやだ、やだよ！」

突然、オスカーに抱きついてくるシャルロットはところかまわず叫び、こぶしを彼の胸にドンドンと当ててくる。

ここにきて急に無意識の恐ろしさを知り、自分の体がもう取り返しのつかないところまできてしまったのだと感じ、痛々しいほど死に敏感になった。

そんな彼女をリディルもひそかに見ていた。

そして自分の罪悪感が膨らみ、今にもはぜそうになったときは、なんとかしてごまかそうと努力した日々が続いたものの、この事件でそれは完全に意味をなさなくなった。

彼女たちに父親はいない。

たったそれだけのことと言うべきではないが、人が一人いなくなっ
てから、全てがかみ合わなくなっていた。

「もう嫌だよオスカーさん！私、耐えられないよ……」

リディルは彼女の部屋に入ってきて彼に言う。

しばらく二人にしてやったほうがいいだろう。

彼は二人にじっくりと話をする機会を与えれば、何かかわるの
ではないかと、そう思い一人で外に出た。

「リディル。フフ。太ったのね？あまり食べすぎは良くないわ。」

二人になつてから、シャルロットは泣きながらも無理やり笑みを
つくつてそんなことを言う。

「太つてなんかない。シャルがやせてるのよ？ねえお願い。昔の
シャルに戻つてよ！私もうこんなの見ていられないわ！お願いよ…」

尿のおいにするベッドにもお構いなしに、リディルは彼女の背
中に額を当てて、極度に細くなった手首を両手で持った。

「こんなになるまで。私たちずっとお友達でいたい。お友達でい
たいよシャル。お父様はもういないのよ？」

心の友はシャルロットであり、シャルロットは心の友である。

全てを失つたりディルにとっては、彼女の存在はそれほどまでに
大きくなっていた。

それを最後に、二人は別のベッドに移つて、服を全部脱いで裸に
なり、身を寄せ合うようにして毛布をかぶった。

それからどれくらいの時がたったのか分からない。

目を覚ました時にはシャルロットは起きていて、あたりは真っ暗
だった。

彼女は一睡もできていない。

「シャル、寝なくちゃだめよ！死んじゃうわ！」

彼女はシャルロットが、もう二日間起きていたのを知っていた。

「もう無理なのリディル。私、神様に地獄に落とされるのよ？おかしいでしょ？」

気が気ではないリディルに、彼女はこの期に及んで笑っている。

そんな彼女をリディルはベッドに押し倒して自分の胸に密着させる。

「ダメ！」

今にも泣き崩れそうな彼女にシャルロットは弱々しく腰に両手を回してくる。

「こういうことしてるのって、私たちだけかも。こうしていると二人が一緒になっているみたい。でも、もうすぐ終わっちゃう。さつきから胸のあたりがおかしいの。何かがつつかかって、息ができないっ。」

リディルは彼女の胸に耳を当て、その鼓動を聞く。

「はあ、はあっ。リ、リディル。く、苦しいっ！」

「シャル！どうしたの、しっかりして！シャルまで死んじゃうの？そうしたら私はどうしたらいいの？お願い！一人にしないでよ！」

「一人は、嫌？」

「嫌に決まってるでしょう！」

「はっ、は、はあ、はあっ！な、なら、一緒に来る？」

そのとき彼女はシャルロットは自分を誰よりも愛していたのだと気付いた。

自分はそんな気持ちにも気づいてあげられなかった。

「来る…」

「え？な、なあに？」

「行くわ！私、シャルロットと一緒に逝きたい！」

彼女は急いで壁にかかっていたレイピアをとってくると、自分の腹にとがった部分を向ける。

「はあっ。ほっ、本気？」

「ええ。」

迷いはなかった。

もうこれ以上私を苦しめないでほしい。

そして永遠の友達でいてほしい。

「うつ、ぐっ！うつっ、あ！あ、あぐっ！い、いたい！痛いよシャル！」

涙声になつて彼女は体をびくびくとこわばらせて、苦々しい顔を
し、激痛のあまり閉じない口を歯茎だけでも合わせて目をつぶり、
ぎりぎりと歯肉にめり込むほどに力を入れる。

「リ、デイル。か、かたく、な、りす、ぎよ。もっと、力、抜
いて。はあ、は。そうすれば、楽…」

「もう、だめ…」

大量の血の海は二人を包み、彼女たちの魂は神のもとへと召され
た。

「ずっと昔、もう何年も前のことよ。まだ優しかったフランソワ
お父様と私はこの道を歩いていたのよ。そして私は歌を歌うの。」

シャルロットはそう言つて、陽気に歌を口ずさむ。

「小鳥さん、こんにちは。小さな小さな小鳥さん。でもお母さん
はどうしたの？大丈夫。これからは私があなたのお母さん。お母様
と呼びなさい」

「シャル。待つてよ。」

後ろからリデイルが手を振って追いかけてくる。

一面の白いカモミールの花畑の中を、穏やかな風を切り、走って

くる。

「私もこの道、いいえ、この花畑。見たことある。あの人の夢の中で。」

「本当？私は知らないけれど、今からでもいいよね？」

「ええ。約束よ？」

リディルは彼女の小指を自分のものと交差させて言う。

「何があっても、私たち一緒よ。」

シャルロットはにっこりと笑ってリディルの訴えに応えた。

「動かないで。じっとしてるんだよ二人とも。」

突然、後ろから声がした。

それも数人。

振り返ると、アンドリユーとフランソワ、その横にはナタリー夫人と若い男の貴族。

フランソワの後ろには新米警官が立っていた。

「いいよ。そのポーズでいこう。二人ともかわいいよ。」

彼らの向かいには、スケッチをする老人。

画用紙には描きかけの彼女たち。

筆を動かし、彼女たち二人の瞳を色づけしていく。

「うちの子はかわいいと思うか？」

フランソワはアンドリユーに問い、彼は十分愛くるしいと言う。

いつものような陰険さは、そこにはひとかけらも見られない。

なぜだろう？

「それは、ここには善悪なんてないからだと思います。だから私たちはこうして対立せずにいるのです。私たちは、対立するために生まれてきたわけではないのですから……」

クロードがつぶやいた。

「おじさん、描けた？」

シャルロットが無邪気にはしゃぐとした時、ナタリー夫人の大きな手が髪に触れる。

「あんたにあげるよ。大切に使うんだよ？ほんと、私の若いころにそっくりだ。」

そう言い彼女はシャルロットに時計を持たせた。

懐中時計は見事に直っている。

「ありがとうおば、お姉さん！」

ナタリーの顔は驚くほど若かった。

それでつい彼女の口からはお姉さんという言葉がでた。

「さあ、出来たぞ。」

老人とともに彼らは笑っている。

それはよく晴れ渡った日の、午後の事であった。

「それからオスカーたちはお屋敷を去ったの。そのあと彼らがどこに行ったかは誰にもわからないわ。ただね、お屋敷を晴れた午後
の日に訪れると、少女たちの笑い声が聞こえるの。みんながそう
わさするのよ？」

一人の少女が眼鏡をかけた老人に、物語の結末を告げた。

「人はね、そうやって大切な存在が永遠に取り戻せなくなったとき、初めて争いのあやまちに気づくの。どうして死ぬ前に気づかないの？彼らは夢の中でしか幸せになれないの？」

しかし老人に言いかけた彼女は、はっとして急いで付け加えた。

「いいえ。確かにそうだと思うけど、私は気づいたわ。気づいた

のよ？そう、死んじゃう前に気づいたの、おじい様っ！」

「そうか。よしよし。リディルは偉い子だな。将来は作家さんになれるさ。」

降りしきる雨が窓ガラスをパラパラとたたく部屋の中で、話し疲れたリディルは彼の腕の中で幸せそうに眠った。

それは一八八〇年のパリの一角でのこと。

共和政という名の人の輪が一つになっていた日のことである。

第25章 知と血によって安らぎを得た（後書き）

こんにちは、作者です。本作品はこのたび無事に最終話を迎える事ができました。今までアクセスしてくださった読者の皆様、本当にありがとうございます！

さて、最終話はいかがでしたか？暗い作品であることは十分自覚していたため、最後くらいはある意味明るくし、ハッピーエンドという形に仕上げてみました。これは、人なら誰しもハッピーエンドを望むであろうという私の憶測から導き出した結論です。もし、バッドエンドを希望されていた方がいらっしゃった場合は、深くお詫びもつしあげます。すみませんでした。

最後に、すでにご存じの方もおられると思いますが、ファンタジー小説を、ソリデユスの権章？（ゼノンティアヌスの蒼玉）というタイトルで10月31日より掲載させていただきました。しかしながら、前作の途中で次作品が出されると、そちらのほうが気になっってしまう、前作の雰囲気こそがれるという方もおられると思います。ゆえに、あえて大々的には次作の存在を告知しませんでした。もし興味をもたれた方はぜひお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4577h/>

シャンドレーの騎士団～知と血の断罪～

2010年10月14日23時20分発行